

教育課程研究指定校事業

「幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るための
教育課程の在り方に関する調査研究」

研究報告

—平成20・21年度指定—

平成 22 年 7 月



文部科学省
国立教育政策研究所
National Institute for Educational Policy Research

教育課程研究センター

はじめに

国立教育政策研究所教育課程研究センターは、国の責務として果たすべき義務教育の機会均等や一定以上の教育水準が確保されているかを把握し、教育の成果と課題などの結果を検証するため、特定の課題に関する調査や各種指導資料の作成、全国学力・学習状況調査の問題作成等を行うとともに、研究指定事業を実施しております。この事業は、各学校において学習指導要領に基づく教育課程が円滑に実施されるために、国として特に重要な課題について研究テーマを示し、指定校や指定地域での実践研究を推進するものです。その研究成果は、各学校における教育課程の編成、指導や評価の改善などのために提供されるとともに、今後の教育課程や学習指導の改善に向けた資料・データとして、中央教育審議会への報告等が行われています。

教育課程研究指定校事業「幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るための教育課程の在り方に関する調査研究」は、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図り、幼児期から児童期への発達の連続性や学びの連続性を確保するための教育課程や指導の在り方について実践研究を行うものです。

本冊子に掲載した研究報告には、「幼稚園教育と小学校教育との接続に配慮した教育課程の編成」、「発達の連続性を確保するための指導内容や方法の工夫・改善」等の観点からお取り組みいただいた貴重な実践例と、その成果や課題が掲載されております。これらの事例が全国の学校や教育委員会等の参考となり、今後の学校教育の改善充実に資することを期待しております。

最後に、2年間の調査研究に熱心にお取り組みいただいた研究指定校の皆様、関係教育委員会等の皆様に心から感謝の意を表します。

平成22年7月

国立教育政策研究所
教育課程研究センター長

作 花 文 雄

教育課程研究指定校事業研究指定校・担当官一覧(平成20・21年度指定)
 ~幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るための教育課程の在り方に関する調査研究~

都道府県名	学校名	備考
1 北海道	札幌市立かっこう幼稚園	公立
	学校法人東学園美晴幼稚園	私立
	札幌市立月寒小学校	公立
25 滋賀県	長浜市立(旧虎姫町立)とらひめ認定こども園	公立
	長浜市立(旧虎姫町立)虎姫小学校	公立
34 広島県	学校法人伊達学園月見幼稚園	私立
	三原市立三原小学校	公立
37 香川県	香川大学教育学部附属幼稚園高松園舎	国立
	香川大学教育学部附属高松小学校	国立
39 高知県	香南市立野市幼稚園	公立
	香南市立野市小学校	公立

担当官

日置 光久	文部科学省初等中等教育局視学官
篠原 孝子	国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官
田村 学	国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官
杉田 洋	国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官
赤堀 博行	国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官

平成20・21年度教育課程研究指定校事業 研究成果報告書

ふりがな 学校名	さっぽろしりつ 札幌市立かっこう幼稚園 ようちえん
-------------	---------------------------------

校長名： 綿屋 圭子

所在地： 北海道札幌市豊平区月寒東3条7
丁目7-2

電話番号： 011-852-1230

⑤	幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るための教育課程の在り方に関する調査研究 (平成20・21年度)
---	--

幼小共通の研究主題	
幼稚園と小学校の円滑な接続に関する連携体制の構築	

I 研究指定校の概要

1 学校・園・地域の特色及び実態

<子どもの実態>

・今までに経験のあることや自信のある遊びには意欲的に取り組むが、新しい事に警戒心が強く、出来る出来ないといった結果を気にして、いろいろな遊びへの意欲がもてない幼児が増えてきている。

・素直で明るい幼児が多い反面、コミュニケーション力の不足や基本的な生活習慣の形成が遅い幼児が増えてきている。

<地域・本園の実態、課題>

・幼稚園と近隣の小学校の連携に関しては、徐々に進んできている。本園でも、ここ数年幼児と児童の交流を積み重ねてきた。しかし、教師間で接続を踏まえた教育内容や育ちのとらえなどを理解し合うまでには至っておらず、連携体制の構築が課題となっている。

・公立幼稚園と私立幼稚園との関係において、研究実績や課題などの情報交換や相互理解などが十分に行われているとは言いがたい。しかし、研究の成果を互いに提供、共有しなければならないという意識は強くもっており、課題と感じている。

2 学校の概要

(幼稚園)

	3歳児	4歳児	5歳児	混合	合計	
学級数	1	1	1	0	3	
園児数	男	5	17	16	0	38
	女	14	18	19	0	51
計	19	35	35	0	89	

教員数 10名

II 連携体制

1 連携校・園名

自校	札幌市立かっこう幼稚園
連携校	札幌市立月寒小学校 学校法人東学園 美晴幼稚園

2 幼小連携教育研究協議会の構成員

所属・機関・職名等
・札幌市小学校長会 校長
・札幌市立幼稚園長会 園長
・私立幼稚園連合会 園長
・PTA代表者
・札幌市豊平区保育子育て支援センター 所長
・札幌市立小学校 校長
・幼稚園 園長
・学識経験者
・札幌市教育委員会 学校教育部指導担当部長
・札幌市教育委員会 指導主事

III 研究の内容及び成果等

【2年間の研究成果の要点】

○実務者会議、アンケート調査、授業参観などを通して、あらためて幼稚園生活で大事にすべき“遊びを通しての学び”のポイントが確認できた。

- ・人の中にいる安心感をもつ
 - ・心を寄せて人の話を聞く
 - ・考えや思いを言葉で伝える
 - ・失敗を乗り越える経験をする
 - ・物事を興味をもってとらえ、探究していく楽しさを味わう
- 等

○保育参観，保育参加，その後の協議などを通して，幼児が遊びの中で何を体験しているのか“遊びを通しての学び”の一端を感じ取ってもらうことができた。

*特に，保育の具体的な場面から，幼児期の経験が小学校生活にどのように結びつくか，幼児期にどのような経験が必要かなどについて話し合うことができた。

○小学校との交流を物的環境面，人とのかかわりの面から実践したことで，幼児が小学校のイメージを広げたり，親しみや期待感をもったりできるようにするための手立てが見えてきた。

- ・小学校の先生とかかわり，親しみをもてるようにする。
- ・実際に小学校に行く機会をもち，五感を使って体感できるようにする。
- ・小学生の学習風景や作品などを見る機会をつくり，憧れをもてるようにする。
- ・小学生と交流する機会をもち，かかわる楽しさや安心感をもてるようにする。

等

1 研究主題と研究の主な取組

(1) 研究主題設定のねらい

- ・幼稚園から小学校に進学する際の段差を解明し，円滑な接続の在り方を探る。
- ・幼稚園から小学校への発達や学びの連続性をとらえ，その発達過程に即した『ふさわしい生活の在り方』を探る。
- ・幼小の教育内容，指導方法等について，教職員の相互理解を深める。

(2) 2年間の主な取組

【幼稚園と小学校の円滑な接続における課題を探るために】

- 小学生の実態把握
- ・アンケート調査

- 平成20年度
 - ・学習指導要領，小学校の教育課程の学習
 - 教師同士の相互理解
 - ・実務者会議
 - ・保育，授業参観
 - 交流実践
 - ・小学校教諭と幼児・保護者の交流

- 平成21年度
 - 【幼小の円滑な接続を図る方策を探るために】
 - 幼児期にふさわしい園生活の在り方の見直し
 - ・教育課程・指導計画の見直し
 - ・接続期カリキュラムの作成
 - 教師同士の相互理解の深化
 - ・保育参加，協議の実施
 - ・実務者会議の継続
 - 交流実践
 - ・月寒小～物的環境面からのアプローチ（ゼロタイム交流）
 - ・月寒東小～人とかかわりの面からのアプローチ（2年生との交流）

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 小学生の実態把握

① 研究課題

- ・近隣小学校の1年生の実態を調査し，小学校における課題や幼稚園教育における課題を把握する。

② 取組

ア アンケート調査

- ・修了児が複数名進学した小学校9校を対象に，以下の項目で小学1年生の実態を調査。（①学習面②言語面③友達とかかわりの面④生活習慣面⑤運動面⑥集団行動・規範意識面⑦小1プロブレムに関して）

回答数は33人

イ 学習指導要領，小学校の教育課程の学習

③ 成果（・）と今後の課題（★）

<アについて>

- ・資料1（結果の一部を抜粋）参照
- ・小学校生活において課題となっていること、幼稚園生活の中で見直しが必要なこととして「人の話を聞く、思いや考えを表す」「友達とのコミュニケーション」「家庭との連携、啓発」の3点を見出す。

<イについて>

- ・学習指導要領に関しては、各教科の中で、言語活動の充実、特に生活科において伝い交流する活動の充実が求められていることが分かった。
- ・教育課程に関しては“感覚（数、量、体など）”“話す、聞く態度、能力”“意欲（進んで〇〇しようとする態度等）”等のキーワードを確認することができた。

(2) 教育課程の見直し

① 研究課題

- ・学びの連続性を踏まえ、幼児期にふさわしい園生活の在り方を探る。

② 取組

- ・視点を絞り、教育課程及び指導計画を見直す。
- ・年長後期から小学校1年生5月位までを接続期ととらえ、『接続期カリキュラム』として整理する。

視点1 人の話を聞く、思いや考えを表す。

視点2 人とのかかわり

視点3 家庭との連携、啓発

③ 成果（・）と今後の課題（★）

- ・資料（指導計画抜粋）参照
- ・小学校への学びのつながりを踏まえたうえで、幼稚園教育の課題をもとに、幼児期にふさわしい園生活の見直しを行うことができた。
- ・特に、“聞く、思いを表す”等の部分を視点に定め、発達の姿を共通理解し援助の在り方を考えたことは、幼児のコミュニケー

ション力や豊かな心情をはぐくむ教師の力量を高めていくことにつながった。

★子どもの発達や学びの連続性を意識し、互いの教育がつながるように実践検証し、修正していくことが今後の課題である。

(3) 教師同士の相互理解

① 研究課題

- ・実態の伝え合い、テーマに沿った協議、実践の学び合いなどを通して、相互理解を図る。

② 取組

ア 実務者会議

- ・“引き継ぎの在り方”“スタートカリキュラム”“幼児の生活について”“ゼロタイム交流について”など、テーマに基付いた協議を行う。

イ 授業、保育参観

- ・1年生の授業、幼稚園の保育を互いに参観し合い協議する。

ウ 保育参加

- ・小学校の先生に年長児を中心に保育体験をしてもらい、その後協議する。

③ 成果（・）と今後の課題（★）

<アについて>

- ・2年間、テーマを設けて継続した話し合いを行うことで、互いの教育を理解し異なる教育の在り方を尊重しながらも、自分達の考えを率直に伝え合える関係性が構築されてきた。その関係性が強まるとともに、互いの教育理念や教育内容、教育方法の違いへの理解が進んだ。

- ・それぞれ子ども達の実態と幼小共通の課題が明確になってきた。（人に対する信頼感をもつ、自分の気持ちを言葉で表す、相手の話に心を寄せて聞く等）それに伴い、本園において見直すべき園生活のポイントが明らかになり、教育課程見直しにおける視点として位置付けることができた。

<イについて>

・授業参観においては、学習や生活の様子を実際に見ることにより、幼稚園と小学校の連続性を考える機会となった。又、発達過程や進学前の経験からのつながり、その時期の特性を生かした授業の方法について意見交流することができた。(集中のさせ方、動作化について等)

・保育参観においては、具体的な場面から小学校への学びの連続性を踏まえたうえで、幼児期に大事にしたいこと、ぜひ身に付けていきたいこと等が同じ視点で話し合い確認することができた。(幼児の聞く、話すことについて、失敗を乗り越える経験、友達とのまれ合い等)

<ウについて>

・小学校の先生に遊びを体験してもらうことで、幼児が遊びの中で何を体験しているのかを知ってもらうことができた。又、幼児期にどのような経験が必要なのか、幼稚園での学びが小学校で必要な力とどのように結びつくかという指導の連続性について意見交流することができた。

★教師自身が体験することを通して互いの教育理念や教育内容、指導方法等を実感することが、非常に有効である。機会の継続、拡充が今後の課題である。

(4) 交流実践

① 研究課題

・子どもの成長を長期的な視点でとらえ相互理解を深めたり、組織的・計画的な連携体制づくりの在り方を探ったりする。

・幼児が小学校への親しみや憧れの気持ちを高める援助の在り方を探る。

・保護者が小学校への移行に見通しと安心感をもてるようにするための支援の在り方を探る。

② 取組

ア 幼児と小学校教諭との交流

・学級全体の活動時に、小学校教諭が来園。映像を用いながら小学校の物的環境、授業、行事等についての話や質疑応答を行う。

イ 年長組保護者と小学校教諭との交流

・小学校教諭に来園してもらい懇談会を開き、小学校生活について、入学前の心構え等の話や質疑応答を行う。

ウ 小学校の物的環境へのアプローチ

・運動会練習風景、絵画展、学習発表会等の見学。体育館や校庭で遊ぶ機会をもつ。(ゼロタイム交流)

エ 幼児と小学生との交流

・**10月**2年生が来園し、小学校について教えてくれたり、一緒に遊んだりする。

11月幼児が児童集会(模擬店)の事前見学をさせてもらう。

12月学校探検に行き、2年生に校内を案内してもらう。

③ 成果(・)と今後の課題(★)

<アについて>

・先生の話や映像等から、学校探検では知ることができなかつた学校の様子を知ることができ、親しみや期待感をもつことができた。又、小学校の先生に親しみをもつ機会ともなり、進学に対する安心感につながった。

<イについて>

・保護者にとっては、入学に対して不安感が大きい中、率直に質問したり具体的な話を聞いたりできたことは、大きな安心感につながった。保護者の変容が幼児の安心感につながる姿も見られた。

★時期の検討が必要である。今回は3月に実施したが、より早期に行うことで、進学までに身に付けたい生活習慣や力等、見通しをもって年長児の生活や移行期の

生活を共に考えていくことができるのではないか。

<ウについて>

・給食の匂い、体育館や校庭・教室の広さ、大きなトイレや階段、幼稚園にない施設等を見学したり感じ取ったりすることができた。「小学校ってこんな場所なんだ」ということを五感を使って全身で感じるにより、過年度に比べ、早い段階で小学校を身近に感じ、入学への期待感を高めた。（「急に机やランドセルをほしがるようになった」と保護者からの声）

・小学生との直接的な交流はもたなかったが、遠目から見ても小学生の体の大きさを感じたり、自分達にはできないことができる姿、上手な姿等に憧れを抱いたり刺激を受けたりする様子が見られた。

★小学校のカリキュラムの問題で、授業の中で交流活動を行うことが難しい場合もある。“ゼロタイム交流”として無理なく行える方法を工夫したことは有意義であった。給食時間、休み時間など、ゼロタイム交流の方法をより工夫したり、交流の内容を吟味したりすることで、双方に負担なく継続的な交流が可能なのではないかと考える。

<エについて>

・交流活動に当たっては、事前に打合わせを行い、小学校教諭と協同して指導案を作成していった。互いの実態、願い、支援の方向などが確認できたことで、実際の交流場面においても、互いの教師が双方の子どもに適切な対応がとれ、より互惠性のある交流が図られた。

・幼児にとっては、経験のある遊びを通して小学生とかかわったことで、不安感が少ない中で小学生とのかかわりを楽しむことができた。11月現在は、継続交流がなされていないので、幼児の変容はつ

かめていないが、次回の交流を楽しみにしている姿から、小学生への親しみや憧れの気持ちは高まっていると思われる。

★計画的、継続的に子ども同士の交流が行えるように、幼稚園・小学校双方の指導計画をカリキュラム化し、子どもの育ちにとって交流活動が大切なものであることをしっかりと押さえて位置付けていくことが必要である。

3 研究経過・成果の普及

- 諸研究会にて発表
 - ・幼稚園教育課程研究協議会、札幌市立幼児教育モデル事業報告会にて研究経過を発表。
- ホームページにて普及
 - ・今後、研究成果を整理し、ホームページに掲載予定。
- 本園の教育課程を資料化し、配布
 - ・区内の小学校及び私立幼稚園、全市立幼稚園に配布。

4 今後の展望

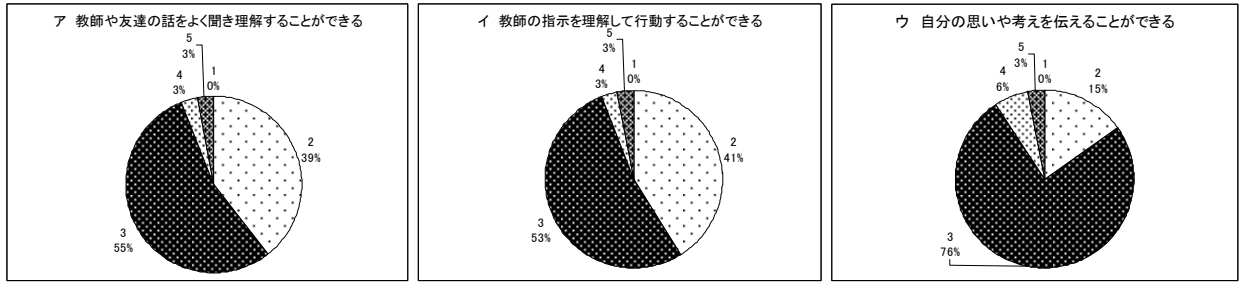
- 幼児期にふさわしい園生活の在り方について
 - ・今年度見直し作成した教育課程・指導計画の試案を実践検証し完成させる。特に、接続期における指導計画について力を注ぐ。
- 教師同士の相互理解に関して
 - ・子どもと実際に接する機会（幼児と児童の交流活動、教師が互いの保育や授業を体験するなど）をもち、相互理解を深化させていく。
- 幼児と児童の交流について
 - ・親しみや憧れ、期待、安心感をもてるような交流の在り方を実践検証し、カリキュラム化する。

5 資料

(1) アンケート結果抜粋

<言語面>

(1 大変そう思う 2 そう思う 3 あまり思わない 4 思わない 5 無回答)



*自由記述

ア～内容を理解していない、説明したことを質問してくる子がいる。

- ・落ち着いてしっかり話を聞くことが苦手な子が多い。
- ・「話を聞く」という力をまず育てなければならない。聞けないので理解できないという子どもが多い。

イ～何度も同じことを繰り返し、かなり噛み砕き、丁寧に指示する必要がある。

- ・自分の思い込みが強く、早飲み込みをして行動する子が多い。
- ・分かりやすい言葉で表現しても「音として」「BGMとして」しか聞こえていないように感じる。
- ・聞く時は素直に聞けても、行動に移す段階になると思いのままに行動しがちである。

ウ～自分の思いや考えを相手に伝える力は低下してきている。

- ・言語で自分の思いを伝えられないので、手を出してしまう子どもも目立つ。
- ・主語がない、要点を得ない、だらだら長い。

言語面全体として～語彙力は高い場合が多いが、表情、言葉つき、日頃のコミュニケーション能力、友達との遊び方など言葉に伴う他の面で問題を感じる。

(2) 指導計画の抜粋

5歳IV期(10月～12月)		下線…視点1	下線…視点2	下線…視点3
幼児の姿	<ul style="list-style-type: none"> 一緒に遊ぶ友達同士で共通の目的を見出したり、同じ目的をもつ幼児が集まったりして、友達と同じ目的に向かって遊ぶ楽しさを味わうようになる。ごっこ遊びなどでは遊びに使う物を作ったり、遊び方を決めたりするために「こうしたらいい」という考えを出し合うなどして進めようとする。ルールのある遊びではみんなが遊びを楽しむためのルールを考えたり、きちんと守ろうとしたりするなど、遊び全体のことを意識して進めようとする。 友達と一緒に遊ぶ進めようとする中で、どうしたらうまくいくか、遊びをより楽しくするにはどうしたらよいかなどを考えるようになってくる。それが必ずしもうまくいく方法ではないこともあるが、自分なりに試したり、考えを出し合ったりしながら遊びを楽しむ。 今まで思いを表すことが少なかった幼児が自分の思いをはっきりと表すようになり、自分の思いだけで遊びを進めようとしていた幼児が相手の思いを受け入れられるようになり、お互いが見られる。そのため、いろいろな幼児が互いに思いを出し合って遊びを進める楽しさを味わうようになってくる。 それぞれの力を発揮して遊ぶ中で、友達の得意なことを認めたり、頑張りに気付いたりする。それが刺激となって自分もさらに頑張ろうという意欲をもつようになる。また、友達に認められることで自信をもち、友達と一緒に難しいことに挑戦する楽しさを味わうようになる。 絵本などからイメージを膨らませ、ペープサートや劇遊びなどでストーリーを作って演じたり、登場人物になりきって表現したりすることを楽しむ。それが友達と共通の目的になり、イメージを具体化しながら小道具や衣装などを作ったり、友達とのやりとりで話を進めたりすることを楽しむ。 楽器遊びや踊りなどいろいろな表現遊びに意欲的に取り組むようになり、友達と息を合わせて演奏することや、振り付けを考えて踊ったりすることを楽しむ。 学級全体の活動では、同じ目的に向かって活動を進めていくことに意欲をもてるようになり、自分の力を発揮しようとする。相違場面では積極的に意見を言ったり、友達の考えを聞いたりするようになるが、意見の調整や実現には教師の援助を必要とする。 秋から冬への季節の移り変わりに関心をもち、降雪を楽しみにしたりする。昨年までの経験を生かした雪遊びなどを楽しむ姿がある。 			
	ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ○ 友達と共通の目的に向かって遊びを進める楽しさを味わう。 ○ 自分の力を十分発揮し、友達と認め合いながら意欲的に活動する充実感を味わう。 		
内容	<p>環境の構成・教師の援助</p> <ul style="list-style-type: none"> 共通の目的に向かって自分の考えを出したり、友達の考えを受け入れたり認めたりして遊ぶ楽しさを味わう。 友達とイメージを出し合いながら遊び、表現する楽しさを味わう。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちで共通の目的を見出して遊びを進める姿を大切に、思いを実現しようとする姿を十分認めたり、励ましたりしていく。 それぞれが思いを出すことで遊びがさらに楽しくなる実感をもてるように、思いを出し合って遊びを進める姿を十分受け止めていく。 遊びの進め方などについてそれぞれの思いの食い違いも出てくるが、できるだけ自分たちで乗り越えられるように、解決の仕方を任せたり、解決策を見せせるようにヒントを与えたりする。 一人ひとりがイメージを膨らませながら表現することを楽しくめるように、自由な発想を十分受け止めていく。 イメージを友達と共有しやすいように、イメージを具体化するのにふさわしい材料や用具の準備を共にしたり、必要な物を作ったりする。 		

<ul style="list-style-type: none"> いろいろな遊びの中で自分なりの目的や課題をもって取り組むことを楽しむ。 遊びに取り組む中で友達のよさに気づき認めたり、刺激を受けたりする。 学級の友達と同じ目的に向かって取り組む中で自分の力を十分発揮する。 秋や冬の自然に触れ、季節の移り変わりを感知したり、興味関心をもち、性質を生かして遊んだりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 一人一人の遊びを楽しくしようとする発想が遊びの中に生かされるよう、教師が十分受け止める姿勢を見せていく。 一人一人が自分なりの目的や課題を見出すことで遊びが充実するように、少し難しいことを投げかけるなどしていく。試したり工夫したりする中で、時には失敗を乗り越えることも経験できるようにする。 得意なことでも力を十分に発揮したり、困難に向かっていたりする姿に刺激を受け合うことができるように、友達のがんばりを知らせるなどする。 互いのよさを認め合う姿を大切に、学級全体に広げるようにしていく。 学級全体の活動でも個々が自分の力を発揮することで自信を高め、より活動が充実するようになっていく。また、同じ目的に向かって自分たちの力で進めている実感をもてるように、幼児のアイデアを十分取り入れたり、幼児同士相談しながら進めたりできるようにする。 秋から冬への季節の変化に気付くことができるように様々な事象(紅葉、霜、氷、気温の低下など)について知らせるなどする。 雪や氷、気温の低下を利用した遊びを、昨年までの経験を生かしながら工夫していけるように、共に楽しんだりアイデアを出したりする。
<p>家庭との連携</p> <p><発表会の経験からの育ちを> 発表会に向けては、その子なりの表現を大切にしているだけでなく、一人一人が力を発揮する姿を友達同士認め合うことが自信につながるという年長児ならではの育ちについても知らせていく。また、自分たちで進めている実感もてるように、幼児のアイデアを大切に受け入れたり、みんなで相談して進めたりしていただくことなども知らせ理解を求めていく。</p>	
<p>地域社会との連携</p> <p><秋の自然に触れる散歩> 紅葉、落ち葉や木の実拾いなど、秋ならではの自然に十分触れて遊ぶことができるように、いろいろな公園を利用する。集めた自然物は園内での遊びや装飾にも積極的に活用していく。</p> <p><近隣の小学校へ> 小学校の発表会を参照させてもらったり、学校内を見せてもらう機会をつくったりするなど、学校に親しみをもったり、就学を楽しみにしたりできるようにする。</p> <p><近隣の商店へ> もちつき会に使う材料の用意などは、近隣の商店を利用し地域の人とかかわる機会をもてるようにする。特に、対面式の商店では直接やりとりをしながら買い物をする経験ができるので、積極的に活用していくようにする。</p>	

平成20・21年度教育課程研究指定校事業 研究報告書

学校名	学校法人 東学園 美晴幼稚園
-----	----------------

園長名：東 重満

所在地：北海道札幌市豊平区月寒西2条7丁目

2-16

電話番号：011-851-5058

⑤	幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るための教育課程の在り方に関する調査研究 (平成20・21年度)
---	--

幼小共通の研究課題

幼稚園と小学校の円滑な接続に関する連携体制の構築

I 研究指定校の概要

1 学校・園・地域の特色及び実態

札幌市の市街地に位置する月寒地区は市内では古い住宅と商店等が混在した地域で、小学校と公私立幼稚園が近隣にある事もあり、本事業を実施する事となった。本園は札幌市の私立幼稚園の中では比較的小規模で、障がいのある幼児を含め多様な3・4・5歳の子どもが異年齢のクラス編成で生活を共にしている私立幼稚園である。

2 学校の概要 (平成21年5月1日現在)

(幼稚園)

	3歳児	4歳児	5歳児	混合	計
学級数				3	3
園児数	男	9	18	20	47
	女	13	23	16	52
計	22	41	36		99

教員数 8名

II 連携体制

1 連携校名

自校	学校法人 東学園 美晴幼稚園
連携校	札幌市立月寒小学校
連携校	札幌市立かつこう幼稚園

2 幼小連携教育研究協議会の構成員

所属・機関・職名等			
・小学校校長会	1	・小学校長	1
・幼稚園長会	1	・園長	2
・私立幼稚園連合会	1	・学識経験者	1
・PTA協議会	1		
・教育委員会学校教育部指導担当部長	1		
・区保育・子育て支援センター所長	1		
・教育委員会指導主事(事務局)	5		

III 研究の内容及び成果等

【2年間の研究成果の要点】

- ① 連携校における担当者を中心とした実務者会議や相互の授業(保育)参観とその後の研究協議を通して、相互理解が進むと同時に子ども観や評価、授業方法や指導の在り方の相違を確認できた。
- ② 学校間交流や施設見学を通じて、幼児の小学校に対する期待や憧れが、身近な体験を通して望ましく形成されることが理解でき、今後の交流や連携を推進する手がかりがつかめた。
- ③ 指導要録等、小学校へ送付する書類や幼稚園以外の関係者に示す書類の記載方法や表現の在り方について、課題が明らかになり改善の方向が明確になった。
- ④ 本園の教育課程の再編にあたって、小学校への接続を検討する過程において、幼児教育の本質的課題への理解が深まり、改善のポイントが明確になった。

1 研究課題と研究の内容等

(1) 研究課題設定のねらい

幼稚園として幼児教育が小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながる事をふまえ、小学校の教師へ幼稚園での成長の様子を伝達する事の検討や、児童間教師間の交流事業を通して得られた成果に配慮しながら、教育課程編成に向けて取り組む。

(2) 2年間の主な取り組み

平成20年度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 連携校2園1校による実務者会議 ・ 美晴幼稚園にて1学期公開保育 ～ 異年齢混合クラス保育製作活動 ・ かつこう幼稚園にて1学期公開保育 ～ 好きな遊び→クラス活動 ・ 月寒小学校にて1学期公開授業 ～ 国語と算数のミックス授業参観(1年生) ～ 実務者会議授業参観の意見交換 ・ 月寒小学校にて2学期公開授業 ～ 1年生国語の授業を中心に参観 ～ 文部科学省篠原教科調査官を交えた研究協議会に参加 ・ 美晴幼稚園にて2学期公開保育 ～ 全園保育活動「ワクワク広場」参観 ～ 小学校他学年の担任を含めた意見交換 ・ 第1回幼小連携教育研究協議会 ～ 研究計画を報告し意見交換 ・ かつこう幼稚園にて2学期公開保育 ～ 自発活動を中心に ～ 幼・小の教員合同での「わらべうた」 を中心にしたワークショップ ・ 学習発表会鑑賞 ・ 施設見学 ・ 実務者会議 ～ 今年度の反省と次年度に向けた調整 ・ 第2回幼小連携教育研究協議会
平成21年度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 連携校2園1校による実務者会議 ・ 第3回幼小連携教育研究協議会 ・ ゼロタイムを活用した施設見学, 授業参観による幼児の様子を検討(年長児が1年生の運動会への取り組みを参観)(年長児が6年生の教室訪問)(全学年が施設見学) ・ 本園ガリバーディキャンプを通した小学生と幼児における発達の連続性と特性の検討 ・ 文部科学省篠原教科調査官を交えた研究協議会に参加(研究指導を受く)

<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業参観(年長児が学習発表会参観) ・ 本園指導要録, 申し送り補助資料検討 ・ 本園教育課程および指導計画案再編にむけた検討

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 幼児の小学校施設への関わりについて

幼児児童間の交流が難しい場合における施設へのかかわりを通した小学校へのアプローチの可能性について検討した。

① 取組

[取組のねらい]

子ども同士の交流を願っているがカリキュラムの中では難しく、ゼロタイムを利用することにし、「幼児の施設への関わりについて」接続につながる交流を持てる様にした。

[平成20年度]

・平成20年11月5日

年長児が学習発表会児童鑑賞日に出かける〈子どもたちの様子〉

5年生が自分たちで創作した英語の劇を劇中の知っている歌や面白い場面に興味を持って50分間熱心に鑑賞した。

・平成21年2月26日

年長児が近隣の公園へ出かける途中に小学校に立ち寄る



〈子どもたちの様子〉

小学校のグラウンドの広さや、校舎は3階建て等、幼稚園の園舎とのちがいを感じていた。自分達はもうすぐ1年生という期待感が膨らんでいた。

[平成21年度]

- ・平成21年5月26日

年長児が小学校1年生の運動会表現活動の練習の様子を参観

(子どもたちの様子)

今年度初めて小学校へ行ったが、グラウンドの大きさや人数の多さに驚いていた。真っすぐに整列したり、素早く行動する姿に憧れていた。

- ・平成21年7月9日

年長児が修学旅行で留守になった6年生の教室を見学



② 成果と今後の課題

本研究の実務者会議において小学校の活動と幼稚園の活動を話し合う過程で、ゼロタイム（教育課程外の時間）を活用する交流の可能性が検討され、その一環として幼児が無理なく施設見学することが実現した。

これまで近隣ではあったが小学校に幼児が行く機会がなかったので、校舎内に入る事、グラウンドに入る事全てが幼児にとっても教師にとっても新鮮であり、具体的な施設の違いを体感し知る事が出来た。例えば、グラウンドや体育館、廊下や教室の広さや長さを体感すること、トイレの便器や水のみ場の設備を体験すること、掲示物や児童の作品等から刺激を受けること、机の配置を含めた学習の場としての教室の雰囲気に触れることなど、直接小学校に出かけて体験することの意味は、幼児の小学校への憧れを形成すると共に事後の指導にも生かせる要素を多分に含んでいる。

本事例のように非常に素朴で簡単なかたちであっても就学前に幼児と小学校との交

流によって、幼児の小学校への不安が軽減し期待が膨らんできている姿が顕著に見られていた。

課題として本研究においては実務者会議という場が相互の事前調整として十分機能したが、通常の幼稚園と小学校の関係においては、双方の事情を十分に理解し合うまでに相当の時間と調整の機会を要することが予想される。事実、本研究においても可能性を模索していた児童間交流の機会は結果的に実現には至らなかった。また、本園と月寒小学校が徒歩5分以内という近接に位置することで複数回の訪問が可能であったが、幼児にとっては移動に関する条件も相互の交流に際しては現実的な課題となることが明らかになった。

(2) 具体的な活動から幼児児童の発達過程を検討する

夏期休業中のディキャンプにおける小学生が活動に取り組む様子を通して幼児にふさわしい在り方を検討した。

① 取組

〔取組のねらい〕

日頃、幼児と関わっている我々教師は、幼児の発達をみてきているが、小学生の発達をみる機会が少なかった。その為、今回のディキャンプを通し小学生が活動に取り組む様子から、幼児と小学生（低学年ブロック）との違いを3つの視点から参与観察する事にした。

小学生と活動を共にするにあたり、「活動に見通しを立てて、参加しているか」「うまくいかなければ、改善していけるか」「仲間と共に、協同的に取り組めるか」

という、幼児にとって未熟である3つの視点を取りあげ、小学生と幼児との相違点を知り、小学校への接続に繋げていく事にした。

[平成21年度ディキャンプ]

- ・日時：平成21年8月5日～7日の3日間

- ・ 場所：美晴幼稚園付属施設「こぐまの森
プレイホールガリバー」
- ・ 参加児童：小学校1～3年生を中心とし
た74名（1年生26名，2年生16
名，3年生16名，4～5年生
16名）他に保護者，サポータ
ー，美晴幼稚園職員。
- ・ 活動内容：「みんなの国 誕生！！」をテ
ーマに「歌・踊り」「街・環境
づくり」「シンボルづくり」の
3つのチームを中心にものづ
くり，場づくりを展開した。

〔観察の手続き〕

本園の教師が参与観察を継続し，適宜
各自のフィールドノート（観察記録ノート）
に3つの視点を中心に児童の姿の要点を記
述した。各自まとめられた記録を一括して
とりまとめた上で活動内容や観察の視点毎
に整理統合した。

② 成果と今後の課題

小学生とディキャンプで活動を共にする
事により，幼児と小学生の違いをより理解
する事ができたと共に，あらためて幼児の
発達の姿を振り返る事ができたので，今後
の教育課程の編成に生かしていきたい。

また，幼児から小学生へは発達の進化と
いう面での「出来るが増える」といっ
た側面ばかりでなく，葛藤や照れ等発達の
過程が進んだからこそ，他者からみている
と一見消極的とも受け取られる様子も見ら
れる事がわかった。

ディキャンプでは，全てのチームが各自
のアイデアを尊重し互いに一から作り上
げるといった活動を展開したが，その様な
活動を自ら進めてゆくのは幼児には難しく，
小学生ならではある事も実感できた。

さらに，幼児と小学生のそれぞれの活動
を知る事により，幼稚園として小学校に向
けて取り組むべき課題が次のように見え
てきた。

・ 実体験を通して感性をはぐくむ

・ 豊かな対話の中で世界を広げる

・ 自己実現を保障する環境を整える

幼児と小学生の活動の違いを予め定め
た視点から丁寧にみる事により，本園の幼
児の姿の中に，例えば，幼児が活動に入る
時に予め教師に声を掛けて確認したり周
囲の状況をうかがってから自分の行動に
移す様子等が散見され，小学生にくらべ幼
児ならではの困難さや幼さが多くみられ
た。その事は，単なる発達段階によるもの
なのか，本園の保育によって幼児の実態と
して現れているものなのか見極めて，課題
としていかななくてはいけないことが自覚
できた。

研究手続きとして3日間の活動をもと
に各自表に記入しまとめたが，自分自身ば
かりではなく他の教師もより良く理解で
きるように，項目・記述の仕方等を再検討
していきたい。また，ビデオ，写真で記録
したものを分かりやすくまとめ，参考資料
としていかしていく。さらに，今後は参加
した小学生からのインタビューや質問紙
により実際に参加してどのような実体験
が出来たのか，まとめていく事も検討して
いきたい。

（3）幼稚園幼児指導要録等による幼稚園から小 学校への伝達のあり方について

教師間交流を通して情報を受け取る側にと
って理解しやすい具体的な伝達のあり方を検
討した。

① 取組

本研究実務者会議の場などを通して，小
学校と幼稚園の教師との間に存在している，
評価を含めた子ども観（児童観・幼児観），
指導や援助の実際，など様々な相違につい
て知ると共に，幼児教育に関係しているも
のの特性も自覚的に理解することができた。
その過程で指導要録を中心とした情報の活

用が円滑に進められていない理由の一端として次の様な問題が明らかになった。

ア) 幼稚園から送付される時期が年度末ないし新年度に入ってしまう。

→クラス編成や年度当初の指導の資料にならない。

イ) 様式の統一化は一定図られているものの記録の内容や表現がそれぞれの園によってバラバラである。

→児童共通の資料として取り扱うことが難しい。

ウ) 「指導に関する記録」における記載内容が理解しづらい。

→例えば「本児なりに一所懸命がんばっている姿がみられる。」等、幼稚園教師の記述における表現が間接的で小学校側が理解に至るまでに時間を要する。

エ) 「発達の状況欄」の著しい発達がみられた○印の評価基準の理解に苦しむ。(平成21年改定前の様式において)

→幼稚園における評価がその子自身の変容に視点をあてていること(個人内評価であること)が十分に説明されていない。

以上4つの視点から、本園の指導要録を中心とした小学校へ送付(伝達)する資料を見直して改善のポイントを明らかにすることとした。

② 成果と今後の課題

ア) 「みる」視点を整理する

・遊ぶ様子や友だちとのかかわりの様子などを素朴なまなざしで子どもの実態をとらえ、日々の保育のふり返りなどの参考にする＝「観る (observing)」。

・朝夕の視診の時の様に観察眼をもってみる場合があれば、ケース会議や研修・研究会の様な場での省察、子どもの成長記録や要録のような記録として残す場合など＝「診る (diagnosing)」。

・子どもの良き理解者として、活動や生活を共にする共同作業者として、子ども

を指導し養護し支援する教師としてかわる＝「看る (caring)」。

の3つの視点をもつこと。

イ) 要録の記載にあたって留意したいポイント

・育ちの軌跡として、「過去」「現在」「これから」を明確に示すこと。

→一つの記載内容に「過去」「現在」「これから」が混在して、読む側にとって理解が難しい場合がある。記載した内容は「いつ」のものなのか。また、教師の意見は「どこ(だれ)」に向けた(示した)ものかを整理して明確にする。

・間接的あるいは曖昧な表現は避ける。
→要録が情報開示の対象であることから、幼児の課題の示し方が難しい。間接的であったり曖昧な表現になりがちであるが、そのことはむしろ読む側の誤解を生む原因になりかねないので、例えば「進級当初に比べ努力は認められるが3学期においても指導を継続している」等、表現に配慮する。

・記述内容の理解促進につながるエピソードを挿入する。

→小学校の教師の理解を一層確かなものにするために、記述内容を端的にあらわすエピソードを資料として挿入する。その際、エピソードの羅列にならない様、幼児の実態と共に変容に結びついた指導の実際を関連付けて記述することで受け取る側の理解が図られる。

・地域など連携する範囲で用語をキーワード化する

→例えば、活動場面を想定しやすい様に、「自主的な活動場面」⇔「集団で取り組む場面」。関係性を示す「幼児同士の間では」⇔「教師からの指導に対して」といった様に連携する地域でキーワード化を進め共通理解の一助にすることも有効である。

これら本研究で得られた成果を今年度の

指導要録の作成と小学校へ申し送りをする際の補助資料の作成に生かしたい。さらに、本園における様々な記録簿への記述の際や保護者への情報伝達の際においても有効に活用してゆく。

3 研究経過・成果の普及

本報告書にまとめた3つの研究成果に基づき本研究の主課題である本園の教育課程を再編成した。平成22年度から改定された教育課程に基づき指導計画を立案し、環境の構成や生活の形態を見直し、具体的な援助や支援を行うことになる。

これまでの研究を通して、本園の特徴の一つでもある、学齢3歳児から5歳児までの異年齢構成のクラス編成の中で生活し学びを進めている幼稚園においては、3歳・4歳・5歳の教育課程と指導計画が園全体でひとつの営みとして螺旋状の延長線上に連なったかたちで、同時に平行して進められているため次のような注意点が明確になった。

- ① 連続性をもちながらも各学年の教育課程や指導計画が明確に位置づけられていること。
- ② 小学校への円滑な接続を検討する過程において3歳児から5歳児に至る3年間の過程（プロセス）を一体として検討する必要性が高いこと。
- ③ 5歳児を出発点として3年間の教育課程を組み立てるのではなく、3歳児からの積み重ねを小学校へつなげるという方向で検討すること。

以上が本園の教師で確認された。

本研究で得られた成果を平成22年10月1日開催予定の北海道私立幼稚園札幌ブロック大会での本園公開保育研究及び研究報告の中で報告、同年8月に開催予定の（財）全日本私立幼稚園幼児教育実践学会などの機会において積極的に連携校以外の幼稚園や関係者に周知させて頂く機会が予定されている。また、インターネットのホームページや本研究をまとめた報告書を保護者をはじめとした関係者に配布し、広く周知してゆくと

共に、広く意見を募る努力を継続する。

4 今後の展望

本園では大幅な教育課程の見直しを行ってから6年経過したこととあわせ、今般の幼稚園教育要領の改訂を受け、本園としての教育課程の見直しに着手し、この度の連携事業を通して得られた知見を生かし小学校就学以降も視野に入れ保育実践の充実に寄与したいと考えている。

さらには小学校において実施され試行されているスタートカリキュラムや指導法の見直しの取組を十分に踏まえながら、これまでの研究で問題の所在が明らかになってきた評価や記録の在り方の検討を進め、指導要録などの記録における表現などの改善点を実行に移した上でその成果を検証したい。

また、これまでの交流事業の成果を共同研究にとどめることの無いよう、来年度以降もより円滑に進められるよう本研究で進んだ連携・協力関係をより深めてゆきたい。

札幌市においては、教育委員会主導のもと保幼小が連携協力して初めて実施される小学校就学に向けた連絡会が平成22年1月に実施された。小学校学習指導要領と幼稚園教育要領の改訂と共に機運が高まっている、保幼小連携と円滑な接続の推進にあたって、本園としても本研究が一助となるように今後も努力したい。

学校名	札幌市立月寒小学校
-----	-----------

校長名：佐賀 敦子
 所在地：北海道札幌市豊平区
 月寒西2条5丁目1-1
 電話番号：011-851-9348

⑤	幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るための教育課程の在り方に関する調査研究(平成20・21年度)
---	---

幼小共通の研究主題	
幼稚園と小学校の円滑な接続に関する連携体制の構築	

I 研究指定校の概要

1 学校・地域の特色及び実態

本校は今年開校128年を迎え、北海道開拓の頃より歴史のある学校であり、地域には当時より居住している人々も多く、地域の伝統に誇りをもった住民も多い。平成6年地下鉄の延伸に伴いマンション建設が進み、新たな世帯も加わり児童数も多いまま推移している。学校創立以来「地域の学校」としての住民の期待は大きく、学校の様々な活動に対し積極的な支援や協力を惜しまない地域性がある。

本校には、近隣に幼稚園や保育所が多くあり、入学前の引継は指導要録や特別に支援を要する幼児の情報に基づいた学級編制を行っているが、一層の詳細な把握を行う必要があると感じている。また、1・2年生の授業づくりを行う場面でも、幼小それぞれの目標や指導内容、実態等を踏まえた指導を行うことのできる教職員の資質や専門性の向上が大きな課題となっている。このような経緯から本研究の必要性を強く感じるに至った。

2 学校の概要 (平成21年4月24日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特学	計
学級数	4	3	3	3	3	3	2	21
児童数	115	96	111	114	105	104	10	655

・教員数 28名

II 連携体制

1 連携校名

- 【札幌市立かっこう幼稚園】
- 【学校法人東学園 美晴幼稚園】

2 幼小連携教育研究協議会の構成員

所属・機関・職名
・札幌市小学校校長会 校長
・札幌市立幼稚園長会 園長
・札幌私立幼稚園連合会 園長
・PTA代表者
・札幌市豊平区保育・子育て支援センター所長
・札幌市立小学校 校長
・幼稚園 園長
・学識経験者
・札幌市教育委員会学校教育部指導担当部長
・札幌市教育委員会指導主事

III 研究の内容及び成果等

1 研究課題と研究の内容等

【2年間の研究成果の要点】

・聞き取り調査によるバランスの良い学級編制
・「0タイム(ゼロタイム)」を活用した園児と児童の交流の実践
・幼稚園に出向いてのオリエンテーションによる園児と保護者の不安の解消
・教育活動アンケートにおける入学前の不安と入学後の経過についての実態把握と不安の解消
・校内配置の工夫による1・6年生の触れ合い環境の整備
・幼稚園での既習事項を学びの実態としてとらえ、授業づくりの視点に生かす。
・子どもたちの活動をスムーズにする「場づくり」の構成
・スタートカリキュラムによる落ち着いた導入期の設定

(1) 研究主題設定のねらい

園児、児童を取り巻くさまざまな環境の変化に伴い、子ども自身の生活経験や自然体験の不足、社会性の未熟さが問題となっており、より細やかな教育の必要性が求められている。また、幼稚園における主体的な遊びを中心とした総合的な活動から、小学校へおける各教科の一斉形態の指導への移行を円滑にするこ

とも求められている。

このような背景の中で、幼稚園と小学校双方の願いを明確にしながらか相互の理解を深め、子どもの育ちを支援するための在り方を探るため本主題を設定した。

(2) 2年間の主な取組

平成二十年度

- 第1回幼小連絡協議会実務者会議を本校にて開催
 - ・今後の協議会の日程及び連携の進め方に関する意見交換を行う。
- 第2回実務者会議を美晴幼稚園にて開催
 - ・2園1校の相互視察、授業等の公開についての連絡調整を行う。
 - ・幼小双方の教育目標、経営の重点、指導内容、活動内容の把握、相互理解を深める。
- 美晴幼稚園、かつこう幼稚園にて保育見学
 - ・保育の目的と方法、指導案の立て方等、小学校における学習指導との主な違いについて研修を行う。
- 本校1年2組にて授業公開、併せて第3回実務者会議を開催
 - ・幼小の滑らかなつながりがあるカリキュラム編成に向けた子ども理解と、それぞれの年齢で子どもが獲得すべき能力についての意見交換を行う。
- 外部講師による研修会を開催
 - ・幼小交流経験をもち、園長職を経ている小学校長を講師に招き、幼稚園と小学校双方の学習指導要領のとらえ方及び活動内容についての理解を深める。
- 本校にて休日参観の公開
 - ・参観日に合わせ、全学年の授業を2園の教職員に公開し、小学校における発達段階、学習形態などについて理解を得る。
- 第4回実務者会議
- 調査官来校
 - ・本校の全校研究授業、低学年ブロックの公開に合わせ、子どもが獲得すべき能力の明確化と育ちの姿の共有化についての意見交換を行う。
- 新潟、東京へ2名が実践校を研修
 - ・研修報告会を開き、研修情報を共有。
- 学習発表会の参観
 - ・連携園を含む近隣3園の園児が、2日間でのべ約100名の参観。
- 美晴幼稚園保育参観、第5回実務者会議
 - ・8名の教諭が保育を参観。
- かつこう幼稚園保育参観、および第6回実務者会議
 - ・7名の教諭が保育を参観。
- 保護者アンケート実施

平成二十一年度

- ・保護者向け学校アンケートの中に新入学時の心配や不安についての項目を作成し、多くの保護者から意見を得る。
 - 特別支援学級の授業を幼稚園教諭に公開
 - ・元担任教諭を含む幼稚園教諭が参観。
 - 高学年ブロック5年 全校研究授業
 - ・幼稚園教諭が参観、研究全体会へも参加し、広く意見交換を行う。
 - 地域の保育施設（ちあふる・とよひら）発表会の見学
 - ・先進的な保育施設の活動の様子を参観。
 - 第7回実務者会議
 - ・新1年生スタートカリキュラム、新入学児に対する幼稚園・保育園への就学前聞き取り調査、幼小交流活動等について意見交換。
 - 新1年生一日入学における5年生の補助
 - ・一日入学開始までの誘導、整列等、すべての補助を5年生が行い、4月からの出合いを大切にする。
 - 美晴幼稚園の発表会（年長組）を参観
 - かつこう幼稚園の新入学オリエンテーションへ出向
 - ・教頭、教務主任が園へ出向き説明。保護者の質問にも答える。
 - かつこう幼稚園年長組保育参観
 - ・入学直前の年長児の様子を参観。
 - 連携2園を含む近隣6園へ就学前の聞き取り調査を実施
 - ・配慮を要する新1年生及び保護者の情報を得ることにより、学級編制資料として活用し、よりよい環境の中での学校生活の一助とするとともに、食アレルギー等の情報への配慮を行う。
-
- 第1回幼小連絡協議会実務者会議を本校にて開催
 - ・今後の協議会の日程及び園児と子どもとの交流が可能な日程や行事について意見交換を行う。
 - かつこう幼稚園の園児が、本校運動会の練習風景を参観し、読み書かせにも参加する。
 - 第2回実務者会議を美晴幼稚園にて開催
 - ・聞き取り調査に基づいた学級編制とその後様子、並びに園児にかかわる引き継ぎの在り方について意見交換を行う。
 - ・まとめの発信の仕方について、意見交換を行う。
 - かつこう幼稚園にて保育見学
 - ・実際に学びの場面に参加し、子どもたちと触れ合う。「暑い」という状況に合わせた臨機応変な学びの場を工夫しているこ

と、園児たちの日々の小さな変化を見取っていることを学ぶ。

■美晴幼稚園運動会見学

- ・とても小さなトラックの中で競技をする様子を見て、発達段階に応じた広さの必要性を学ぶ。
- ・小学校での運動会との規模の違いを目の当たりにし、幼稚園との施設・設備面、システム面での段差を実感する。

■第3回実務者会議をかつこう幼稚園にて開催

- ・本校実施のスタートカリキュラムについて報告と意見交流、並びに研究成果の発信方法について話し合いを行う。

■美晴幼稚園園児が学校訪問

- ・学校を訪れ施設を見学、学校の様子を体感し、入学時の不安をやわらげる。

■第4回実務者会議

■第5回実務者会議

■かつこう幼稚園園児が学校訪問

- ・学校を訪れ施設を見学、学校の様子を体感し、入学時の不安をやわらげる。

■美晴幼稚園、かつこう幼稚園に絵画展の作品を学年1点ずつ貸し出す。

■第6回実務者会議

■第7回実務者会議

■調査官来校

- ・聞き取り調査を活用し編制したクラスの授業参観、ならびに(中間)研究発表を行い、本校での実践の方向性について意見を伺う。

■第8回実務者会議

- ・篠原調査官とともに「0タイム(ゼロタイム)交流」、並びにかつこう幼稚園での保育参観をもとに意見交流を行う。

■学習発表会参観

- ・美晴幼稚園ならびに、近隣の幌南幼稚園、ちあふる・とよひら保育所の園児が参観する。[1・3・ひまわり学級(特支)・5年

■第9回実務者会議

- ・幼小連携教育研究協議会の方々を招き、会議の様子を参観していただく。(各校・各園の今後の方向性について意見交流)

■幼稚園の新入学オリエンテーションへ出向

- ・教頭、教務主任が園へ出向き説明。保護者の質問にも答える。

2 研究内容及び方法等

①具体的な研究課題

- 幼稚園から小学校への滑らかな接続を図るため、幼小教職員及び、園児、児童の交流などによる相互理解を図る。
- 幼稚園(5歳児)から小学校1年生の発達段階とそれぞれの校種の特性を生かした新たな教育課程の編成について研究する。

②取組

- 入学する児童について行動面・情緒面並びに、保護者についての情報収集を行うため、連携2園を含む近隣6園の聞き取り調査を実施する。
- 保育についての研修会を開催し、理解に努める。
- 教員同士の相互理解を図るため、授業・保育参観を行う。
- 小学校の雰囲気慣れ親しむために、「0タイム(ゼロタイム)」を活用した園児と児童の交流を行う。
- 園児と保護者の不安を和らげるため、幼稚園に出向いてのオリエンテーションを行う。
- 入学前の不安と入学後の経過についてアンケートをとり、項目の設定を行い、保護者の意識を知るとともに、ケアを行う準備を行う。
- 1・6年生の教室を隣接させ、触れ合い環境を整備する。
- 幼稚園での既習事項を学びの実態としてとらえ、授業づくりの視点に生かす。
- 子どもたちの活動をスムーズにするための「公園のイメージ化」を試行する。
- スタートカリキュラムの編成・実践・検証。

③成果と課題

- 聞き取り調査を基にした学級編制

成果

入学が予定されている園児について、事前に行動面・情緒面などの傾向、並びに家庭の様子について、さらには配慮を要する子についての情報をつかむことができた。そのことにより、例年に比べてバランスの取れた学級編制を行うことができた。

課題

今後も、入学が予定されている園児・保護者について、できるだけ多く情報が得られるよう努め、共通理解を図り学級編制に生かしたい。

○ 幼稚園での保育参観

成果

普段の遊びの積み重ねが、次の遊びの工夫につながること等、園児たちが自ら活動したくなる環境や場の構成を行い、園児たちの自主的な活動の中から学ばせようとしていること、また、教師は、一日のおおまかな流れを計画しているが、子どもの遊びの取組方、満足感を考慮し、生活の流れを変更していることが理解できた。

課題

出来るだけ多く教師が保育参観をしたり、幼児と触れ合ったりする機会をもちながら、今後も理解を深めていきたい。

○ 園児と児童との交流

成果

「0タイム（ゼロタイム）」を活用して、運動会に向けた練習風景、学習発表会での児童公開日の参観、並びに絵画展の作品鑑賞と作品の貸し出し（各学年1点）などの活動を行い、小学校での活動の様子や雰囲気や園児に体感してもらうことができた。双方の活動計画に無理なく行うことができ、距離や時間の制約を軽減することができた。

課題

今年度の実践は、中休みに4年生と遊びの交流を計画していたが、新型インフルエンザによる学級閉鎖等のため実施することができず、実際に触れ合うところまで交流を発展させることができなかった。これからは、厳冬期に入るため実現は難しいので、来年度の課題としたい。

○ 幼稚園に出向いてのオリエンテーション

成果

一日入学が終わってから実施した。園児や保護者を対象に小学校生活について

のオリエンテーションを行うことで、園児が小学校の先生に対して親しみをもつことができ、保護者は直接不安に思っていることを聞くことができ、とても有意義な時間となった。

課題

できるだけ、入学を予定している園児がいる園に出向き、情報を提供していくことが望ましいが、日程や時間的な制約がある。（小学校間が連携し、同じような内容で話を進めることが必要になってくると思われる。）

○ 教育アンケートでの質問項目の設定

成果

保護者が小学校入学前に不安に思っていたことやまた入学してからその不安はどう変わっていったのかを問うことで保護者の意識がよい方向に変わってきていることをつかむことができた。

課題

日頃の教育活動や懇談会、家庭訪問などを通して、保護者の率直な話を聞ける体制づくりを心掛けていく必要がある。

○ 学校訪問による施設の見学と体感

成果

上記の他にも、修学旅行や宿泊学習など行事で教室が空いている時に訪問してもらい、教室に入ったり、黒板や掲示板を見たり、実際に教室内の椅子に座ったりする体験をすることで、園児たちに小学校入学への期待感をもたせることができた。

課題

特になし。

○ 校内配置の工夫

成果

これまで階が分かれていた6年生の教室を1年生と同じフロアで隣り合うように配置した。お互いの動きが見やすくなり、触れ合いやすい環境となった。

課題

トイレ・水飲み（5分タイム）時や、1年生が早く下校する日は、6年生の教室前を移動するため、学習の妨げとなってしまうことが多い。配置を再検討したい。

○ 幼稚園での学びを生かした授業づくり

成果

連携を行っている2つの幼稚園に活動についての聞き取り調査を行った。特に、活用した公園やその遊びの内容について確認した。そのことを子どもたちの実態（既習事項）として把握し、本校の授業づくりの視点に生かした。研究授業での指導案では、単元構成の中に片方の幼稚園が活用したことがある公園を活動場所として位置付けた。また、本時案では、幼稚園時代に行った遊び（すべり台遊び、芝生遊び）を授業の中で生かせるように計画をした。授業は、教室内で行ったが、本時までの公園遊びの体験を学びとして子どもたちから声を引き出し、個からグループへ、そしてみんなで遊ぶ活動に結びつけることができた。

課題

幼稚園で実践した内容が一覧にされ、小学校に引き継がれると、授業づくりの中で幼稚園での体験と結びつけた指導も行きやすくなる。

○ 授業づくりでの「公園のイメージ化」

成果

教室において話し合い活動を行うために、どうしたら子どもたちが公園をイメージすることができるのかを模索した。そのための手立てとして、公園のすべり台の写真や芝生の代わりになるマットを活用し、どのように配置すると効果的なのかを4つの教室で検証した。その結果、活動ができる広さがあり、体を動かしながら考えることができる場の構成が有効であることがわかった。さらに、その後の話し合いで、写真よりも、公園の簡易模型を用意することがこれまで遊んできた公園を想起させるのに有効であるということがわかった。

課題

活動内容に応じて、「イメージ化」しやすい場所を考えることが必要である。特に、今回実践した「そとであそぼう」については、狭い教室で公園の遊具の位置関係をとらえさせなければならなかった。現地で話し合いを行う、もしくは、その場所をイメージ化できる場の設定をするこ

とが大切である。

○ スタートカリキュラム

成果

モジュールを活用し、1コマの中に活動を組み合わせていくことで、集中力の途切れやすい1年生も意欲的に活動に取り組むことができた。

課題

学年内での綿密な打ち合わせと連携が必要である。共通理解の不足は、学級間のばらつきを生みやすく、保護者に不安を与えることにつながる。

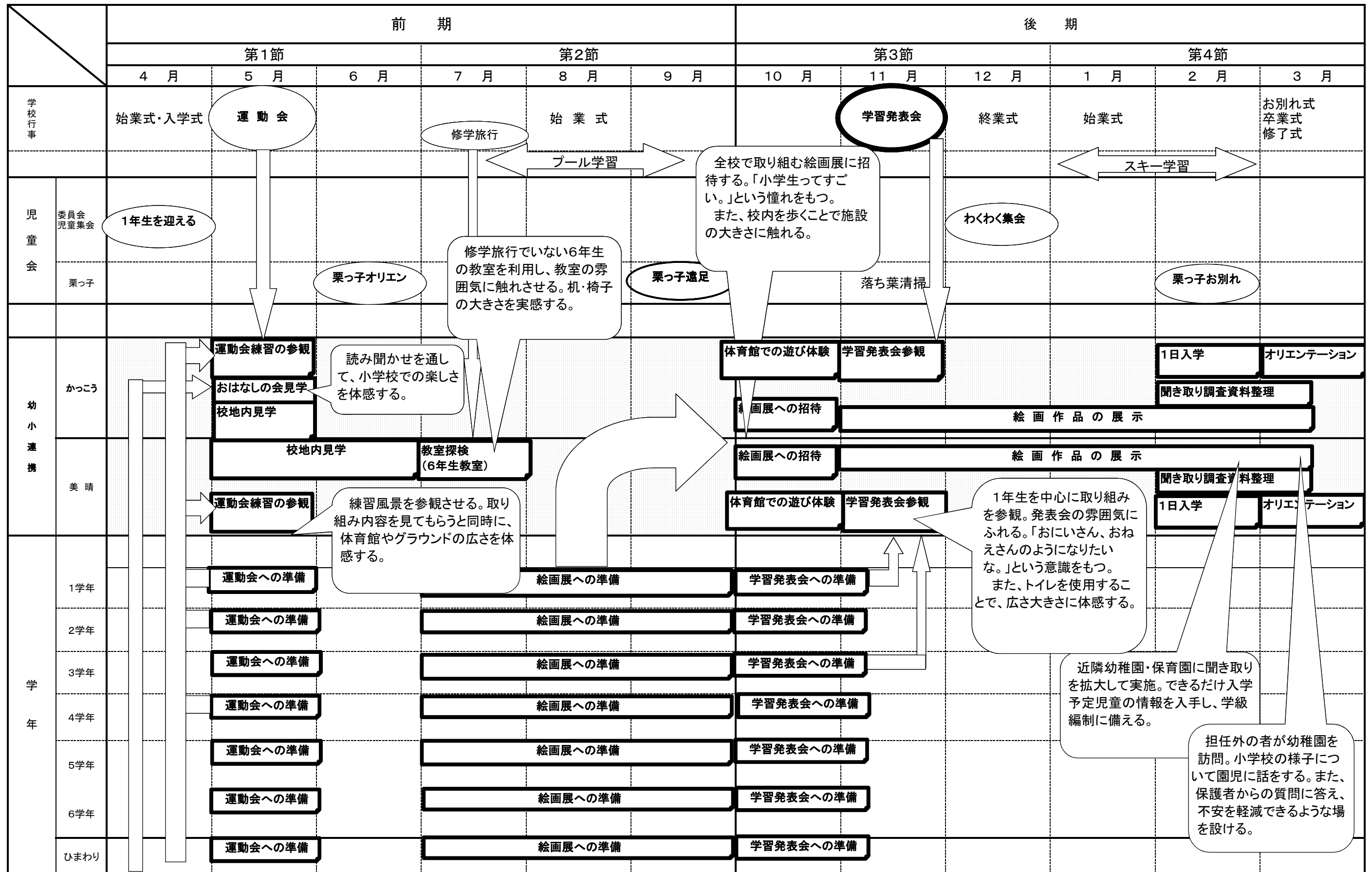
3 研究経過・成果の普及

- (1) 研究紀要, 研究報告書の作成と配布
- (2) 本校ホームページでの研究内容の公開
- (3) 公開授業研究会の実施

4 今後の展望

- (1) 幼稚園との円滑な接続をねらった授業の構築。
 - ・実践した内容の蓄積を行う。
- (2) 実践分析に基づいたカリキュラムの編成
 - ・来年度に向けて修正をしたカリキュラムの実践・検証・再編成を行う。(モジュールを生かした1時間の構成ならびにステップを踏んだ清掃活動の実施)
- (3) 引継ぎの在り方
 - ・入学後もそれぞれの園と情報交換ができる関係づくりを継続していく。
 - ・小学校生活を行う上で大切になる「キーワード」を互いに確認し、確実に必要な情報が得られるように準備を進める。
- (4) 具体的な交流
 - ・定期的な教職員同士の交流（実務者会議のような意見交流、並びに相互授業参観など）を図り、互いの理解を深めていく。
 - ・「0タイム（ゼロタイム）」を活用した園児と児童との交流（休み時間の遊びなどを含む）
 - ・入学児童の情報、とりわけ入学に際し、指導要録の内容、人（教師、園児、保護者など）とのかかわりをより詳細な情報の収集。
- (5) 研究成果の収集
 - ・本研究が、研究年次に止まることなく継続的に取組を行うための模索。

本校の主な動きと幼小連携とのかかわり



PTA	おはなしの会									
						栗っ子 ふれあい広場				

平成20・21年度教育課程研究指定校事業 研究成果報告書

ふりがな 学校名	ながはましりつ 長浜市立とらひめ認定こども園 にんてい えん (旧虎姫町立とらひめ幼稚園)
-------------	---

園長名：大橋 英子

所在地：滋賀県長浜市五村371-1

電話番号：0749-73-8081

⑤	幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るための教育課程の在り方に関する調査研究 (平成20・21年度)
幼小共通の研究主題	
「学びと育ちを確かにつなぐ幼小の連携」 ～伝え合う力をはぐくむ環境や援助の在り方～	

I 研究指定校の概要

1 学校・園・地域の特色及び実態

本園は、滋賀県の北東部に位置し、園児数は119名である。平成19年度に、保育所児と幼稚園児の3～5歳児が一園に会する幼児教育を推進するようになって3年目を迎えている。

園児は、明るく素直な子が多いが、感情をコントロールしたり、自分の思いを言葉で表現したりするところに課題があり、人とのかかわりがうまくできない姿が見られる。

家庭では、室内でビデオ鑑賞やゲーム等の1人遊びが多く、虫や草花で遊んだり、地域の友だちと触れ合ったりするなどの自然体験や直接的体験をする機会が少なくなっている。

2 学校の概要

(幼稚園)

	3歳児	4歳児	5歳児	合計	
学級数	2	2	2	6	
園児数	男	21	21	20	62
	女	19	20	18	57
計	40	41	38	119	

教員数 16名

II 連携体制

1 連携校・園名

自校	長浜市立とらひめ認定こども園 (旧虎姫町立とらひめ幼稚園)
連携校	長浜市立虎姫小学校 (旧虎姫町立虎姫小学校)

2 幼小連携教育研究協議会の構成員

所属・機関・職名等
<ul style="list-style-type: none"> ・虎姫町教育委員会 学校教育参事 ・とらひめ幼稚園 管理職, 研究主任, 5歳児主任 ・虎姫小学校 管理職, 研究主任, 1学年主任 ・とらひめ幼稚園PTA, 虎姫小学校PTA

III 研究の内容及び成果等

【2年間の研究成果の要点】

- ・幼小の教員が、互いの子どもの発達や教育内容を話し合ったり参観したりしたことで、学びの連続性を共有することができた。
- ・指導案を協同で作成することによって互いの意見交換が活発になり、教育課程について幼小教員の相互理解が深まった。
- ・5歳児V期のカリキュラムを検討し、小学校のスタートカリキュラムにつなげることができた。
- ・3歳児からの「伝え合う力をはぐくむカリキュラム」の編成によって、援助等の事例検討が系統あるものとなり、自分の言葉で思いを表現できる園児が多く見られるようになった。
- ・「交流カリキュラム」の編成によって、伝え合う力をはぐくむための交流活動が明確になり、共に学びのある保育・学習をつくり出すことができた。また、年間を通した1年生とのペア活動は、双方に安心感を生み、親しみながら活動する場が増えて、共に遊びをつくったり、互いのよさを伝え合ったりする姿が多く見られるようになった。
- ・クラスだよりや園だより、リーフレット、懇談会などで幼小連携について情報を発信したことは、保護者の小学校入学への不安を軽減し、幼稚園や小学校に対する理解や信頼を高めることができた。

1 研究主題と研究の主な取組

(1) 研究主題設定のねらい

子どもたちには、感情のコントロールをしたり、自分の思いを言葉で表現したりすることに課題が多くみられ、人とのかかわりがうまくもてない部分がある。また、基本的な生活習慣の定着が難しく、規則正しい生活ができていない子どももいる。これらの生活習慣は、小学生になっても同じ傾向が続き、学校生活に影響を与えることも少なくない。

本研究では、こういった課題を受け、子どもたちのコミュニケーション力を系統的に高めるために「伝え合う力の育成」を柱とした教育課程を編成することとし、幼稚園から小学校につながる計画的かつ継続的な接続を重点においた取組を行うことにした。

さらに、幼小の教員の連携を強化し、幼児が小学校に入学した後の学習面や生活面の向上、さらに発達に課題のある児童への適切な援助を充実させていくために、『学びと育ちを確かにつなぐ幼小の連携 ～伝え合う力をはぐくむ環境や援助の在り方～』を研究課題として掲げた。

研究の仮説としては、『幼稚園と小学校が連携を密にし、「伝え合う力」をはぐくむ交流活動や教育課程の編成、指導方法の工夫をしていけば、幼児が安心・自信・あこがれの気持ちで小学校に入学し、幼小の円滑な接続が図られるであろう。』を掲げ、幼小の教員が共通理解し、一丸となって研究を推進することにした。

(2) 2年間の主な取組

平成20年度	<p>【園内研究会の実施】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全教員による幼小接続期における幼児の実態について、理解と課題の共有を図る。 ・研究推進担当者会で研究の方向性を検討。 <p>【幼児と児童の交流】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・担任同士の打合せ・指導案作成・活動後の反省 <p>○5年生と5歳児の交流</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「はじめまして」 ・「田植えをしよう」 ・「稲刈りをしよう」 ・「おにぎりパーティーをしよう」 <p>○6年生と5歳児の交流</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ミニ運動会」
	<p>【園内研究会の実施】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3歳児Ⅰ期から～5歳児Ⅴ期までの「伝え合う力のカリキュラム」を検討し、ねらいや環境・援助などを全教員で検討しながら系統表を作成した。特に5歳児Ⅴ期から1年生への連続性のある子どもの姿（発達）を明確にし、幼稚園ではぐくんできた「伝え合う力」を小学校の学びへとつないでいった。 <p>【伝え合う力をはぐくむ取組の実施】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「伝え合う力をはぐくむカリキュラム」を通して、日常生活の中で子どもの心が動くような体験活動を工夫し、その感動や思いを言葉で表現することができるように援助した。 ・「伝え合う力」の基盤となる「話す力」「聞く力」が向上するように言語活動の充実を図った。（朝の会・帰りの会・読み聞かせ・言葉遊び・親子読書・自然体験） ・子どもが言葉や文字に興味をもつような環境構成の工夫をした。

- ・「七夕の笹飾りを作ろう」
- 5歳児が小学校運動会へ参加
- 5歳児と1年生の交流
- ・「わくわくどきどき秋がいっぱい」
- ・「冬をたのしく」
- ・「もうすぐ1年生」
- 5歳児が小学校の音読発表会に参加

【教員の連携】

- ・定期的な研究推進委員会
- ・幼小合同研修会（幼小連携講演会等）
- ・校内研究会への参加
- ・幼小合同研究会（指導案検討会等）
- ・小学校教員による1日体験保育
- ・幼小連携通信の発行（幼小職員向け通信）

【家庭・地域への情報提供・啓発】

- ・園だよりやクラスだより、リーフレットの発行
- ・町の広報や防災無線による情報提供
- ・交流の様子や小学校と共通行事の写真を園内に掲示し、子どもの関心を高めるとともに、保護者へ幼小連携の取組の周知と啓発を図るようにした。

【園内研究会の実施】

- ・3歳児Ⅰ期から～5歳児Ⅴ期までの「伝え合う力のカリキュラム」を検討し、ねらいや環境・援助などを全教員で検討しながら系統表を作成した。特に5歳児Ⅴ期から1年生への連続性のある子どもの姿（発達）を明確にし、幼稚園ではぐくんできた「伝え合う力」を小学校の学びへとつないでいった。

【伝え合う力をはぐくむ取組の実施】

- ・「伝え合う力をはぐくむカリキュラム」を通して、日常生活の中で子どもの心が動くような体験活動を工夫し、その感動や思いを言葉で表現することができるように援助した。
- ・「伝え合う力」の基盤となる「話す力」「聞く力」が向上するように言語活動の充実を図った。（朝の会・帰りの会・読み聞かせ・言葉遊び・親子読書・自然体験）
- ・子どもが言葉や文字に興味をもつような環境構成の工夫をした。

平成21年度

【交流活動の実施】

「交流カリキュラム」を編成し、以下の交流活動を実施した。「かかわり・伝え合い」、「気づき」、「充実感」の3つを視点とした支援を行い、互いに学びのある交流活動を目指した。

○ 5歳児と5年生の交流

- ・ 田植えをしよう
- ・ 稲刈りをしよう

○ 5歳児と1年生の交流

- ・ 1年生が幼稚園で遊ぶ。(昼休み)
- ・ ローラーで遊ぶ。
- ・ 楽器で遊ぶ。
- ・ 「わくわくどきどき秋がいっぱい」
- ・ 冬をたのしく
- ・ もうすぐ1年生

【教員の連携】

小学校教員との積極的な連携を図り、教育内容や子どもの育ちについて理解を深めるために以下のことを実施した。

- ・ 定期的な研究推進委員会
- ・ 研究発表大会に向けての研究推進委員会
- ・ 夏季休業中の研修会(教育課程研修会等)
- ・ 保幼小中合同研修会(実践交流会等)
- ・ 幼小合同研究会(指導案検討会等)
- ・ 幼小連携通信の発行(幼小教員向け通信)
- ・ 交流活動前後の研修会

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究主題

「学びと育ちを確かにつなぐ幼小の連携」

～伝え合う力をはぐくむ環境や援助の在り方～

(2) 研究の仮説

幼稚園と小学校が連携を密にし、「伝え合う力」をはぐくむ交流活動や教育課程の編成、指導方法の工夫をしていけば幼児が安心・自信・あこがれの気持ちで小学校に入学し、幼小の円滑な接続が図られるであろう。

(3) 研究内容

- ① スタートカリキュラムの編成と指導内容・指導方法等の工夫と改善
- ② 「幼小交流カリキュラム」と「伝え合

う力をはぐくむカリキュラム」の編成

- ③ 環境や人とのかかわりの中で、幼児・児童の「話す」「聞く」「話し合う」等の言語活動を充実させ、伝えたい気持ちを高める教育の実践

- ④ 「かかわり・伝え合い」「気づき」「充実感」をねらいの視点とした交流活動の実践

(4) 取組

- ① 5歳児V期のカリキュラムを検討し、小学校のスタートカリキュラムにつなげる保育実践の工夫。

- ② 幼児・児童に「伝え合う力」をはぐくむ取組

ア 伝え合う力をはぐくむカリキュラムの編成と日常の取組の充実

イ 交流カリキュラムの編成と「かかわり・伝え合い」「気づき」「充実感」をねらいの視点とした交流活動の実践

ウ 子どもの「かかわり・伝え合い」を深める教員の言葉かけの工夫

エ かかわりを深めるペア活動の位置付け

オ 次時へと意欲をつなぐ振り返りの場の工夫

- ③ 幼小教員の緊密な連携

1日体験保育や合同研修会等による積極的な交流を図ってきた。このことにより幼稚園教育や子どもの育ちについての理解が深まった。

- ④ 家庭との連携

保護者に対して、幼小連携にかかわる取組の情報提供と啓発を行うことにより幼児や保護者の小学校入学に対する不安感が軽減するようにした。

また、小学校が行ったアンケート調査の結果をうけ、今後に生かすようにした。

(5) 成果・今後の課題

- ① 成果

ア 連携を通して互いの教育の目標や内容、伝え合う力を育成する指導の在り方、そして子どもの育ちについての理解を深めることができた。

イ 「伝え合う力をはぐくむカリキュラム」を編成し活用することにより、子どもたちの「伝え合う力」をはぐくむための環境や援助の工夫をすることができた。

子どもの心をわくわくさせる自然体験をしたり、いろいろな人と触れ合える環境をつくったりするなど、多様な体験を通して子どもの心を動かし言葉で伝えたい気持を育て、子どもたちの伝え合う力を高めることができた。

ウ 「交流カリキュラム」を編成し、計画的にかかわり合い、伝え合う力をはぐくむ交流活動を位置付けることができた。

エ スタートカリキュラムについては、幼稚園からの円滑な移行を目的として、幼稚園教育の中ではぐくまれた体験を通しての学びを無理なくつなげていけるように協議していくことができた。

オ 幼小連携に関する保護者への情報発信は、保護者の幼小連携に関する理解と幼稚園への信頼につながり、小学校入学への不安を和らげることができた。

② 課題

ア 今後も教員が緊密な連携を図り、話し合いの場や研修の場を設けるなど幼児・児童理解の視点にたち、援助の工夫についての研究を継続する必要がある。

イ 「伝え合う力をはぐくむカリキュラム」を活用して、伝え合う力をはぐくむための実践を継続する。また、交流活動の充実を通して子どもたちの「伝え合う力」をさらに高めていく。

ウ 幼小の教員で入学した子ども（1年生）の育ちを見取り、スタートカリキュラムの改善を図る。

エ 1年生と5歳児との交流が多く、他学年の教員が実際に児童とかかわったり、児童を観たりする機会が少なかった。幼小連携通信とともに、交流した教員が子どもの様子を伝えたり、幼小

連携にかかわる研修の場をより多く設定したりするなどして、全教員が幼稚園と小学校の時期における発達課題を的確にとらえ、より一層協同的な取組を推進していくことが必要である。

3 研究経過・成果の普及

20年度末に保護者向けのリーフレットを作成し、幼稚園、小学校の保護者に配布した。

平成21年11月26日に開催した教育課程研究指定校事業研究大会において広く実践を発表し、実践を研究紀要としてまとめた。

滋賀県教育委員会主催による「平成21年度文部科学省・県指定研究事業交流発表会」において、本事業の取組について実践の報告をし、県内に研究成果を発信した。

4 今後の展望

- 幼稚園ではぐくんだ伝え合う力を小学校につなげるために5歳児V期の接続カリキュラムの改善を図り、小学校入学への意欲を高めるとともに、スタートカリキュラムとの接続を一層図りたい。

- 2年間の研究の成果を生かし、幼小の教員が互いの教育内容や教育方法などについての議論や理解を深め、意見や経験を保育の中に反映させながら、指導計画の内容や「伝え合う力をはぐくむカリキュラム」・「交流カリキュラム」などを見直し、よりよいものにしていきたい。

- 幼小連携は、互いの教員が多様な接続の視点を持ち、子どもの育ちと学びを滑らかにつなげることを最重点において協議していく必要がある。互いの教育や子どもの育ちについて理解をより深めるためにも、継続して幼稚園と小学校で保育や学習指導の交流を進めたい。

- 小学校に入学した一人一人の児童の様子や保護者の感想などを聞き取り、本研究の有効性等を検証するとともに、新たな課題をもとにした幼小連携の深化を図りたい。

平成20・21年度教育課程研究指定校事業 研究成果報告書

ふりがな 学校名	ながはましりつとらひめしょうがっこう 長浜市立虎姫小学校 (旧虎姫町立虎姫小学校)
-------------	---

校長名：曾我 景年

所在地：滋賀県長浜市五村88

電話番号：0749-73-2063

⑤	幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るための教育課程の在り方に関する調査研究 (平成20・21年度)
幼小共通の研究主題	
「学びと育ちを確かにつなぐ幼小の連携」 ～伝え合う力をはぐくむ環境や援助の在り方～	

I 研究指定校の概要

1 学校・園・地域の特色及び実態

本校は、滋賀県の北東部に位置する、児童数 322 名の中規模校である。

児童は、明るく素直な子が多いが、コミュニケーション力に課題があり、上手に人間関係を築けない子が見られる。そこで、本校は、「伝え合う力を高める授業の創造」を校内研究の柱として研究を積み重ねてきた。

幼小中1校園ずつの地域であることから、保護者の教育に対する関心は高く、学校（園）への期待も大きい。

2 学校の概要

(小学校)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援 学級	計
学級数	2	2	2	2	2	2	2	14
児童数	63	45	50	52	47	61	4	322

教員数 28 名

II 連携体制

1 連携校・園名

自校	長浜市立虎姫小学校 (旧虎姫町立虎姫小学校)
連携校	長浜市立とらひめ認定こども園 (旧虎姫町立とらひめ幼稚園)

2 幼小連携教育研究協議会の構成員

所属・機関・職名等
<ul style="list-style-type: none"> ・虎姫町教育委員会 学校教育参事 ・とらひめ幼稚園 管理職, 研究主任, 5歳児主任 ・虎姫小学校 管理職, 研究主任, 1学年主任 ・とらひめ幼稚園PTA, 虎姫小学校PTA

III 研究の内容及び成果等

【2年間の研究成果の要点】

<ul style="list-style-type: none"> ・生活科と国語科の合科的指導によるスタートカリキュラムを編成することにより、遊びを通した学びから、徐々に教科を通した学びへとつなげることができた。 ・小学校の教員が幼稚園の保育を参観したり参加したりすることを通して、幼稚園教育の目標や内容、子どもの育ちについての理解を深めることができた。 ・「伝え合う力をはぐくむカリキュラム」を編成し系統ある教育を推進することにより、児童が言葉で自分の思いや考えを伝え合う姿が多く見られるようになった。 ・「交流カリキュラム」を編成し、「かかわり・伝え合い」「気づき」「充実感」の3つの視点を意識した指導をすることにより、児童と幼児とのかかわりが増し、伝え合う力をはぐくむ交流活動を実践することができた。 ・リーフレットや学年通信を配布するなど保護者に幼小連携に関する情報を発信したことにより、保護者の学校への理解や信頼、小学校教育への期待感を高めることができた。
--

1 研究主題と研究の主な取組

(1) 研究主題設定のねらい

<p>幼稚園と小学校の子どもの共通課題として、コミュニケーション力が弱く、思いを言葉で伝え、友達関係をうまく築くことができないことがあげられる。また、基本的な生活習慣が確立していない子があり、学習に支障をきたすこと</p>

がある。

本研究では、子どもたちの大きな課題であるコミュニケーションの力を系統的に高めるために「伝え合う力の育成」を柱とした教育課程を編成することとし、幼稚園から小学校への計画的かつ継続的な接続の取組を行うことにした。

さらに、幼小の教員の連携を強化し、幼児が小学校に入学した後の学習面や生活面の向上、さらに発達に課題のある児童への適切な援助を充実させていくために、『学びと育ちを確かにつなぐ幼小の連携 ～伝え合う力をはぐくむ環境や援助の在り方～』を研究課題として掲げた。

研究の仮説としては、『幼稚園と小学校が連携を密にし、「伝え合う力」をはぐくむ交流活動や教育課程の編成・指導方法の工夫をしていけば、幼児が安心・自信・あこがれの気持ちで小学校に入学し、幼小の円滑な接続が図られるであろう。』を掲げ、幼小の教員が共通理解し、一丸となって研究を推進することにした。

(2) 2年間の主な取組

	【交流活動の実施】
平成20年度	幼児や友達とのかかわりを通して、児童の「伝え合う力」を高めるために、以下の5歳児との交流活動を実施した。(実施順)
	・はじめまして(5年生)
	・田植えをしよう(5年生)
	・ミニ運動会(5年生)
	・七夕の笹飾りを作ろう(6年生)
	・5歳児が運動会に参加
	・おにぎりパーティーをしよう(5年生)
	・わくわくどきどき秋がいっぱい(1年生)
	・年賀状を書こう(1年生)
	・稲刈りをしよう(5年生)
	・冬を楽しく(1年生)
	・もうすぐ1年生(1年生)
	・5歳児が音読発表会に参加
	【教員の連携】
	幼稚園教員との積極的な交流を図り、幼

稚園教育や園児の育ちについての理解を深めるために以下のことを実施した。

- ・定期的な研究推進委員会
- ・幼小合同研修会(幼小連携講演会等)
- ・園内研究会への参加
- ・校内研究会に幼稚園教員が参加
- ・幼小合同研究会(指導案検討会等)
- ・幼稚園での1日保育体験
- ・幼小連携通信の発行(幼小教員向け通信)

【家庭・地域への情報提供・啓発】

保護者の幼小連携に関する理解を深めるために、学校だよりや学年だよりを配布するとともに、年度末には、幼小連携にかかるリーフレットを発行した。

【学校生活への適応】

平成21年度 遊びから教科学習への円滑な移行をねらいとして、以下の内容によるスタートカリキュラムを編成した。

- ・よろしくね
 - ・がっこうってたのしいな①
 - ・がっこうってたのしいな②
 - ・入学時の取組(幼稚園での環境を生かした教室経営・図書の読み聞かせ等)
- また、昨年の交流活動でのつながりを継続・発展させるため、1年生と2・3年生との異学年交流を実施した。

【伝え合う力をはぐくむ取組の実施】

「伝え合う力をはぐくむカリキュラム」の編成においては、児童の意見や考えを深める交流の場を授業の中に意図的に設定したり、日常的な詩の暗唱活動やスピーチ活動などを取り入れたりするなど、言語活動の充実を図った。

【交流活動の実施】

「交流カリキュラム」を編成し、以下の5歳児との交流活動を実施した。「かかわり・伝え合い」、「気づき」、「充実感」の3つを視点とした支援を行い、互いに学びのある交流活動を実施した。(実施順)

- ・田植えをしよう（５年生）
- ・昼休みを利用した交流（１年生）
- ・稲刈りをしよう（５年生）
- ・図工科，音楽科での交流（１年生）
- ・わくわくどきどき秋がいっぱい（１年生）
- ・冬をたのしく（１年生）
- ・もうすぐ１年生（１年生）

【教員の連携】

幼稚園教員との積極的な交流を図り，幼稚園教育や園児の育ちについての理解をより深めるために以下のことを実施した。

- ・定期的な研究推進委員会
- ・研究発表大会に向けての研究推進委員会
- ・夏季休業中の研修会（教育課程研修会等）
- ・保幼小中合同研修会（実践交流会等）
- ・幼小合同研究会（指導案検討会等）
- ・幼小連携通信の発行（幼小教員向け通信）
- ・交流活動前後の研究会

【保護者アンケートの実施】

１年生の保護者を対象に幼小連携に関する意識調査を実施し，取組の検証を行った。

- ③ 人とのかかわりの中で，幼児・児童の「話す」「聞く」「話し合う」等の言語活動を充実させ，伝えたい気持ちを高める教育の実践
- ④ 「かかわり・伝え合い」「気づき」「充実感」をねらいの視点とした交流活動の実践

(4) 取組

① スタートカリキュラムの編成
生活科と国語科との合科的な指導を中心とした指導方法の工夫を行った。

② 幼児・児童に「伝え合う力」をはぐくむ取組

児童に伝え合う力をはぐくむために以下の取組を実践した。

ア 伝え合う力をはぐくむカリキュラムの編成と日常の授業実践

イ 交流カリキュラムの編成と「かかわり・伝え合い」「気づき」「充実感」を視点とした交流活動の実践

ウ 交流活動における児童の「かかわり・伝え合い」を深めるための場の設定，ペア活動の位置付けと教師の言葉かけの工夫

エ 次時へと意欲をつなぐ振り返り活動の工夫

③ 幼小教員の緊密な連携

１日体験保育や合同研修会等を実施し積極的な教員の連携を図った。

④ 家庭との連携

保護者に対して，幼小連携にかかわる取組の情報提供を行うことにより，幼児や保護者の小学校入学に対する不安感が軽減するようにした。

また，アンケート調査を実施し，その結果を今後に生かすようにした。

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究主題

「学びと育ちを確かにつなぐ幼小の連携」

～伝え合う力をはぐくむ環境や援助の在り方～

(2) 研究の仮説

幼稚園と小学校が連携を密にし，「伝え合う力」をはぐくむ交流活動や教育課程の編成・指導方法の工夫をしていけば，幼児が安心・自信・あこがれの気持ちで小学校に入学し，幼小の円滑な接続が図られるであろう。

(3) 研究内容

① スタートカリキュラムの編成と指導内容・指導方法等の工夫と改善

② 「幼小交流カリキュラム」と「伝え合う力をはぐくむカリキュラム」の編成

(5) 成果・今後の課題

① 成果

ア 連携を通して幼稚園教育の目標や内容、そして発達の連続性という視点で子どもの育ちについての理解を深めることができた。

イ 「伝え合う力をはぐくむカリキュラム」を編成することにより、子どもたちの伝え合う力を高めることができた。

ウ 「交流カリキュラム」を編成することにより、かかわり合い、伝え合う学びのある交流活動を位置付けることができた。

エ スタートカリキュラムを編成することにより、子どもたちが意欲的に学習に取り組むことができた。また、活動や体験の時間を余裕をもって進めることができ、子ども同士が、自分の思いを積極的に伝え合うことができた。

オ 保護者への幼小連携に関する情報発信は、保護者の幼小連携に関する理解と学校への信頼を高めることにつながった。

② 課題

ア 今後も教員が緊密な連携を図り、話し合いの場や研修の場を設定するなど、幼児・児童理解および援助・支援の工夫についての研究を継続する必要がある。

イ 交流活動は、活動のねらいを明確にするとともに、授業時数を勘案しながら実施していかなければならない。現在の教育課程を工夫する中で、無理なく幼児と交流できるようにより一層のカリキュラムの見直しと改善を行う。

ウ スタートカリキュラムの見直しと改善を行い、幼小の円滑な接続に向けた授業実践を進める。

エ 1年生と5歳児との交流が多く、他

学年の教員が実際に園児とかかわったり、園児を観たりする機会が少なかった。幼小連携通信とともに、交流した学年が子どもの様子を伝えたり、幼小連携にかかわる研修の場をより多く設定したりするなどして、全教員が幼稚園と小学校の時期における発達課題を的確にとらえ、より一層協同的な取組を推進していくことが必要である。

3 研究経過・成果の普及

20年度末に保護者向けのリーフレットを作成し、幼稚園、小学校の保護者に配布した。

また、平成21年11月26日に開催した、「教育課程研究指定校事業研究発表大会」においては、取組を公開し報告をした。また、実践を研究紀要としてまとめた。

滋賀県教育委員会主催による「平成21年度文部科学省・県指定研究事業交流発表会」において、本研究の取組について報告し、県内に研究成果を発信した。

4 今後の展望

今後、これまでの幼小連携の成果を日常化し継続・深化させていくための取組として特に以下の2点をあげる。

(1) 幼小教員同士の相互理解

幼小連携を進める上で、幼児・児童理解および支援の工夫が重要である。そのために、教員が緊密な連携を図り、教員の保育や学習指導についての体験を継続し、子どもの育ちや互いの教育についての理解を深める。また、園児の個々の育ちについて、引継ぎをていねいに行うとともに入学後も情報交換を密にする。

(2) 各カリキュラムの見直しと改善

各カリキュラムの見直しと改善を図り、それを活用して幼小の系統的な教育をより一層推進する。幼小全教員が共通理解のもと、「伝え合う力の育成」を柱とした取組を継続していきたい。

平成 20・21 年度教育課程研究指定校事業 研究成果報告書

がっこうめい 学校名	がっこうほうじん だ て がくえんつきみようちえん 学校法人伊達学園月見幼稚園
---------------	--

園長名： 亀山啓司

所在地： 広島県三原市西町2丁目7番9号

電話番号： 0848-62-2501

⑤	幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を 図るための教育課程の在り方に関する 調査研究 (平成 20・21 年度)
幼小共通の研究主題	
発達の連続性を確保するための指導内容や方法の 工夫・改善 ～基本的生活習慣の定着とコミュニケーション力 の育成をめざして～	

I 研究指定校の概要

1 学校・園・地域の特色及び実態

本園は市街地山手の立地条件の良さから自然豊かな
幼児教育に適した環境を有しているが、卒園児は市内の
11小学校（平成21年度入学実績）へ進学するなど、
小学校併設園に見られる1対1の関係ではなく、1対多
の関係であるため、交流活動への実施など幼小連携が難
しい環境にある。

多くの卒園児が入学する3つの近隣小学校との距離
もおおの約2kmあり、交流活動実施に向けての弊害と
なっていた。近年、通園バスの購入により移動しやす
くなり、これも幼小連携を図るきっかけの一つにあげら
れる。

一方、園児並びにその保護者の意識調査において、小
学校での生活や学習に対して、知らないことに起因する
不安を持っていることや、保護者は学習内容や教育環境
に興味や関心が高いことがうかがわれた。

こうした背景から、連携小学校との距離のハンデを
乗り越え、今回の調査研究をする必要があると考える。

2 学校の概要（平成21年5月1日現在）

（幼稚園）

		満3歳児	3歳児	4歳児	5歳児	計
学級数		1	2	2	2	7
園児数	男	0	18	25	19	62
	女	2	25	16	29	72
	計	2	43	41	48	134

教職員数 13名

II 連携体制

1 連携校名

自園	学校法人伊達学園月見幼稚園
連携校	三原市立三原小学校

2 幼小連携教育研究協議会の構成員

所属・機関・職名等
<ul style="list-style-type: none"> ・福山平成大学 准教授 ・広島県教育委員会指導第一課 ・広島県東部教育事務所教育指導課 ・広島県環境県民局総務管理部学事課 ・三原市教育委員会 学校教育課長、指導主事 ・広島大学附属三原小学校 教諭 ・三原小学校 校長、教務主任、PTA 会長 ・月見幼稚園 園長、PTA 会長

III 研究の内容及び成果等

【2年間の研究成果の要点】

<ul style="list-style-type: none"> ・ 交流活動の回数を重ねる毎に、スムーズにコミュニ ケーションがとれるようになり、園児は小学生に 対する憧れを抱き、交流活動に期待感をもって取り 組むようになった。 ・ 教師の意図した子ども間の育ち合い（憧れや思い やりなど）とは別に、教師の意図していない育ち合 い（葛藤や拒否への対応など）が生まれることに気 付くことができた。 ・ 交流活動を計画・実施する過程で、幼稚園教諭は 小学校の学習や生活を、小学校教諭は幼稚園の保育 や生活を身近に体験することで、相互理解が生まれ てきた。 ・ 幼小連携を経験したことで、新幼稚園教育要領 に基づく、「つながる教育」をキーワードにしたア プローチカリキュラム並びに年間指導計画を作成 した。 ・ 体験型学びの一環としての学校ごっこの実践方法 を検討し、交流活動から得られた経験を園内学年間 交流に活かした。 ・ 幼小連携（交流活動）の実践内容及び調査結果を 広く公開して、就学に向けた園児と保護者の不安を 解消することができた。
--

1 研究課題と研究の内容等

(1) 研究主題設定のねらい

近年、いわゆる小1プロブレムが指摘される中、就学前教育と小学校教育の円滑な接続が望まれるようになった。

一方、広島県教委が平成15・18年に実施した幼児教育調査（保護者対象・幼稚園対象）の結果は、基本的生活習慣の定着や人間関係力（コミュニケーション力）の育成の必要性を指摘した。

本研究では、小学校への円滑な接続を図るために必要と考えられる「基本的生活習慣の定着」や「コミュニケーション力の育成」を重点課題と捉え、どのような指導内容や指導方法を工夫・改善すればよいのかを、小学校との連携（交流活動）を通して明確にするとともに、「つながる教育」をキーワードとしたアプローチカリキュラム（教育課程並びに年間指導計画）を作成することをねらいとする。

(2) 2年間の主な取組

2年 間 を 通 し て	<p>園内研修</p> <p>(1) 幼小連携（交流活動等）の報告会 活動内容や課題抽出を行い、本研究に対する共通認識を得ることで、交流クラスだけでなく、園全体の活動として捉えられるようになった。</p> <p>(2) 新教育課程並びに年間指導計画の作成 平成21年4月からの新幼稚園教育要領の施行に伴い、教育課程検討会議（15回）を開催し、幼小連携（交流活動）から得られた貴重な経験を活かして、満3歳児→3歳児→4歳児→5歳児、そして小学1年生と、「つながる教育」をキーワードに、新しい教育課程並びに年間指導計画を作成した。</p> <p>(3) 新教育課程並びに年間指導計画の検証と見直し 平成21年4月から新しい教育課程・年間指導計画に基づく保育実践を通して、検証しながら、学期末毎に見直しを行った。</p> <p>交流活動指導案検討会議 本研究を始めるに当たり、幼小連携に関する情報の共有並びに学校種による教育内容の違いを互いに理解し、交流活動時の指導案に関する意見交換を基に、合同指導案を作成することが出来るようになった。</p>
-----------------------------	--

平成 20 年 度	<p>5月：事前交流活動（園児・児童の顔合わせ）</p> <ul style="list-style-type: none"> 交流活動をスムーズに行うため、ペアによる自己紹介などのコミュニケーションを通して、次の交流活動に期待が持てた。 保護者へのアンケート調査（全園児対象） 集計結果から、基本的生活習慣や人（友達）との関わりにおける園児の課題が明らかになった。 <p>6月：第1・2回交流活動（幼小連携授業研究会）</p> <ul style="list-style-type: none"> 交流活動を通して、コミュニケーションを上手にとるための留意事項や課題を抽出できた。 <p>7月：第3回交流活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 第1・2回の交流活動の反省を生かして活動できたことで、園児・児童の見取りができた。 <p>9月：第4回交流活動（三原小学校教育研究会）</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究成果を公開することができた。 <p>1月：第5回・第6回幼小連携交流活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 「昔遊び」という活動内容がコミュニケーション力の向上に効果的であることを確認できた。 <p>2月：第7回交流活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 校内探検と学校給食を体験することで、園児の小学校入学に対する意識と期待が一段と高まった。 <p>3月：新教育課程並びに新年間指導計画の作成</p> <ul style="list-style-type: none"> 新年度からの実践に向けて、教職員の共通理解ができた。 保護者へのアンケート調査（年長児対象） 5月のアンケート結果と比較すると、基本的生活習慣の定着とコミュニケーション力の育成を含め、全体的な成長が見られた。
平成 21 年 度	<p>5月：卒園児の集い</p> <ul style="list-style-type: none"> 1年間の幼小連携（交流活動等）を経験した卒園児から、学校生活・上級生との関わり・給食・学習面などに関して、例年に比べポジティブな意見や感想が得られた。 <p>6月：第1・2回交流活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 前年度の経験を活かした合同指導案を基に、スムーズな活動ができた。 <p>7月：第1回教育課程検討会議</p> <ul style="list-style-type: none"> 教育課程並びに年間指導計画（1学期分）を活動の流れに即して、見直した。

平成 21 年度	<p>9月：保護者へのアンケート調査（全園児対象）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 昨年度と同様に、基本的な生活習慣や人（友達）との関わりにおける課題を抽出できた。 <p>10月：第3回交流活動，11月：第4回交流活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 一緒に秋の贈り物を見つけるオリエンテーリング（自然公園や神社を活動エリアとして）がコミュニケーションを上手にとれる活動として適していることが分かった。 <p>1月：第2回教育課程検討会議</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教育課程並びに年間指導計画（2学期分）を活動の流れに即して、見直した。 第5回交流活動（三原小学校教育研究会） ・ 三原小学校教育研究会の一環として、昔遊び（こま回しや凧作りなど）の交流活動を実施するとともに、小学校給食を体験できたことで、園児の小学校に対する期待が高まった。加えて、研究成果を公開することもできた。 <p>2月：第6回交流活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 昨年度と同様に、学校探検（校内探検）を実施することで、園児の小学校入学に対する意識と期待が一段と高まった。 <p>3月：第3回教育課程検討会議</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教育課程並びに年間指導計画（3学期分）を活動の流れに即して、見直した。
----------------	--

の保育の中でその克服に向けて取り組むことで、幼稚園生活の充実と小学校への円滑な接続を目指す。

- ② 園児の生活面での実態を踏まえて、育てたい力を幼小で共通認識して取り組むことで、基本的な生活習慣の定着を図る。

交流活動の中では、「後片付け」「人の話をしっかりと聞くこと」を重点課題として幼小で共通認識して取り組む。

また、交流活動を通して、園児と児童が自然な形でコミュニケーションをとりながら、様々な活動を楽しむことで、園児が小学校や児童に期待や憧れを抱けるようにした。さらに、活動の中で、時間を意識することや、人の話を最後まで聞いて自分の意見を言うことなどにも取り組む。

- ③ 今まで経験したことがない小学生との交流活動で得られた貴重な体験を、幼稚園で「学校ごっこ」として、自分で楽しんだり、年中児や年少児に教えてあげたりすることで、異年齢児間のコミュニケーションを図る。年長児には年中児・年少児への思いやりやいたわりの心を育み、また年中児・年少児にとって憧れの存在となることで、自尊心・自己肯定感・有能感を育てる。

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 具体的な研究課題

多様な遊び（体験型の学び）を通して、幼稚園から小学校への円滑な接続を目指す指導法の工夫・改善
～「基本的な生活習慣の定着」と「コミュニケーション力の育成」をめざして～

(2) 取組

- ① 「基本的な生活習慣」「コミュニケーション力」「遊び体験」などについて、保護者アンケートや園児の行動観察を行い、課題を明らかにし、取組の方向性を明確にする。

アンケートの結果から、「身の回りのことを自分でする」「脱いだ衣服を自分でたたむ」「自分の意見を言うことができ、相手の意見も受け入れることができる」「人の話を注意して聞く」などの項目が課題であることが分かった。このうち、園生活の中で園児が取り組みやすいと思われる「身の回りのことを自分でする」「人の話を注意して聞く」の2つを重点課題として、日々

2年間の交流活動の内容

時期	年長児と1年生	年長児と5年生
H20.5		顔合わせ
H20.6	顔合わせ、シャボン玉遊び①	ランチマットづくり①
H20.7	シャボン玉遊び②	ランチマットづくり②
H20.9	マラカスづくり	絵手紙作り
H21.1	昔の遊び	昔の遊び・餅つき
H21.2		ドッチボール大会・お掃除体験・給食
H21.3	学校探検	
H21.6	顔合わせ、シャボン玉遊び	踊ろう“ハハハ大王”
H21.10	秋の宝物探し・制作活動	
H21.11		秋の宝物探し(クリスマス)
H22.1	昔の遊び	凧づくり・凧あげ
H22.2	学校探検	学校探検・お掃除体験

また、実施に当たっては、交流活動に向け、
幼小の教員が連携して合同指導案（資料1）を
作成し、交流活動を行う。

- ④ 学年間及び小学校への円滑な接続をめざして、「つながる教育」をキーワードとしたアプローチカリキュラム〔教育課程（資料2）並びに年間指導計画〕を作成（平成20年度）し、その実践と検証（平成21年度）を行う。

(3) 成果・課題

- ① アンケートの結果から、基本的な生活習慣の定着に向けては「身の回りのことを自分です」「脱いだ衣服を自分でたたむ」、コミュニケーションの育成に向けては「自分の意見を言うことができ、相手の意見も受け入れることができる」「人の話を注意して聞く」などの課題が抽出された。

これらの課題の中から、幼小それぞれの教職員が、「後片付け」「人の話をしっかりと聞くこと」を重点課題として共有して指導を行うことができた。そして、見て做うという幼児の特性を発揮して、交流活動の中で児童の行動を做って、後片付け並びに人の話をしっかりと聞くことができるようになってきた。

基本的な生活習慣の定着には、家庭との連携が不可欠であることから、園児の見取り及び継続的な保護者アンケートを実施して、その結果をフィードバックしていく必要がある。

- ② 合同指導案を作成して交流活動を行うことで、幼小の活動内容や活動のねらいが明確になった。

また、交流活動を通して、小学校に対する期待感が生まれるとともに、児童を身近な目標や憧れの対象として捉えられるようになった。

さらに、交流活動で得られた貴重な体験を園内で他のクラスや学年に教えてあげる「学校ごっこ」を通して、異年齢児間に思いやりやいたわり、憧れの気持ちが生まれた。また、教える側に立った経験は年長児に自尊心・自己肯定感・有能感が育った。

- ③ 2年間の幼小連携の研究で得られた交流活動等のノウハウを他の小学校との連携・交流に活

かして行く必要がある。

3 研究経過・成果の普及

- (1) 研究会の実施

平成20年度・21年度国立教育政策研究所教育課程研究指定校表として、研究集録を作成し、その発表として教育研究会を毎年1回行った。

- (2) 報告書作成と配布

平成20年度・21年度国立教育政策研究所教育課程研究指定校事業の中間報告書並びに最終報告書を作成し、希望する広島県内並びに岡山県内の幼稚園に配布した。

- (3) 保護者並びに地域の人々

幼小連携（交流活動等）の状況を園だよりの配布や作品展でのパネル展示などを通して、広報した。また、交流活動や三原小学校研究会への園児保護者の参加を呼びかけ、交流活動を直接見学する機会を設けた。

4 今後の展望

- (1) 本園の卒園児は多数の小学校（平成21年度実績：11校）に入学するので、今回の研究成果を基に、連携先を広げていくことが幼小連携教育の充実につながるものと考えている。

そのため、今後も市教育委員会との連携をとりながら、幼小連携の研究・活動を進め、2年間の研究成果を生かすため、比較的本園に近く入学者数も多い小学校との連携を進めていきたい。

加えて、幼稚園内の学年間交流の機会を増やして、園児の幼稚園生活をさらに充実させ、幼小間のギャップを乗り越える力を一人一人に育んでいく。

- (2) 新しい教育課程並びに年間指導計画については学期毎に見直して、より実態に即したものと改善していく。

(参考資料 1)

月見幼稚園・三原小学校交流活動計画書

「秋を体で感じて、季節の贈り物を使って、一緒に制作活動を楽しもう」

実施日：平成 21 年 10 月 29 日 (木)

学校法人伊達学園月見幼稚園つき組(年長クラス)・三原市立三原小学校 1 年 1 組

時刻	幼稚園	活動の流れ	小学校	時刻
	■園児の活動 ○教師の援助とねらい		■児童の活動 ○教師の支援 ☆評価規準(方法)	
登園 ~9:30	■自由遊び		○園児との交流活動を事前に知らせておき、期待感をもたせる。	
9:40	■みどりの広場に集合する。 ○交流活動が楽しく行えるように、約束を再確認する。 ■1年生と再会する。(みどりの広場)	1 再会を喜ぶ。	■園バスに乗車して、月見幼稚園に向かう。	9:40
10:00	■元気に朝の挨拶をする。 ■1年生とペアになり、歌遊びを楽しむ。 ○子どもに緊張が見られる時は、リラックスできるよう声掛けをする。 ○活動の流れとめあて、並びに注意事項を話す。 ■活動の流れとめあて、並びに注意事項を聞く。 ○オリエンテーリング用の地図を見せて、本日の活動内容と注意事項を伝え、1年生と一緒に活動への意欲を高める。 ○秋の野原や林にはどんな物があるのか質問を投げかけ、夏との季節や自然の違いに目が向くように話して、活動に興味や関心がもてるようにする。	↓ 2 はじまりの会をする。	■園児たちと再会する。(みどりの広場) ■元気に朝の挨拶をする。 ■園児とペアになり、歌遊びを楽しむ。 ○今回の活動の目的を確認させ、「ペアと一緒にオリエンテーリング&制作活動を楽しむ。」ことを意識させる。	10:00
10:15	■グループ(6班)に分れ、地図と袋(見つけた物を入れる)とカードをもらい、順番にスタート位置からオリエンテーリングを始める。 ■1年生と一緒に、秋を感じながら、ポイントを見つけ、季節の贈り物を収集する。 ○活動している場所に行き、1年生と園児のペアが楽しく活動できるように援助する。 ○ペアの関わりを見守り、1年生が上手にリードできず、園児が戸惑ったり、互いのコミュニケーションの中で、自分の思いを伝えられない子どもがいれば、お互いを仲介したり、援助する。	↓ 3 活動の流れとめあて、並びに注意事項を知る。	■活動の流れとめあて、並びに注意事項を聞く。 ○オリエンテーリング用の地図を見せて、本日の活動内容と注意事項を伝え、園児と一緒に活動への意欲を高める。	10:15
11:00	■ゴール地点(遊戯室)に帰ってくる。 ■オリエンテーリングの振り返りをする。 ○風や雲の様子、山の色など、秋という季節を感じ取ったことを伝え合う場をつくり、秋を実感できるようにする。 ○散策中に見つけた物を紹介する機会を作り、共感したり、新たな発見ができるようにする。 ■遊戯室に準備した机で、制作活動を楽しむ。 ○ペアがかかわって制作活動を楽しめるよう声をかける。 ○自分で材料を選べるように、薄い紙・細長い紙・空き箱・紙コップ・型紙・色紙などを準備しておく。	↓ 4 グループに分かれ、オリエンテーリングを楽しみながら、季節の贈り物を収集する。	■グループ(6班)に分れ、地図と袋(見つけた物を入れる)とカードをもらい、順番にスタート位置からオリエンテーリングを始める。 ■園児と一緒に、秋を感じながら、ポイントを見つけながら、季節の贈り物を収集する。 ○楽しく活動できているか見守り、園児に声をかけさせたり、園児の思いを確かめたりしながら活動させる。 ○活動の時間をしっかり確保させ、楽しく活動できるように言葉かけをする。 ○困った時は、周りの人のやり方を見て声かけをしたり、教えたりできるように励ましていく。	11:00
11:45	■1年生とともに後片付けをする。 ○片付けの様子を見ながら、一緒にできるように声をかける。	↓ 5 オリエンテーリングの振り返りをする。	■ゴール地点(遊戯室)に帰ってくる。 ■オリエンテーリングの振り返りをする。 ○風や雲の様子、山の色など、秋という季節を感じ取ったことを伝え合う場をつくり、秋を実感できるようにする。 ○散策中に見つけた物を紹介する機会を作り、共感したり、新たな発見ができるようにする。 ■遊戯室に準備した机で、制作活動を楽しむ。 ○ペアがかかわって制作活動を楽しめるよう言葉をかける。 ○自分で材料を選べるように、薄い紙・細長い紙・空き箱・紙コップ・型紙・色紙などを準備しておく。	11:45
11:50	■今日の楽しかった活動を振り返る。 ○1年生と一緒に遊んだ自分の思いを表現できるように援助する。 ○思いのある表情を見せるが、恥ずかしさから言い出せない子がいる時は、言い出せるよう援助して、「言えた」という満足感を味わえるようにする。	↓ 6 制作活動を楽しむ。	■ペアの園児と一緒に後片付けをする。 ○ペアの園児に声かけをしながらきちんと片付けができるように言葉をかける。	11:50
12:00	■元気に終わりの挨拶をする。 ○今日の楽しかった思いを伝え、次回の活動に期待がもてるようにする。 ■1年生と「さよなら またね」の挨拶をして見送る。	↓ 7 後片付けをする。	■今日の楽しかった活動を振り返る。 ○発見や驚き、楽しく活動できたこと、工夫したことなどを感想の中で言えるように、事前に話しておく。お互いの感想を聞き合い、次の活動への意欲を持たせる。	12:00
12:10	■保育室に戻り、水分補給(お茶)をする。 ○保育室に帰って、みんなの前では話せなかった子どもの思いにもしっかり耳を傾ける。	↓ 8 全体の振り返りをする。	■元気に終わりの挨拶をする。 ○よかったところや、園児のがんばりを評価する。 ■園児と「さよなら またね」の挨拶を交わし、帰路に着く。 ■園バスに乗車して、三原小学校へ帰る。	12:15
		↓ 9 終わりの会をする。	■給食の準備をする。	12:30

(参考資料 2)

幼小交流活動 “秋を体で感じて、季節の贈り物を使って、一緒に制作活動を楽しもう”

月見幼稚園つき組(年長児) & 三原小学校 1 年生 : 平成 21 年 10 月 29 日



園児と児童が班毎に分かれ、交流活動(オリエンティング)の説明を聞く



園児と児童が協力して、ポイントを探しながら、秋の贈り物を収集する



幼稚園教諭と小学校教諭が連携して制作活動の説明をする

学校法人伊達学園月見幼稚園教育課程 (平成 21 年 4 月 1 日施行)

年	満 3 歳児	3 歳児	4 歳児	5 歳児
心情	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園生活に慣れ、安心して過ごす ・先生や同じクラスの子とも達などと心を通わせる ・挨拶や歌などを通して、言葉での表現を体験する 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園生活に慣れ親しみ、喜んで登園する ・好きな遊びをしたり、先生や友達と一緒に遊ぶことを楽しむ ・自分の気持ちを言葉で表現する嬉しさを味わう 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園生活を喜び、積極的に楽しむ ・自分のしたい遊びを選んで、友達と楽しく遊ぶ ・自分の思ったことや考えたことを伝え合う喜びを味わう 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園生活を楽しみ、最年長児として他の学年の面倒を見るときともに、他学年の子ども達の憧れの対象になる ・集団遊びの中で、友達と協力する楽しさや喜びを味わう ・積極的に、友達と思いを出し合い、互いに受け入れ合って、思いが伝わる喜びや伝え合う心地良さを味わう
意欲	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の好きな遊びを楽しむ ・身体を動かして遊ぶことを楽しむ 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と触れ合いながら、自分の好きな遊びを広げていく ・身体を十分に動かしたり、いろいろな動きのある遊びを楽しむ 	<ul style="list-style-type: none"> ・遊び体験を広げ、友達と一緒にいろいろな遊びを楽しむ ・積極的に全身を動かして遊ぶことを楽しむ 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と相談して、遊びを計画したり、展開したり、見通しを持って、主体的に行動する ・目標を持って、いろいろな運動遊びに積極的に関わって楽しむ
態度	<ul style="list-style-type: none"> ・先生の援助をもらって、簡単な身の回りのことを自分でしようとする ・色々なものに興味を持つ ・身近な自然の事象や変化と関わる中で、見たり、聞いたり、嗅いだり、味わったり、触れたりして、五感を十分に働かせる 	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的生活習慣を身に付け、決まりを守ろうとする ・自分が興味や関心を持ったことに、主体的に関わろうとする ・身近な社会や自然の事象や変化と関わり、興味や関心を持ち、五感を十分に使って、発見したり、観察したりして楽しむ 	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的生活習慣を身に付け、決まりを守って行動する ・色々なことに興味や関心を持ち、主体的に関わり、生活に取り入れ楽しもうとする ・身近な社会や自然の事象や変化に興味や関心を持ち、五感を研ぎ澄まして、発見したり、考えたりして楽しみ、体験したことや得られた知識を自分の生活に取り入れようとする ・身近な人達への思いやりや感謝の気持ちを持つ 	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的生活習慣を身に付け、良いことや悪いことを考えて行動する ・自分で発見したことに興味や関心を持ち、不思議に思ったり、考えたり、主体的に関わる ・身近な社会や自然の事象や変化に加えて、文字や数量に興味や関心を持ち、豊かな心情や知的好奇心、探究心を高め、体験したことや得られた知識を積極的に自分の生活に取り入れる ・身近な人達への思いやりや感謝の気持ちを持ち、それを表現する

がっこうめい 学校名	みはらしりつみはらしょうがっこう 三原市立三原小学校
---------------	-------------------------------

校長名： 森谷 浩
所在地： 広島県三原市館町 2 丁目 3 番 1 号
電話番号： 0848-62-2165

⑤	幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るための教育課程の在り方に関する調査研究 (平成 20・21 年度)
幼小共通の研究主題	
発達の連続性を確保するための指導内容や方法の工夫・改善 ～基本的な生活習慣の定着とコミュニケーション力の育成をめざして～	

I 研究指定校の概要

1 学校・園・地域の特色及び実態

本校は、市街地にあり、駅や公共施設・商業施設が多く、自由に遊べる場所は少ない。保護者は、商工・漁業をはじめ、広範囲な職業に携わっている。近年、校区内にマンションの建設が相次ぎ児童数が増加傾向にある。大人同士だけでなく、子ども同士のコミュニケーションのとり方や人間関係づくりが課題になっている。

2 学校の概要 (平成 21 年 5 月 1 日現在)

(小学校)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計
学級数	3	2	3	3	3	2	2	18
児童数	83	60	82	87	82	69	12	475

教職員数 48 名

II 連携体制

1 連携校名

自校	三原市立三原小学校
連携校	学校法人 伊達学園 月見幼稚園

2 幼小連携教育研究協議会の構成員

所属・機関・職名等
・福山平成大学 准教授
・広島県教育委員会 指導第一課 指導主事
・広島県東部教育事務所 教育指導課 指導主事
・広島県環境県民局 総務管理部 学事課 主任
・三原市教育委員会 学校教育課長, 指導主事
・広島大学附属三原小学校 教諭
・三原小学校 校長, 教務主任, PTA 会長
・月見幼稚園 園長, PTA 会長

III 研究の内容及び成果等

【2 年間の研究成果の要点】

- 基本的な生活習慣の指導では、保護者アンケート調査から明らかになってきた「自分で考えて行動することを促す」「相手の話をしっかり聞き、相手の意見も受け入れることができるような授業づくり」の 2 つの課題に焦点化した指導を重ねることで、児童の意識を高めることができた。
- コミュニケーション力の育成では、かかわりのもてる交流活動を仕組むことで、児童のコミュニケーション力が育ってきた。また、基本的な授業展開モデルの作成や交流活動の内容がコミュニケーションの活性化に影響することの確認ができた。
- 幼小の円滑な接続の実現については、「三原小ナビ」を作成して新入生保護者へ配布し学校理解を図ることができた。また、他教科との関連を図った生活科のスタートカリキュラムを作成し、今年度入学児童に実施することで、小学校生活への移行を滑らかに行うことができた。

1 研究主題と研究の主な取組

(1) 研究主題設定のねらい

近年、地域社会・家庭の教育力が低下してきている中、いわゆる小 1 プロブレムの指摘がなされている。本研究では、この課題を受け、楽しい学校生活をおくするために大切な「基本的な生活習慣」や「コミュニケーション力」にかかわる力を培うことを重点課題と捉え、どのような指導内容や指導方法を工夫・改善すればよいのかを、幼稚園との交流を通して明確にするとともに、研究成果を取り入れたスタートカリキュラムを開発することがねらいである。

(2) 2 年間の主な取組

平成 20 年度	5 月：1 年生保護者へのアンケートの実施 <ul style="list-style-type: none"> 集計結果から、基本的な生活習慣にかかわる児童の課題が明らかになった。 6 月：第 1・2 回授業研究 (幼稚園との交流活動) の実施 <ul style="list-style-type: none"> 交流活動の展開や交流活動を通してコミュニケーション力育成への留意事項を蓄積することができた。 8 月：校内研修会の実施 <ul style="list-style-type: none"> 幼小連携教育の理論研修を行い、カリキュラムや「三原小ナビ」の作成にむけた基本的な考え方の共有を図ることができた。 9 月：教育研究会 (幼稚園との交流授業) の開催 <ul style="list-style-type: none"> 研究成果を公開することができた。 1 月：第 3・4 回幼小連携交流活動の実施 <ul style="list-style-type: none"> 「昔遊び」という活動設定が、コミュニケーション力の向上に効果的であることを確認できた。
----------	---

平成 20 年度	<p>2月：「三原小ナビ」の作成と新入生保護者への配布</p> <ul style="list-style-type: none"> 入学説明会における「三原小ナビ」の配布が、学校理解へつながった。 <p>2月：第5・6回幼小連携交流活動の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校案内や給食の試食により、小学校への関心を高めることができた。 <p>3月：生活科のスタートカリキュラムの作成</p> <ul style="list-style-type: none"> 実践に向けて教職員の共通理解ができた。
平成 21 年度	<p>4～6月：平成21年度新入学児童に対するスタートカリキュラムの実践</p> <ul style="list-style-type: none"> 児童の小学校生活へのなめらかな移行を支援できた。 <p>5月：1年生保護者へのアンケートの実施</p> <ul style="list-style-type: none"> 集計結果から、基本的な生活習慣にかかわる児童の課題が明らかになった。 <p>6月：第1・2回授業研究（幼稚園との交流授業）の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> 交流活動を通してコミュニケーション力育成への留意事項を蓄積することができた。 <p>10月、11月：第3・4回幼小連携交流活動の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> 一緒に秋の贈り物を見つけるオリエンテーリングをするという活動設定がコミュニケーション力の向上に効果的であった。 <p>1月：教育研究会（幼稚園との交流授業）の開催</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究成果を公開することができた。 <p>2月：「三原小ナビ（改訂版）」の作成と新入生保護者への配布</p> <ul style="list-style-type: none"> 入学説明会における「三原小ナビ（改訂版）」の配布が学校理解へつながった。

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 具体的な研究課題

幼稚園から小学校への発達の連続性を確保したなめらかな接続を実現する。

(2) 取組

- ① 「基本的な生活習慣」「コミュニケーション力」「遊び体験」などについて、保護者アンケートや児童の行動観察を行い、課題を明らかにし、取組の方向性を明確にする。

アンケートの結果から、明らかになったいくつかの課題のうち、児童が成果を実感しやすい「片付け」「人の話を注意して聞く」の2つを重点課題として、取り組むことで小学校生活の円滑な移行を目指した。

- ② 児童の生活面での実態をもとにした付けたい力を幼小で共通認識して取り組むことで、基本的な生活習慣の定着（生活リズム）を図る。

交流活動の中では、「片付け」「人の話をしっかりと聞くこと」に幼小で共通認識して取り組んだ。

また、小学校では、幼稚園生活を思い起こさせながら、小学校生活に慣れることができるよう、児童の経験したことをふまえた取組を行った。幼稚園では、小学校生活までを見通して、時間を意識することや、人の話を最後まで聞いて自分の意見を言うなどの取組を行った。

- ③ お互いの「かかわり」や自分や友達の「よさへの気づき」を深める体験的な幼小交流活動を継続的に仕組み、そこで感じ取ったことを表現させていくことで、成長段階に応じた自立心やコミュニケーション力をはぐくむ。

2年間の交流活動

時 期	1年生と年長児	5年生と年長児
H20. 6	シャボン玉遊び	ランチマット作り
H20. 9	マラカス作り	絵手紙
H21. 1	昔の遊び	おもちゃつき・昔の遊び
H21. 2		お掃除体験・ドッジボール大会
H21. 3	学校探検	
H21. 6	シャボン玉遊び	ハメハメハの踊り
H21. 10	秋のたからもの	
H21. 11		クリスマスリース
H22. 1	昔からの遊び	凧作り・凧あげ
H22. 2	学校探検	お掃除体験・学校探検

また、実施に当たっては、幼小の教員が連携をして合同指導案（資料1）を作成し、交流活動を行った。

- ④ 「三原小ナビ」（資料2）を作成し、新入生や保護者へ配布することによって、学校理解を推進する。

パンフレットには、次のような内容を記載した。

- ・ 学校教育目標について
- ・ 日程、一日の様子や学習の様子
- ・ 入学までの準備について
- ・ 基本的な生活習慣について
- ・ 校内地図 等

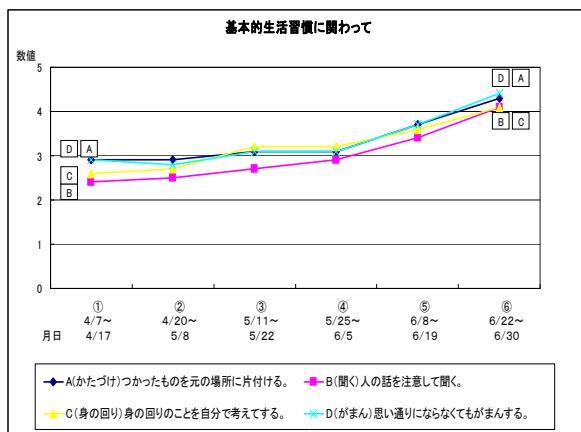
- ⑤ ねらいを明確にした生活科のカリキュラム（資料3）を作成することにより、新入生の小学校生活への移行を円滑に行う。

(3) 成果・今後の課題

- ① 平成20年度と平成21年度の2回の調査により、基本的な生活習慣の定着に向けては、「片付け」「人の話を注意して聞く」の2点の課題が明らかになった。

これらの課題の解決に向けて、幼小それぞれの教職員が、課題を共有して指導を行うことができた。また、年長児がどこまでできるのかを理解するとともに、幼小連携をしっかりとすることにより、児童の経験してきたことをふまえた取組が必要であることが分かった。

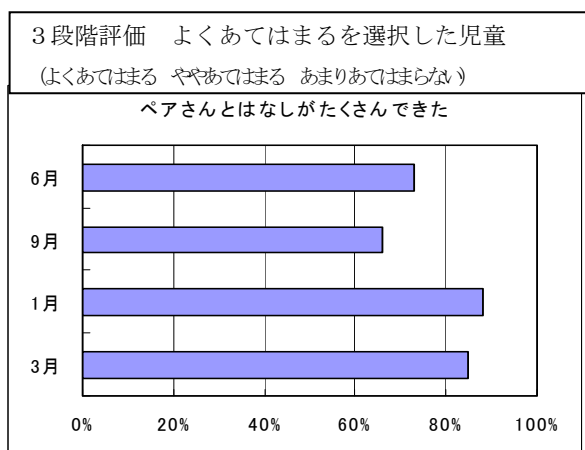
- ② 「幼小の円滑な接続のためのスタートカリキュラム」に、2つの重点課題に関わる指導内容を含めて指導に当たることによって、児童の基本的生活習慣の定着を図ることができた。



(H21年4月 スタートカリキュラム見取り結果)

- ③ 合同指導案を作成して交流活動を行うことで、幼小の活動内容や活動のねらいが明確になった。

また、園児と児童をペアにした交流活動を仕組むことで、発達段階に応じた自立心やコミュニケーション力をはぐくむことができた。



(H20年度 1年生 交流活動後

ふりかえりアンケート結果より)

- ④ 「三原小ナビ」により、入学前に保護者の不安感を和らげることができた。保護者アンケートでは、89%の方から、「役に立った。」と肯定的な評価をいただいた。また、「入学までの準備について、基本的なことですが、参考になりました。」「学校行事や、学習風景等が分かりやすく、写真を見て子どもたちの様子がよく分かりました。」などの意見が聞かれた。

しかし、まだ10%以上の保護者に肯定的な評価をいただいていないので、内容の改善が今後の課題である。

- ⑤ 生活科を中心としたカリキュラムを作成することで、幼稚園から小学校への円滑な接続を実現することができた。

平成20年度3月から平成21年度6月まで実践を

行った結果、一人の不登校傾向の児童を出すこともなく2学期を終えることができた。

また、幼稚園までの活動を意識して、幼稚園から小学校への接続期の支援・援助を行ったことと幼稚園の先生から学んだ子どもの見取り方やかわり方で、1年生入学児童へ接したことにより、指導の効果をあげることができた。

3 研究経過・成果の普及

(1) 研究会の実施

平成20・21年度国立教育政策研究所教育課程研究指定校として、研究集録を作成し、その発表として教育研究会を毎年1回行った。

(2) 保護者

保護者対象の入学説明会において、「三原小ナビ」を配布し、学校の理解を得た。

(3) 他園との交流

月見幼稚園他、周辺2園との交流を進め、交流を通して学んだ指導方法を役立てた。

4 今後の展望

- (1) 本校へは、今回連携した月見幼稚園だけでなく、周辺15の幼稚園・保育所から入学してくる。今回の研究の成果を基に、連携先を広げていくことが、幼小連携教育の充実につながるものと考えている。今後、比較的本校に近く入学者数も多い保育園との連携を図っていく。そのために、市教育委員会との連携を図りながら円滑な接続を目指していく。

- (2) 「三原小ナビ」については、本年度配布した保護者を対象にしたアンケート調査を行い、その結果から課題を明確にしてさらに改善を図っていく。

交流活動指導案

単元名 はじめましてよろしくね。一緒に踊ろう『ハメハメハ』

日時：平成 21 年 6 月 18 日（木）

学年・学級：第 5 学年 1 組 月見幼稚園 ほし組 年長児

時刻	幼稚園	活動の流れ	小学校	時刻
	■園児の活動 ○教師の援助とねらい		■児童の活動 ○教師の支援 ☆評価規準(方法)	
登園 ～9:00	■自由遊び			
9:10	■みどりの広場に集合する。 ○忘れ物がないようにチェックする。			
9:40	■園バスに乗りして、三原小学校に向かう。 ○交流活動が楽しく行えるように、約束を再確認する。 ■体育館に移動する。 ○大休憩中ではあるが、他の児童の迷惑にならないよう園児の行動に注意する。		■体育館に集合して、園児を迎える準備をして待つ。 ○園児との交流活動の内容を確認し、名札等の準備をさせ期待感を持たせる。 ■園児を迎え、初めましての会の隊形に並ぶ。 ■元気よく朝の挨拶をする。 ■園児とペアになって、手作りの名札を付けてあげて、自己紹介をする。 ■ペアになった園児と簡単なゲームを楽しむ。 ○緊張感をほぐし、お互いの触れ合いがスムーズにできるようにする。	
10:00	■朝の挨拶をする。[児童(5年1組)との初顔合わせ] ■児童とペアになって、手作りの名札を付けてもらい、互いに自己紹介をする。 ■ペアの児童と簡単なゲーム(担当:幼稚園教諭)を楽しむ。 ○緊張感をほぐし、お互いの触れ合いがスムーズにできるようにする。 ■交流活動の流れとめあてを聞く。 ○活動の流れとめあてを確認する。	1. あいさつをする。 ↓ 2. はじまりの会をする。 ↓ 3. 活動の流れとめあてを知る。	■交流活動の流れとめあてを発表する。 ○活動の流れについての補足とめあてを全体で確認する。 ■いっしょに【ハメハメハ大王】の歌を歌う。	10:00
10:15	■園児と児童と一緒に【ハメハメハ大王】の歌を歌う。[音源:CD(準備:三原小学校)] ■グループで練習するコーナーへ移動し、5年生と一緒に歌いながらダンスを教えよう。 ○楽しく活動できているか見守りながら、配慮が必要なグループやペアには先生と一緒に踊りを楽しむ。 ○コミュニケーションが難しいペアには共通の話題を投げかけたり、他のペアの活動を紹介したり、一緒に見たりして、リラックスして活動を楽しめるよう配慮する。 ■花の腕輪(5年生から貸してもらおう)をはめて、おさらいのダンスを楽しむ。[音源:CD]	4. 歌って踊って「ハメハメハ」を楽しむ。 ① グループ(音源:5年生の歌) ② 全体(音源:CD)	■グループで練習するコーナーへ移動し、歌いながらダンスを教える。 ○楽しく活動できているか見守りながら、活動させる。 ■花の腕輪をはめて、おさらいのダンスを楽しむ。 ☆自分から働きかけ、園児の気持ちを感じ取りながら楽しく交流しているか。(活動の様子)	10:15
	■ペアの児童と一緒に、「初めまして」の時の隊形に並ぶ。 ○児童に、ペアの園児を誘導して、初めの隊形に素早く並べるよう声かけをする。	5. 並び替えをする。 ↓	■ペアの園児といっしょに、「初めまして」の時の隊形に並ぶ。 ○ペアの園児に声かけをしながら素早く並ぶことができるよう声をかける。	
10:50	■活動の振り返りをする。 ○5年生と一緒に遊んだ(踊った)自分の思いを表現できるように援助する。 ○思いのある表情を見せるが、恥ずかしさから言い出せない子がいる時は、言い出せるよう援助して、「言えた」という満足感を味わえるようにする。	6. 活動の振り返りをする。 ↓	■振り返りをする。 ○初めての交流での感想を園児にも分かるような言葉ではっきりと伝えられるように声かけを行う。	10:50
11:00	■元気よく終わりの挨拶をする。 ○今日の楽しかった思いを伝え、次回の活動に期待が持てるようにする。 ■水分補給(水筒)をする。 ■園バスに乗りして、帰園する。	7. 終わりの会をする。	■元気よく終わりの挨拶をする。 ○次の交流への意欲を持たせるような肯定的な評価をする。	11:00
11:20	○園バスの中、あるいは保育室に帰って、みんなの前では話せなかった子どもの思いにしっかり耳を傾ける。			

☆学校生活を楽しく過ごすために☆

～入学までの準備について～

☆基本的な生活習慣を身につけましょう☆

基本的な生活習慣を身につけることは、入学後、学校生活をスムーズにスタートさせるための大切な土台となります。まずは、自分で自分のことができるようにしていきます。

- ① 早寝・早起き・朝ごはんの習慣をつけましょう。
- ② 服の脱ぎ着、洗顔、歯磨き、トイレの使い方(和式トイレ・トイレットペーパーの使い方)、ランドセルのかけおろし、ハンカチ、ティッシュペーパーの用意など日常の習慣が身につくようにしましょう。
- ③ 朝食は必ずとり、登校前になるべく大便をすませるようにしましょう。
- ④ 食べ物の好き嫌いをせず、時間内(給食時間は、20～30分ぐらいです。)に食べられる習慣をつけましょう。
- ⑤ 自分の持ち物の整理、整頓が自分でできるようにしましょう。
(机の中、ロッカー、靴揃え、かばんなど)

☆コミュニケーション力を育てていきましょう☆

コミュニケーション力を育てていくことは、入学後、学校生活を送る上でとても大切です。まずは、自分が困った時に自分から相手に思いを伝えることができるようにしましょう。

- ① 名前を呼ばれたら、はっきり「はい」と返事をしましょう。
- ② 場に応じたあいさつをしましょう。
○「おはようございます」「さようなら」
○「ありがとう」「ごめんなさい」 など。
- ③ 自分が伝えたいことをはっきり伝えるようにしましょう。
○ 気分が悪いとき、トイレに行きたいとき、困ったことがあったときなど。
- ④ 自分の名前(ひらがな)が読めたり、はっきりと言えたりできるようにしましょう。

☆その他 ～心がけていただきたいこと～☆

- ① 交通安全に気をつけて生活しましょう。(信号・横断歩道・右側通行)
- ② 通学路を保護者同伴で確かめ、自分の家と学校の間をひとりで往復できるようにしましょう。
- ③ 知らない人、不審な人について行かないようにしましょう。

☆生活Q&A☆

Q1 夜は何時に寝るとよい？

- A. 夜9時までに寝るとよいです。
早寝をすると、早起きができ、朝ごはんをしっかりと食べることができます。
早寝・早起き・朝ごはんを心がけましょう。

Q2 朝は何時に起きるとよい？

- A. 6時30分頃に起きるとよいです。
集団登校の集合時間が、7時30分前後となっています。登校時間の1時間ぐらい前に起床し、朝食をしっかりと食べ、排便を済ませ、登校しましょう。

Q3 何時間ぐらい寝るとよい？

- A. 1年生は最低9時間睡眠を取るようしましょう。低学年であれば、9～10時間は必要です。睡眠をきちんと取ると、次の日学校で元気に過ごすことができます。

Q4 テレビやゲームをする時間は？

- A. 長くても2時間までにしましょう。
子どもさんと、テレビを観る時間やゲームをする時間を決めて、その中で楽しむようにしましょう。

Q5 読書の量は？

- A. 1ヶ月に10冊程度読みましょう。
1年生の最初であれば、読み聞かせをしたり、一緒に話をしながら絵本を読んだりしましょう。

1年生の主な年間行事

1学期

- 4月
- ・入学式
 - ・参観日・学級懇談会
 - ・なかよし適足
 - ・交通安全教室
 - ・家庭訪問
 - ・健康診断
 - ・参観日・学級懇談会
 - ・運動会
- 5月
- ・参観日・学級懇談会
 - ・運動会
- 6月
- ・フェール開き
- 7月
- ・日曜参観日・PTA親睦大会
 - ・終業式
 - ・個人懇談会



2学期

- 9月
- ・始業式
 - ・教育研究会
- 10月
- ・動物愛護教室
 - ・社会見学
- 11月
- ・参観日・学級懇談会
 - ・音楽発表会
- 12月
- ・参観日・学級懇談会
 - ・終業式



3学期

- 1月
- ・始業式
 - ・教育研究会
- 2月
- ・参観日・学級懇談会
 - ・入学説明会
- 3月
- ・参観日・学級懇談会
 - ・6年生を送る会
 - ・卒業式
 - ・修了式



日程

【平成21年度】

日課表

朝会	8:15～8:35
学級朝会	8:35～8:45
1校時	8:45～9:30
休憩	9:30～9:35
2校時	9:35～10:20
大休憩	10:20～10:45
3校時	10:45～11:30
休憩	11:30～11:35
4校時	11:35～12:20
給食	12:20～13:00
昼休憩	13:00～13:25
清掃	13:25～13:45
5校時	13:45～14:30
帰りの会	14:35～14:50
桜山タイム(月・木・金)	14:50～15:20
最終下校	16:20 (水)15:00

火曜日の早朝活動・・・1週 お話朝会 2週 児童朝会
3・5週 ベア学年朝会 4週 美化活動
木曜日の早朝活動・・・音楽朝会 表現朝会

平成20・21年度教育課程研究指定校事業 研究成果報告書

ふりがな 学校名	かがわだいがくきょういっくがくぶ ふぞくよう ちえんたかまつ 香川大学 教育学部附属幼稚園 高松 えんしや 園舎
-------------	---

園長名：長谷川 順一

所在地：香川県高松市番町5丁目1-55

電話番号：087-861-2393

⑤	幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るための教育課程の在り方に関する調査研究 (平成20・21年度)
---	--

幼小共通の研究主題

幼稚園教育と小学校教育との接続に配慮した指導の内容や方法の工夫と改善

I 研究指定校の概要

1 学校・園・地域の特色及び実態

本附属学園は、香川大学教育学部附属幼稚園高松園舎と附属高松小学校が同一敷地内にある。そのため、交流活動を行うときも、教師間で事前の相談を行うときも、すぐに訪問することができ、幼小交流活動を行うにあたっては恵まれた環境にある。また、連絡進学のためほとんど全員が附属小学校に入学する。そのため、研究指定を受ける以前から幼稚園・小学校教員がお互いの授業・保育を年に数回参観し、合同研究協議会を開いて、幼小連携の在り方について継続して検討を行ってきた。

2 学校の概要

	4 歳 児	5 歳 児	混 合	計
学級数	1	1	0	2
園児数	34	33	0	67

教員数 5名

II 連携体制

1 連携校・園名

自校	香川大学教育学部附属幼稚園高松園舎
連携校	香川大学教育学部附属高松小学校

2 幼小連携教育研究協議会の構成員

所属・機関・職名等	
・香川大学教育学部 教授	2名
・香川大学教育学部 准教授	3名
・香川大学教育学部附属幼稚園高松園舎	5名
・香川大学教育学部附属高松小学校	8名
・香川大学教育学部大学院生	2名

III 研究の内容及び成果等

【2年間の研究成果の要点】

幼稚園と小学校が連携して研究を進めていく際、幼稚園側が中心となり行うことと、小学校側が中心となり行うこと、両者が協力して行うことの3つに分けられる。そこで、どちらが主で行うかということと、何に重点を置いて研究を進めていくかを明確にするために、研究の柱を次の4つにした。

- (1) 小学校って楽しいと思える『スタートカリキュラム』の実施
 - ①「コミュニケーションスペース」の設置
 - ②「スマイルタイム」の実施
- (2) 生活科を核にした『合科的・関連的な指導』の実施
- (3) 小学生へのあこがれを育て、1年間の成長を振り返る『わくわく交流活動』の実施
- (4) 段差を意識させる『アプローチカリキュラム』の実施

このような幼小連携の取り組みの成果は次のようになる。

【子ども側の成果】

○子どもたちが小学校の環境に慣れるのが早い。

○幼小交流活動で、かかわることの楽しさが実感できる。

○小学生との交流によりやさしくしてもらうことで、園生活の中で4歳児への思いやりの気持ちをもつようになる。

【教師側の成果】

○これまでの5歳児の後半時期の園生活で大切

月	10月	11月	12月
行事	・栗林公園へ行く	・幼小合同回めフェスタ	・落ち葉たき ・お楽しみ会 ・もちつき大会 (生活発表会)
共通の意	仲間と共通の目的を持って何日も続けて遊ぶようになる		
活動例	生活 < グループで当番活動をする > ○ 保育者の援助がなくても自分たちで当番の仕事をする < 時計を意識しながら生活する > ○ 片付けの時間を時計の模型で提示 < 自分の身の回りのことは自分でする > ○ 着替えを時間内にしたり脱いだ服をたたんだりする ○ 自分の引き出しの整理を自分から気付いている		
	遊び ○ クラスで集まってする活動を増やす (ゲーム・話し合い・輪唱・絵を描く 等) ○ クラスの仲間と協同して遊ぶ (おぼけやしきごっこ・遊園地ごっこ・共同製作・おでん作り 等) 秋の自然物で遊ぶ ○ 1年生と一緒に秋の自然物を探しに栗林公園に行く ○ 自然物を使って製作活動をする 風と遊ぶ ○ 1年生が作ったものを見ながら、おもちゃを作る ○ 園児と1年生が、作ったおもちゃを交換して遊ぶ		
活動例	秋の自然物で遊ぶ (2回)		風と遊ぶ
幼小交流活動	ねらい		ねらい
	1年生に親しみを持つ ○ 地域での就学時健康診断を終え、就学に対して気持ちが向き始める。この時期に、園外保育などを通して、開放感の中で1年生とペアで行動することで、1年生に親しみをもつようにする。名前の共通点などでペアを作り、できるだけ覚えやすいように配慮する。		1年生と一緒に遊ぶことを喜ぶ ○ 様々な活動を通して、1年生に憧れの気持ちを抱いたり、年長者としての振る舞い方に気付いたりして、1年生と一緒に遊ぶと楽しいと感じられるように活動の内容構成などを工夫していく。 ○ 1年生に対して、自分の気持ちを伝えていけるように、一人一人の様子に応じて援助していく。

③ 成果・今後の課題

これまで、意識していなかったことに対して、どの活動でどんな心情・意欲・態度を育てていくことが小学校での生活につながっていくのかを、今回あらためて意識して保育するようになった。

(2) 小学生へのあこがれを育て、1年間の成長を振り返る『わくわく交流活動』の実施

① 具体的な研究課題

幼稚園の5歳児と小学校1年生が交流する幼小交流活動は、1年生にとっては年下の子を導いたり、優しく接したりする経験を与えられ、また、1年前の自分を幼児に投影することで自身の成長を実感することができる。幼児にとっては、小学校へのあこがれの気持ちを抱いたり、児童の活動を手本として、自分の活動に生かしたりすることもできる。このように幼小交流活動は、単なる交流にとどまるのではなく、お互いにとって互恵性のある交流活動にしていかなければならない。

② 取組

交流活動は1回だけでなく、幼児と児童が繰り返し出会うことでお互いの関係が深くなり、より多く学ぶことができる。そこで交流活動を5回設定した。また、それぞれの交流活動は、活動場所(幼稚園・小学校)、活動の単位(個別・ペア・グループ)、支援の主体(幼稚園教員・小学校教員)、活動の選択(自由遊び・提示された課題)などに段階をつけ、幼稚園型の教育から徐々に小学校型の教育になるように計画した。

『わくわく交流活動Ⅳ』「どきどき・わくわくがっこうたんけん」では、幼児と児童が学校探検に出かけたことをもとに学校生活をすごろくに表す交流活動を行った。すごろくは児童や幼児の気持ちを投影するには適した題材である。楽しいことは「○つ進む」とするし、いやなことは「1回休み」や「○つ下がる」となる。

1月	2月	3月	月行事
・附属小学校入学検査	・幼小合同研究発表会 ・ダイコンの収穫・おでん作り	・附属小学校入学御礼会 ・お別れ会 ・修了式	
お互いを認め合い、集団の一員として役割を喜んで果たすようになる			共通の意
○ 4歳児の人に当番の仕事の仕方を伝える			活動例
○ 時計を見ながらお弁当を30分以内に食べる			
遊び 学校探検 1回目・何方所か決めてグループで校内を探検 2回目・もう一度行きたい場所をゆっくり探検 学校すごろく ○生活のルールや学習について1年生が書いたカードを使って一緒にすごろくを構成して楽しむ 1年生一日体験 ○学習や給食・休み時間・掃除の時間を実際に体験する			
学校探検 (2回) 学校すごろく (3回) 1年生一日体験			活動例
小学校に憧れや期待感をもつ			活動例
○ 附属小学校入学検査で実際にいろいろな場所に行くことをきっかけに、小学校の生活に憧れるようになる。学校探検を通して、学校の施設を実際に見たり使ったりして、小学校の生活にイメージをもてるようにしていく。 ○ 一日体験入学で、小学校の先生による授業を受けたり、1年生と給食を食べたり、他学年の小学生たちと掃除をしたりすることで、具体的に小学校生活を知り、これからの小学校生活への不安を取り除くようにする。			幼小交流活動

【アプローチカリキュラム】

児童と幼児が作成したすごろくを見ると「テストで百点，3つ進む」や「おにごっこでこけて保健室へ，1回休み」など学校生活の様子をうまく取り入れたすごろくができていた。このことは，幼児にとっては学校のことを知るよい機会となり，児童にとっては実際に自分が小学生になって経験したことを振り返ることができていた。

『わくわく交流活動Ⅴ』『1日小学校体験』では，小学校の生活を実際に見て体験することを通して不安は十分取り除けた様子だった。活動後の聞き取り調査でも「楽しかった」という感想が幼児全員から返ってきた。また，保護者へのアンケートでも，保護者自身が就学に対する心構えを持つ点でも有効であることがわかった。

③ 成果・今後の課題

○小学校に入るのが楽しみになる

交流活動を通じて，1年生と幼児が仲よくなる。幼児が1年生になったときに顔見知りの2年生がいることが，小学校に安心感をもち，早く適応ができた。

○学級とはちがう面を見ることが出来る

年上や年下の子とかかわることで，やんちゃな子が年下の子に優しくかかわったりおとなしい子が年上の子にどんどん話しかけて，いたり，普段の様子とちがう一面を見ることができた。

○今回は，1年生の1クラスと主に交流活動を行い，最後の“1日小学校体験”でのみ他クラスとかかわる交流形態だったが，今後は他クラスとも合計3回は交流できるように考えていきたい。

時期	交流実践Ⅰ	交流実践Ⅱ	交流実践Ⅲ	交流実践Ⅳ	交流実践Ⅴ
活動名	「あきをみつけよう」	「おちばのへんしん」	「ふゆとあそぼう」	「わくわく・どきどきがつこうたんけん」	「1日小学校体験」
活動内容	公園で拾った落ち葉やドングリで，オブジェやこまを作る。	落ち葉で絵を描いたり首飾りを作ったりする。	クリスマス会のための遊びや飾り付けと一緒に考える。	学校探検で感じたことをすごろくにして遊ぶ。	小学生の生活を半日園児が体験する。
活動場所	幼稚園の様々なところ	幼稚園の様々なところ	幼稚園の室内	幼稚園の室内	小学校の教室
活動の単位	個別	ペアでの共同制作	ペアでの共同制作	グループでの共同活動	
支援の主体	幼稚園	幼稚園	幼小両方で	幼小両方で	小学校
活動の選択	自由にいろいろなことから選択	落ち葉に限定した活動から選択	教師が遊びや飾りを提示する	教師がすごろくを提示する	

【交流活動のねらい】

3 研究経過・成果の普及

小学校と幼稚園は，毎年2月に合同で研究発表会を行っている。そこで，今回の研究成果を近隣の小学校や幼稚園へ発信していく。また幼稚園で2ヶ月に1度幼児教育関係者による勉強会を開催し，発信していきたい。

4 今後の展望

今後は，小学校に入学した児童の様子を観察したり，保護者に聞き取り調査を行ったりなどして，本研究で開発したカリキュラムの有効性や今後の課題を検討したい。また，その結果をもとにカリキュラムの改善に努めたい。

平成20・21年度教育課程研究指定校事業 研究成果報告書

ふりがな 学校名	かがわだいがくきょういくがくぶふぞくたかまつしょうがっこう 香川大学教育学部附属高松小学校
-------------	--

校長名：長谷川 順一

所在地：香川県高松市番町5丁目1-55

電話番号：087-861-7108

⑤	幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るための教育課程の在り方に関する調査研究 (平成20・21年度)
---	--

幼小共通の研究主題

幼稚園教育と小学校教育との接続に配慮した指導の内容や方法の工夫と改善

I 研究指定校の概要

1 学校・園・地域の特色及び実態

本附属学園は、香川大学教育学部附属幼稚園高松園舎と附属高松小学校が同一敷地内にある。そのため、交流活動を行うときも、教師間で事前の相談を行うときも、すぐに訪問することができ、幼小交流活動を行うにあたっては恵まれた環境にある。また、小学校に入学してくる児童の3分の1は、本園の出身である。そのため、研究指定を受ける以前から幼稚園・小学校教員がお互いの授業・保育を年に数回参観し合同研究協議会を開いて、幼小連携の在り方について継続して検討を行ってきた。

2 学校の概要

(小学校)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援 学級	計
学級数	4	3	3	3	3	3	0	19
児童数	118	117	120	119	113	117	0	704

教員数 33名

II 連携体制

1 連携校・園名

自校	香川大学教育学部附属高松小学校
連携校	香川大学教育学部附属幼稚園高松園舎

2 幼小連携教育研究協議会の構成員

所属・機関・職名等
・香川大学教育学部 教授 2名
・香川大学教育学部 准教授 3名
・香川大学教育学部附属幼稚園高松園舎 5名
・香川大学教育学部附属高松小学校 8名
・香川大学教育学部大学院生 2名

III 研究の内容及び成果等

【2年間の研究成果の要点】

幼稚園と小学校が連携して研究を進めていく際、幼稚園側が中心となり行うことと、小学校側が中心となり行うこと、両者が協力して行うことの3つに分けられる。そこで、どちらが主で行うかということと、何に重点を置いて研究を進めていくかを明確にするために、研究の柱を次の4つにした。

- (1) 小学校って楽しいと思える『スタートカリキュラム』の実施
- ① 「コミュニケーションスペース」の設置
 - ② 「スマイルタイム」の実施
- (2) 生活科を核にした『合科的・関連的な指導』の実施
- (3) 小学生へのあこがれを育て、1年間の成長を振り返る『わくわく交流活動』の実施
- (4) 段差を意識させる『アプローチカリキュラム』の実施

このような幼小連携の取組の成果は次のようになる。

【子ども側の成果】

○子どもたちが小学校の環境に慣れるのが早い。

○幼小交流活動で、かかわることの楽しさが実感できる。

○幼児との交流により、友達との交流とは違う面を發揮することができる。

【教師側の成果】

○早い段階から児童理解をすることができる。

○合科的・関連的に指導することにより、時間

にゆとりが生まれる。また、教科のねらいも達成しやすい。

1 研究主題と研究の主な取組

(1) 研究主題設定のねらい

幼児教育と小学校教育のカリキュラムを円滑に接続することは、小1プロブレムなどの問題とも関連して、今後の教育の大きな課題の一つである。本学園では以前から幼小交流活動の研究を行ってきたが、交流活動を行うだけでなく、カリキュラムという視点からも年間計画を見直す必要があると感じた。

そこで、幼稚園5歳児でのアプローチカリキュラムと小学校1年生でのスタートカリキュラムに重点を置き、その時期の指導の内容や方法の工夫と改善を行った。

また、幼稚園では遊びを通して総合的に学んでいるが、小学校に入りいきなり教科に細分化されるのは段差が大きい。そのため生活科を核にした合科的・関連的な指導についても、これまでのカリキュラムを見つめ直した。

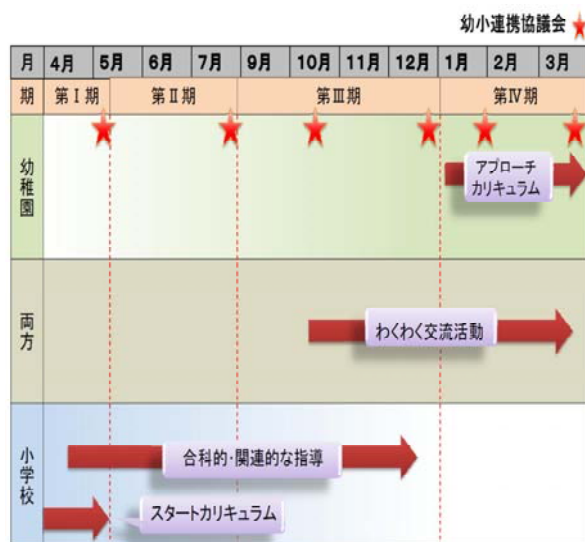
さらに、幼小交流活動では、単なる訪問活動を超えた互恵性のある交流活動をめざした。

(2) 2年間の主な取組

平成20年度	平成20年度は平成21年度からの具体的な実践に向けて案を作成した。これまでのカリキュラムを実践し、その中で来年度改善していくべき点は何かを幼小連携協議会で話し合った。また、アプローチカリキュラムについては、実践も行った。
平成21年度	年度当初から、スタートカリキュラム、合科的・関連的な指導、幼小交流活動、アプローチカリキュラムと実践を行い、その成果と課題を検証していった。 年度末には、児童や幼児、その保護者に対してアンケート調査を行い、本研究で開発したカリキュラムの有効性や今後の課題を検討した。

(3) 1年間の取組の時期

本研究では、先にあげた4つの柱を年間を通じて並行して行うのではなく、児童や幼児の気持ちを大切にしながら、小学校入学間もない時期には、小学校で「コミュニケーションスペース」や「スマイルタイム」の『スタートカリキュラム』を重点的に行い、小学校への入学の意識が高まってくる2月には幼稚園で『わくわく交流活動』を中心としたアプローチカリキュラムを行うというように、それぞれの実施時期をずらして重点的に研究を行った。それぞれの時期や重点を一覧にすると次のようになる。



【4つの柱を実施する時期】

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 小学校って楽しいと思える『スタートカリキュラム』の実施

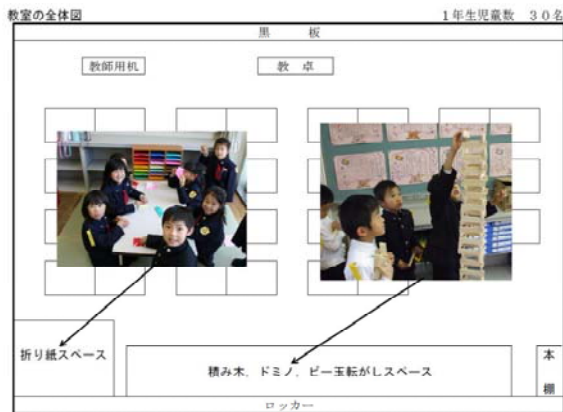
① 「コミュニケーションスペース」の設置 ア 具体的な研究課題

幼稚園から小学校に入学すると、幼稚園の保育室環境から小学校の教室環境へと変化する。幼稚園では決まった自分の席はなく、自由に遊べるスペースを確保していることが多い。一方、小学校の教室環境はというと、整然と机が並べられ、学習することに適した環境となっている。また、幼稚園では、身近なところに置かれていた積み木やドミノなどの

玩具も、小学校にはない場合がほとんどである。このように小学校と幼稚園では、環境面に大きな違いがある。

イ 取組

そこで、幼稚園で遊んでいた玩具を小学校の1年生の各教室に置き、そのスペースを『コミュニケーションスペース』と呼ぶことにした。設置した玩具は、ドミノ、積み木、ビー玉転がし、折り紙である。折り紙スペースには2畳ほどの畳を敷いて児童が集まりやすいようにした。この玩具の選定には幼稚園の教師の意見を取り入れている。



【コミュニケーションスペース】

ウ 成果・今後の課題

○早い段階での児童理解ができる

このような玩具での遊びによって、児童の発想力や巧緻性、忍耐力などをみることができる。また、遊ぶときのかかわり方をみることによって一人になりやすい児童も、すぐに見付けることができ、支援に生かした。

●教室の後ろでは手狭である

課題としては、コミュニケーションスペースを教室の後ろに設置する場合、30人の学級であっても手狭で、十分な広さを確保できなかった。

② 「スマイルタイム」の実施

ア 具体的な研究課題

入学直後の数週間は、教師も児童もたいへ

ん忙しい。教師は、ロッカーの片付け方から、机の中の用具のしまい方、靴箱の位置、トイレの使い方、下校の仕方…というように、学校生活を送るために必要なことを一つ一つ教えていかなければならない。児童にとっては、今までやったことがないようなことも多く、戸惑いが多々ある。

このような生活が1週間近く続く。教師は、ばたばたとした生活を送りゆとりがなく、児童は、ずっと何かをしているために休み時間に遊ぶ時間もあまりない。これでは最初のわくわくした児童の気持ちも、だんだん下降してきて、友達関係も広がらないのは当然である。そこで、教室に設置したコミュニケーションスペースを利用して、入学直後は幼稚園のカリキュラムと重なる「のりしろ」にあたる部分をつくった。

ねらいは、入学した児童が小学校の教室環境に早く慣れること、新しい友達関係をつくれるようにすることである。

イ 取組

テーブルから教室へ、そして運動場へ

新年度第2～4週に設けたスマイルタイムでは、その活動を、まずコミュニケーションスペースに置かれたテーブルの上で遊べる折り紙から始めた。折り紙にだんだん慣れてくると、次はドミノや積み木などを教室に置き、活動が教室に広がるようにした。ここまでは教室の仲間と遊んでいる。そのあと、運動場に活動を広げ、他のクラスの子も入り交じって遊ぶことができるようにした。こうすることで、だんだんと友達の輪が広がっていくことをねらった。

登校した子からスマイルタイムを行う

スマイルタイムは、開始の時間を決めなかった。児童が登校してきて、身のまわりの片付けが終了したら、すぐスマイルタイムになる。児童はこのことで、自然と片付けを早くしようとするし、何よりスマイルタイムを楽

しみに登校するようになる。楽しいことから学校生活が始まるのは、入学間もない児童にとって大切なことである。朝の会は、スマイルタイムが終わってから行うようにした。たっぷり遊んだあとから、朝の会、授業とつなげていく。朝の会を挟むことで、遊びと学習の切りかえもしやすくなった。

時間を3段階で構成する

スマイルタイムの時間は最初60分(4回)次に45分(3回)、最終段的には30分(2回)とだんだん短くなるように構成した。こうすることで、スマイルタイムから学びへとスムーズに移行していくことを考えた。

このような工夫を盛り込み実際に本年度行ったのが次のカリキュラムである。

		□通常授業				■スマイルタイム			
週	月	日	曜	8:15 朝の活動	8:35 1校時	9:20 2校時	9:30 10:15	10:15 休み	10:30 3校時
第1週 (時間の区切りなし)	4	8	水	朝の会	入学式				
	9	木	朝の会	教室・学校の使い方(トイレ・靴箱・ロッカーなど)					
	10	金	朝の会	出席番号の並び方、片付けの仕方	授業(国語)				
第2週	13	月	全校朝会	わんぱくグループ顔合わせ	朝の会、掃りの会の仕方	給食の仕方	掃除の仕方		
	14	火	朝の会	授業(すきなものの絵)	授業(参観の発表練習)			授業(国語)	授業(国語)
	15	水	朝の会	授業参観(自己紹介)		粘土遊び・塗り絵			
	16	木	朝の会	スマイル60分 中遊び	朝の会	身体測定	授業(国語)		
第3週	17	金	朝の会	スマイル60分 中遊び	朝の会	視力・聴力検査	授業		
	20	月	全校朝会	スマイル 中遊び	朝の会	授業(道徳)	授業(体育)		
	21	火	朝の会	スマイル60分 中遊び	朝の会	授業(国語)	授業(学活)		
	22	水	朝の会	スマイル60分 中遊び	朝の会	授業(国語)	授業(国語)		
	23	木	朝の会	スマイル45分 中遊び	朝の会	授業(図工)	授業(図工)	授業(算数)	
第4週	24	金	朝の会	スマイル45分 中遊び	朝の会	授業(算数)	授業(体育)	授業(生活)	
	27	月	朝の会	スマイル45分 外遊び	朝の会	授業(図工)	授業(国語)	授業(体育)	
	28	火	朝の会	スマイル30分 中+外遊び	朝の会	授業(国語)	授業(音楽)	授業(算数)	
	29	水							
5	30	木	朝の会	スマイル30分 中+外遊び	朝の会	授業(国語)	授業(運動会練習)	授業(国語)	
	4	金							

【年度当初のカリキュラム】

ウ 成果・今後の課題

○児童の友達関係が自然に広がる

ドミノや積み木、ビー玉転がしなどは、空間認識の力を高めたり思考力を養ったりという算数科や図画工作科の学習の素地としての効果に加えて、仲間づくりにおいても大きな効果がある。入学して間もない児童は、最初一人で遊んでいる。ところが積み木をしていると、数が足らなくなり隣の子の積み木を借りなければならぬ場面が出てくる。また、もっと大きな物を作りたいという気持ちが出

ると、友達の作品とつなぎ合わせようとする。

このような面だけでなく「〇〇さんがぼくの積み木をこわした」とか「〇〇さんが積み木を貸してくれない」というトラブルも起こる。トラブルを含め、積み木を媒介にして、友達とのかかわりが生まれてくる。「一緒に遊びなさい」とこちらが声をかけるより、環境を整えることで自然にかかわりが広がるようにしているところは、幼稚園教育に学ぶところであろう。

●スマイルタイムの位置付け

今回のスマイルタイムは授業時数には入れていない。1年生は年間34週計算のため、時数に入れなくても実現可能である。今後、カリキュラムに何の時間として位置付けるかに課題が残った。

(2) 生活科を核にした『合科的・関連的な指導』の実施

①具体的な研究課題

幼稚園と、小学校では教える内容も指導方法もずいぶん異なっている。幼稚園では子どもの興味・関心に沿って意図的に用意された環境の中で、直接的かつ具体的な体験を通して学ぶ。幼稚園の学びは、5つの領域を総合的に育成しようとしており、学問の分化した体系よりも子どもの主体性を重んじ、未分化な学びが行われている。

一方、小学校では教科、道徳、特別活動などの領域を設けて、学問・科学・芸術などに立脚する分化した学びを行っている。そのため、授業を実施する前に年間計画をもとに単元計画と授業計画が作られる。授業では、1時間の目標が設定されており、全員がその到達点に達するように支援をしていく。小学校での指導は、1時間ごとの指導の目標を明確にし、一段ずつ階段を上り最終的なゴールをめざすというイメージである。幼稚園の子どもを「見守り育てる」という姿勢に対して、小学校で

は「教える」という側面は強い。このような教える内容や指導方法の違いにより「段差」が生じている。

その段差を埋めるものとして、生活科を中心にした『合科的・関連的』な指導を行った。合科的・関連的な指導を行うことによって、ゆったりとした時間の中で、それぞれの子どもの関心に応じた学習活動を展開することができる。また、低学年の子どもは、分化した学びよりも一体的に学ぶ未分化な学び方をするという特性も持っている。したがって、合科的・関連的な指導は幼稚園と小学校の段差を解消する手だての一つとして有効である。

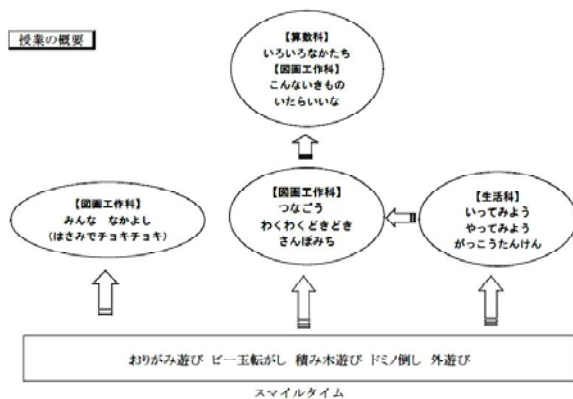
② 取組

スマイルタイムの活動を教科に生かす

「つなごう わくわくどきどきさんぽみち」

年度の第2週～第5週の7時間程度のスマイルタイムでは、児童の活動の様子から、幼稚園教育で総合的にはぐくまれた力を見極め、小学校教育での教科のねらいに沿った学習に生かせるようカリキュラムの見直しを図った。

スマイルタイムに見られる児童の活動特性のうち、表現・言語・人間関係に視点を当て以下の図のように図画工作科を中心とした教科への分化を図った。

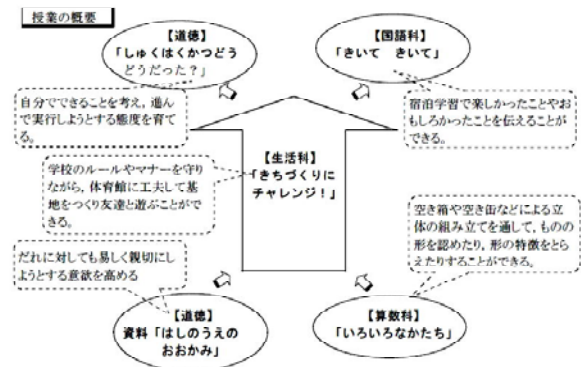


生活科を核にした関連的な指導

「きちづくりに チャレンジ！」

本校では7月に1泊2日の宿泊活動を行っている。この活動の中心は、ダンボールの基

地づくりである。子どもたちは家から持ってきたダンボールなどを使って、体育館にグループで協力して基地をつくる。ただ作るだけでなく、その夜はこの基地に宿泊する。この活動の主としたねらいは、生活科の内容だが、ここに道徳、算数科、国語科などの他教科も関連させて指導を行った。



③ 成果・今後の課題

合科的・関連的な指導を行うことの成果は次の3つである。まず1つは、生活科を核にし、体験を通すことで、学習に目的意識が生まれたり、教科で学習した内容の有用性を感じたりすることができることである。

2つ目は、合科的・関連的な指導を行うことにより、それぞれの教科のねらいもより達成しやすくなることである。

3つ目は、時間を十分に確保できることである。生活科と他教科を関連させることで、ゆとりある時間の中でたっぷりと対象にかかわることができる。

(3) 小学生へのあこがれを育て、1年間の成長を振り返る『わくわく交流活動』の実施

① 具体的な研究課題

幼稚園の5歳児と小学校1年生が交流する幼小交流活動は、1年生にとっては年下の子を導いたり、優しく接したりする経験を与えられ、また、1年前の自分を幼児に投影することで自身の成長を実感することができる。幼児にとっては、小学校へのあこがれの気持ちを抱いたり、児童の活動を手本として、自

分の活動に生かしたりすることもできる。このように幼小交流活動は、単なる交流にとどまるのではなく、お互いにとって互恵性のある交流活動にしていかなければならない。

② 取組

『わくわく交流活動Ⅳ』『どきどき・わくわくがっこうたんけん』の授業では、幼児と児童が学校探検に出かけたことをもとに学校生活をすごろくに表す交流活動を行った。すごろくは児童や幼児の気持ちを投影するのに適した題材である。楽しいことは「〇つ進む」とするし、いやなことは「1回休み」や「〇つ下がる」となる。児童と幼児が作成したすごろくを見ると「テストで百点、3つ進む」や「おにごっこでこけて保健室へ、1回休み」など学校生活の様子をうまく取り入れたすごろくができていた。このことは、幼児にとっては学校のことを知るよい機会となり、児童にとっては実際に自分が小学生になって経験したことを振り返る機会となっていた。

交流活動は1回だけでなく、幼児と児童が繰り返し出会うことでお互いの関係が深くなり、より多く学ぶことができる。そこで交流活動は5回設定した。それぞれの交流活動は、活動場所（幼稚園・小学校）、活動の単位（個別・ペア・グループ）、支援の主体（幼稚園教員・小学校教員）、活動の選択（自由遊び・提示された課題）などに段階をつけ、幼稚園型の教育から徐々に小学校型の教育になるように計画した。

③ 成果・今後の課題

○小学校に入るのが楽しみになる

交流活動を通じて、1年生と幼児が仲よくなる。幼児が1年生になったときに顔見知りの2年生がいることで、小学校に安心感をもって、早く適応できるようになった。

○学級とはちがう面を見ることができ

年上や年下の子とかかわることで、やんちゃな子が年下の子に優しくかかわったり、お

となしい子が年上の子にどんどん話しかけていたり、ふだんの様子とはちがう一面を見ることができた。

時期	交流実践Ⅰ	交流実践Ⅱ	交流実践Ⅲ	交流実践Ⅳ	交流実践Ⅴ
活動名	「あきをみつけよう」	「おちぼのへんしん」	「ふゆとあそぼう」	「わくわく・どきどきがっこうたんけん」	「1日小学校体験」
活動内容	公園で拾った落ち葉やドングリで、オブジェやこまを作る。	落ち葉で絵を描いたり首飾りを作ったりする。	クリスマス会のための遊びや飾り付けを一緒に考える。	学校探検で感じたことをすごろくにして遊ぶ。	小学生の生活を半日園児が体験する。
活動場所	幼稚園の様々なところ	幼稚園の様々なところ	幼稚園の室内	幼稚園の室内	小学校の教室
活動の単位	個別	ペアでの共同制作	ペアでの共同制作	グループでの共同活動	
支援の主体	幼稚園	幼稚園	幼小両方で	幼小両方で	小学校
活動の選択	自由にいるいろいろなことから選択	落ち葉に限定した活動から選択	教師が遊びや飾りを提示する	教師がすごろくを提示する	

【幼小交流活動のねらい】

(4) 段差を意識させる『アプローチカリキュラム』の実施

※この実践については、香川大学教育学部附属幼稚園高松園舎のページを見ていただきたい。

3 研究経過・成果の普及

小学校と幼稚園は、毎年2月に合同で研究発表会を行っている。そこで、今回の研究成果を近隣の小学校や幼稚園へ発信していくと同時に、研究に対する意見をもらい、今後の研究に生かしたい。

4 今後の展望

これまでの反省点をふまえ、現在も少しずつ実践を積み重ねているところである。今後は、アプローチカリキュラムを経て小学校に入学した児童の様子を観察したり、幼児や児童、その保護者に聞き取り調査を行ったりなどして、本研究で開発したカリキュラムの有効性や今後の課題を検討したい。また、その結果をもとにカリキュラムの改善に努めたい。

平成20・21年度教育課程研究指定校事業 研究成果報告書

ふりがな 学校名	こうなんしりつのいちようちえん 香南市立野市幼稚園
-------------	------------------------------

園長名：公文 千恵子

所在地：高知県香南市野市町西野630

電話番号：0887-56-1953

⑤	幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るための教育課程の在り方に関する調査研究（平成20・21年度）
---	---

幼小共通の研究主題

幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るための教育課程の在り方に関する研究

- 幼児・児童理解に立った効果的な援助の在り方
- 発達の連続性を確保するための指導内容や方法の工夫・改善

I 研究指定校の概要

1 学校・園・地域の特色及び実態

香南市は高知市のベッドタウンとして急速に宅地化が進み、従来の田園風景と新興の住宅地や商業地が混在するようになった。他地域からの転居により人口は増加しており、本園は県下の国公立幼稚園の中では2番目の規模の幼稚園である。

園児は明るく元気いっぱい友達とのかかわりを楽しみながら園生活を送っている。しかし、本地域では、他と同様に核家族・少子化も進み、保護者の生活様式や価値観の多様性も見られ、子どもだけでなく保護者も人とのかかわりが少なくなっている現状がある。

また、野市中学校区では、長年にわたり中学校区研修会を通して保幼小中の連携の充実に取り組んできた。平成20・21年度は、この研究推進体制を生かして教育課程全体を見直す方向で、幼稚園教育と小学校教育の一層の円滑な接続を構築したい。野市小学校は、立地的にも野市幼稚園の北側にあり、いつでも行き来できる連携のとりやすい環境にある。

2 学校の概要

(幼稚園)

	3歳児	4歳児	5歳児	混合	合計
学級数	2	2	2		6
園児数	男	19	20	19	58
	女	21	18	19	58
計	40	38	38		116

教員数 15名

II 連携体制

1 連携校・園名

自校	香南市立野市幼稚園
連携校	香南市立野市小学校

2 幼小連携教育研究協議会の構成員

所属・機関・職名等
・香南市立野市小学校・校長、PTA会長
・香南市立野市幼稚園・園長、PTA会長
・香南市立野市保育所・所長、PTA会長
・高知県教育委員会小中学校課・指導主事
・高知県教育委員会幼保支援課・指導主事
・高知県教育センター教職研修部・チーフ
・香南市立教育委員会学校教育課・指導主監
・香南市立教育委員会こども課・幼稚園係長

III 研究の内容及び成果等

【2年間の研究成果の要点】

1 幼児一人一人の特性に応じ発達の課題に即した指導を行うための保育の実践と、発達や学びの連続性を踏まえたカリキュラムの作成

幼稚園教育内容の「心情・意欲・態度」を培い、幼児期にふさわしい生活を充実させることが、小学校への学びの連続を支えるものであるという全教職員の共通理解の下に日頃の保育を見直すことができた。

特に、年長児の充実期（11月～3月）に育つ自律と協同性を育てる保育やカリキュラムの見直しに重点を置き、小学校への円滑な接続を意識したカリキュラムを作成できた。

2 教職員の交流の活性化

幼稚園・小学校双方の教職員が、互いに教育内容や指導方法の違いを十分に理解しようとしたり、互いの教育に関心を寄せながら気軽に子どもの指導の在り方について話し合ったりすることのできるような信頼関係がつけられてきた。

幼児と児童の交流活動においては、日頃から情報交換をして十分に幼児理解や児童理解を深められるようにした。また、事前に活動のねらいや指導内容や育てる方向などについて意見交換し、共通理解を図って指導・援助することによって効果的な実践にすることができた。

特に、教職員同士が互いを知り合うことを大切にし、子どもの発達の段階に応じて幼稚園・小学校の果たす役割を意識して、カリキュラムに合わせ共通の視点を決めて話し合いの場をもつこと、年間計画を立てて継続的な教職員の研修の場をもつことが円滑な接続に有効であった。

3 互恵性のある交流活動の実践

幼児は児童との交流を通して楽しさや安心感が得られ、児童への親しみを感じ、人のかかわりを広げていく。そのため、幼児が「お客さん」にならず、互恵性のある交流になるようねらい・内容について十分に検討を重ねることにした。また、幼稚園教職員が今まで行ってきた交流活動の反省や小学校教職員との意見交換会、合同の研修等で得たことをもとに幼児・児童にとって意味のある活動になるよう取り組むことで効果を上げた。

4 連携推進体制の継続

幼児にとって解消したいギャップは緩和し、必要不可欠なギャップには敢えて挑戦させるなどして、就学に対しての喜びや期待感がもてるようにするための継続した指導体制の維持に努めた。

1 研究主題と研究の主な取組

(1) 研究主題設定のねらい

「幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うためには、どのような環境の構成や教師のかかわりが必要か」を研究主題とし、人との出会い、環境に対して主体的にかかわろうとする幼児の育成を目指して保育に取り組み、幼児期にふさわしい生活を通して、小学校教育への円滑な接続と連携を考える。

(2) 年間の主な取組

平成20年度	(1) 幼小連携研究への取組 ① 幼稚園教育要領、小学校学習指導要領、研究への取組の共通理解をすすめる。 (2) 教職員研修 ① 保育・授業研究、実践交流、講話、視察研修（幼小合同） ② 保育・授業研究での幼児理解 幼児期にふさわしい幼児理解と児童理解と援助の工夫 ③ 特別支援を重視した幼児の育ちをつなげる幼児理解と援助の在り方の研究 (3) 交流活動 ① 日常的な交流 保育、行事、日常生活での幼児・児童の交流、相互の施設の活用 ② 第1学年と第5学年・保育所年長児との交流活動 ③ 入学前の取組 新1年生の学級編制を幼稚園・小学校が発達の姿をおさえて行う。 特別な支援を要する新1年生について入学式までに連絡会をもち、新担任と幼児・保護者と共に面談をして戸惑いなく育ちをつなげるように配慮する。 (4) 平成20年度の成果と課題の検討 平成21年度に向けての課題の洗い直
--------	---

	しと目標研究内容の決定
平成21年度	<p>(1) 幼稚園教育内容の充実 園の指導計画の見直し</p> <p>(2) 教職員研修と交流 小学校と幼稚園の児童・幼児の発達 の姿や生活の様子等の連絡会や合同の 研修会や公開交流保育・授業の開催</p> <p>(3) 交流活動の取組</p> <p>① 第1学年と幼稚園年長児の交流活 動を行い、互いに生活の中から共通 の活動を取り上げ、就学への期待と 自分の近い将来を見通すことにつな がった。</p> <p>② 第5学年と幼稚園年長児の交流活 動について、場の過ごし方や小学生 に対する信頼感を高め、小学校生活 への安心感をもたせることができた。</p> <p>③ 相互の施設の活用を通じて自由な 行き来ができるようにして交流を活 性化することができた。</p> <p>(4) 保護者への支援 就学に向けての内容を年長児保護者 へ年度初め、年度末にアンケート調査 や説明を行い、保護者の安心を得た。</p>

2 研究内容及び具体的な研究活動

- (1) 円滑な接続をするために、幼児が小学校生活に親しみ期待を寄せるようになるには、日常的な交流をどう実施すればよいか。

『1年生と野菜の栽培を通して』

① 取組

来年度に新2年生と新1年生になるまで交流が続けられることを想定して、日常的に交流活動として取り組んだ。

12月10日

「自分の思いを伝えたり相手の思いを聞いたりしながら苗植えを楽しむ」というねらいで保・幼・小の幼児・児童が事前に組んでいたバディ（3～4名）で育てたい野

菜を選び、プランターに植えた。プランターは、名札に幼児・児童の名前と野菜の名前を書き、幼稚園と小学校の敷地の間に置いていつでも世話をすることができるようにした。児童とは週1回は休み時間を利用して世話を決め、自由に世話をすることができるようにした。



「つるがのびてきたよ」

3月の卒園の前の野菜の収穫時期には、「1年生の教室に誘いの声をかけに行きたい」という声があり、幼児10人ほどで出かけた。職員室に行き一人の幼児が何も言えずうつむいていたら、教師から「小学校の職員室では1年生になったら～(省略)～」と挨拶をすることや相手の目を見て話すことなどを教えてもらった。

この経験を生かし、その後1年生の教室に行き「失礼します」と挨拶をして、野菜の収穫をしようと誘いかけた。後日一緒に収穫し、小学校の調理室で収穫した野菜を湯がいて味わった。



「大きなブロッコリーがとれたよ」



「やさいはおいしいね」

② 成果・今後の課題

ア 交流活動の内容を「野菜植え」にしたことで幼児・児童が互いに野菜の生長をみることができた。幼児は水やりを自分ができるという強い思いをもてるようになり、土が湿っているのを見て、「1年生が来てくれたんだ」と喜ぶ姿が見られ、一緒に野菜を大事に育てることの喜びを感じることができた。

イ 「交流」というと必ず相手がいることを想定するが、この実践により幼児がバディを組んでいる児童と常に顔を合わせた交流だけでなく、物を介して互いの気持ちを感じることができる交流の大事さもあることが分かった。

ウ 野菜を育てるという一つの目的をもちバディを組んで交流をしたことにより、「自分のお兄ちゃん、お姉ちゃん」を強く意識し、1年生に深い親しみをもつことができた。初めは、手紙を介しての交流であったが、野菜の生長を目の当たりにし、自分たちで野菜の生長を直接知らせたいという思いになっていった。また、よい職員関係ができていたことから、幼児の思いをすぐに伝えに行くことができたことは大変よかった。このことから単発ではなく継続した交流のよさを実感することができた。

エ 職員で事前・事後の話し合いを行ってきたが交流活動の内容や方法が主と

なり、その時の幼児・児童の姿からどのような育ちがあったのかなどについての話し合いや今後の交流をどのように発展させていくかなどについての話し合いが深められなかった。その後、このようなことについても、気軽に話し合えるようになるとともに、共通のねらいを見定め、これを全教職員が念頭において幼児・児童の姿を通して、幼児・児童理解を深め、それを指導に役立てることができるようになった。

オ 交流を続けたことで、幼小の担任同士だけでなく小学校の他の教職員にも幼児の姿を見てもらったり知ってもらったりする機会になった。小学校での決まりを教えてもらったことや小学校の施設に慣れていくことで、幼児が1年生になった時に安心感をもって学校生活に臨むことができ、円滑な接続が図られるようになった。

(2) 高学年児童や幼児の自発的な活動による交流活動を通し、学校生活に慣れ、希望をもって学習や生活に取り組めるようにするためにはどうしたらよいか。

『5年生と一緒に学校探検』

① 取組

一過性にするのではなく、来年度に幼児が新1年生になり、5年生が最高学年の6年生になっても引き続き交流できるようにしていくことを前提に、この「学校探検」を通しての交流活動に取り組んだ。

10月18日

学校探検の事前の話し合いで小学校から提示された指導案には、名札作りやスタンプラリーをするという教師提案による交流活動が計画されていた。このことについて、幼児の実態から内容を一方的に規定して行うのではなく、また互いに無理なく活動に取り組めるようにするため準備にも時間を

かけ過ぎないようにすることを伝えた。

次の日の話合いの場では、再度「年長児は5年生といるだけで嬉しい、楽しいと思っている。」ことを伝え、直接授業の中で5年生にも伝えてもらった。その際、小学校の教員から「遊ぶ準備を整えることだけが交流活動ではない、ということがよく分かった。」と聞き、幼稚園側として伝えなかった「子どもたちの思いを大切にしたい」ということがうまく伝わっていないことに気付いた。

そこで、年長児が、「5年生と一緒に探検に行く前に自由に小学校の中を見てみたい」と言っていることを伝えた。小学校の教員からは、「そうであればいつでも来てもらい、その経験を経ての幼児の興味や関心を大切にしたい学校探検の計画を5年生ができるようにしたい」との返事をもらい、改めて教職員が真に理解し合うための深い話合いの大切さを感じた。

10月20日

このことにより、幼児は、自由に小学校の校舎内を行き来することができた。その際、年長児も参加した小学校の運動会の写真を見せてもらったり、1年生の机を見たり椅子に座らせてもらったりして帰ってきた。

その後、幼稚園では、小学校に行ってきたことについて教師と幼児とのやりとりや友達と感想を言い合う中で、「行ってみて気づいたこと」や「聞いてみたいこと」、「もっと行ってみたい所」などが出され、それらをまとめておく活動を行った。

また、このことを踏まえ、幼児は、学校を自由に回って楽しただけでなく、様々な思いや願いをもったことを小学校に伝えたところ、5年生は、これらの幼児の願いや思いを受け止めて、活動計画を作成して

くれた。例えば、初めのクイズやスタンプラリーをする計画は「年長児の行きたいところや5年生が案内したいところに行く学校探検」に変更された。

11月13日

幼児は「校舎を全部回りたい」、「兄弟のいる教室に行ってみよう」、「校長室がどんなところか見てみたい」、「階段に張ってある数字のことを5年生に聞いてみたい」など、それぞれの思いや願いを持って探検に参加した。

また、5年生と幼児がバディーを組んで探検したことにより、5年生が年長児に対して行きたい所を尋ね、約束や決まりを教える姿も見られた。また、幼児がバディーの相手の名前を呼んで、手を引っ張って自分の思いを主張する年長児の姿もみられた。



「音楽室に行ってきました」



「実験を見せてもらったよ」

学校探検の後に体育館に集まり、それぞれ感想を発表し合った際、いつもは自分の思いを言えない幼児が手を挙げて発表したり、日頃自分の思いを表現したがる幼児がバディーの5年生に会ったことが嬉しくて、

黙って手をつないで座ったままの姿が印象的であった。一人一人の幼児が信頼できる5年生との関係をつくれたことが伝わってきた。

翌日には保護者から大きな反響があった。例えば、「楽しかったみたいです。このごろ早く1年生になりたいと言っています。」「〇〇君ってどんな5年生やろう？大好きみたいで、なんか照れてます。」という声が聞かれた。我が子を通じて親自身も小学校を身近に感じ、我が子が小学校に入学する不安もやわらいだ様子がうかがえた。

② 成果・今後の課題

ア バディの相手の5年生と小学校を自由に行き来し、小学校には自分がよく知っているお兄さんお姉さんが待っていてくれるという思いがもてたことや学校を自分なりに知っているという安心感がもてたことは、幼・小のギャップを小さくし、小学校の学習や生活への興味・関心を広げ、入学することへの不安解消につながった。

イ 5年生との交流活動そのものが年長児だけでなく、保護者にとっても、やがて高学年になっていく我が子への見通しをもつことができた。

ウ 5年生と年長児が「世話をしたり・世話をされたりする関係」の中で、学校生活を楽しめるという幼児の期待感が高まった。

エ 互いの教育の違いを理解したうえで一貫性のある教育の方向に向かっていくため、同じ視点での学びの見とりを確認したり、継続した連携がとれるようなカリキュラム作成をすることができた。今後は、年長児の充実期が小学校への育ちにつながっていく高学年との交流のためのカリキュラムに改善していくために実施

・検証・改善を繰り返し、見直していく必要がある。



「職員研修」

3 研究経過・成果の普及

高知県教育センターが主催する「平成21年度保・幼・小連携教育講座」を通して研究成果の普及を図った。

講座Ⅰの8月24日には、交流活動から「日常的な交流の在り方と年間計画について」や「幼小の育ちをつなぐカリキュラム作成について」などの研究を発表した。

講座Ⅱの11月13日には、「年長児と5年生との公開交流授業」を実施し、「幼児の学びが小学校へつながる」ことや「教職員の相互理解」についてなどの研究発表を行った。

また、野市中学校区の研修会（保・幼・小・中連携教育）で研究の発表を行い、実践を広め地域への発信を行う。

4 今後の展望

- (1) 継続した連携教育を保障し実施していくために「小学校への接続期を意識したカリキュラム」を今後に生かしていく。
- (2) 幼・小の教職員が相互理解し合い、交流を進めていく。
- (3) 幼児期にふさわしい生活、主体的にかかわろうとする幼児の育成を常に見直し、目標の改善、新たな課題を設定して取り組む。
- (4) 連携を図っていくために、関係部局が「連携教育研究協議会」などの体制づくりを推進して実施するよう働きかける。

平成20・21年度教育課程研究指定校事業 研究成果報告書

ふりがな 学校名	こうなんしりつのいちしょうがっこう 香南市立野市小学校
-------------	--------------------------------

校長名：田中 紀子

所在地：高知県香南市野市町西野618

電話番号：0887-56-0316

⑤	幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るための教育課程の在り方に関する調査研究 (平成20・21年度)
---	--

幼小共通の研究主題

幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るための教育課程の在り方に関する研究

- 幼児・児童理解に立った効果的な援助・支援の在り方
- 発達の連続性を確保するための指導内容や方法の工夫・改善

I 研究指定校の概要

1 学校・園・地域の特色及び実態

本校は高知県の東部地域で最大規模校であり、市街地に立地している。新興住宅地の増加が目覚ましい近年では地域のコミュニティの形成が難しく、児童も異年齢の児童と遊んだり集団で活動したりする機会は少なく、交流関係は限定されている傾向が強い。

本校では「学校エコ改修と環境教育事業(平成17-19年度環境省モデル校指定)」を受け、児童の主体的な学びや地域とのかかわりに重点をおいた取組を進め、児童の発想が具現化しやすい基盤が醸成できている。全体的には落ち着き意欲的に学習できる児童が多いが、特別な支援や対応が必要な児童は少ない。

本校に隣接して野市幼稚園、野市保育所があり、日常的に交流できる環境にある。

2 学校の概要

(小学校)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計
学級数	4	4	3	4	3	3	6	27
児童数	98	103	96	107	81	107	11	603

教員数 50名

II 連携体制

1 連携校・園名

自校	香南市立野市小学校
連携校	香南市立野市幼稚園

2 幼小連携教育研究協議会の構成員

所属・機関・職名等
・香南市立野市小学校・校長, P T A会長
・香南市立野市幼稚園・園長, P T A会長
・香南市立野市保育所・所長, P T A会長
・高知県教育委員会小中学校課・指導主事
・高知県教育委員会幼保支援課・指導主事
・高知県教育センター教職研修部・チーフ
・香南市教育委員会学校教育課・指導主監
・香南市教育委員会子ども課・幼稚園係長

III 研究の内容及び成果等

【2年間の研究成果の要点】

1 特別支援教育の視点を重視した新入生の受け入れ体制づくり

今年度入学の新入生の実態把握と支援の方法について検討し、従来の特別支援に係る引継ぎをより充実させるとともに、学級編制を幼稚園・保育所の担任と小学校の教員が合同で行った。この結果、児童の情報を詳細に捉え、状況に応じた支援を行うことで、スムーズに入学することができた。

2 温かい人間関係をはぐぐむ交流活動

これまでも部分的、単発的に行われていた交流活動を、カリキュラムに位置付けていくため実践研究を行った。主に交流する学年は1年生と5年生とし、年長児との日常的な関係への発展を視野に入れ、1年生は生活科を、5年生は特別活動全般を核として、バディを作り交流活動を行った。交流活動によって、年長児は小学校生活に向けて憧れや期待を持つようになり、保護者の不安を解消することにもつながった。また小学生にとっても、自らの成長を自覚しながら、年長児に対するやさしさや思いやりの気持ちをもって行動できるようになる

などの大きな成果が見られた。

3 発達の連続性を確保する「スタートカリキュラム」の工夫

幼稚園・保育所の生活から小学校の生活への段差を小さくするため新入生へのスタートカリキュラムの実践研究を行った。登校してから始業前までの時間帯の居場所を作った「プレタイム」、時間を短く区切ったり、身体活動や具体物を操作したりしながら楽しく学べる「わくわくタイム」、未分化の学習活動から徐々に分化した教科の学習へとつないでいく「生活科」の在り方の3点に取り組んだ。子どもたちの思いを大切にしながら状況に応じた楽しい活動を設定することができた。

4 教職員の交流の活性化

取組の前後に教職員で意見交換をしたり、保育所や幼稚園の公開授業を見に行ったりした。これにより、入学以前の環境や年長児の状況をより詳しく理解するだけでなく、個々の児童の捉え方や支援の仕方などを学べた。児童の交流と同じく、教職員同士も回数を重ねるごとに、気軽に相談できる関係に進展することにつながった。

1 研究主題と研究の主な取組

(1) 研究主題設定のねらい

本校では「見てふれて学びをひろげるのいちの子」を研究主題に、地域の人、自然、社会にかかわりながら主体的に学ぶ児童の育成に取り組んできた。そこで児童の「主体的に生きる力」をさらに育成するために、幼稚園の教育活動や幼児の発達段階を理解しながら小学校での教育活動の改善に生かし、効果的な援助、教育内容や方法を改善していくことをねらいとして下記の3点に取り組む。

- ① 特別な支援を必要とする児童への支援
- ② 温かい人間関係を育む交流活動
- ③ 発達の連続性を確保するスタートカリキュラム

(2) 2年間の主な取組

平成20年度	(1) 教職員の交流 ① 授業公開による交流 ② 合同研修（講師招聘・グループ協議等） ③ 内容および具体的活動等の打ち合わせ (2) 先進校視察研修 (3) 交流活動 ① 第5学年2組と年長児の交流 ② 第1学年と年長児の交流 (4) 保護者への意識調査 (5) スタートカリキュラムの構想 (6) 新入生受け入れ体制づくり ① 特別な支援を要する園児の情報収集と家庭との連携 ② 保幼小教職員合同での新1年生の学級編制 ③ 特別な支援を要する新1年生への支援
平成21年度	(1) 新1年生スタートカリキュラムの実施 ① 始業まで楽しく過ごせる「プレタイム」 ② 楽しく学習に慣れていく「わくわくタイム」 ③ 生活科を軸とする合科関連の単元 (2) 保護者の意識調査（新入生保護者） (3) 全学年で新1年生を温かく迎えることをねらいとする特別活動の授業の設定 (4) 交流活動 ① 第5学年と年長児の交流…「学校行事」「特別活動」における交流 ② 第1学年と年長児の交流…「生活科」における交流

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 特別支援教育の視点を重視した新入生の受け入れ体制づくり

① 取組

次年度入学してくる新入生の実態を把握するとともに、状況に応じた支援体制を検討した。

ア 保育研究会や研究協議に参加し、園児の実態や保育の内容とともに、教員の思いや考えを理解した。

イ 新入生の学級編制を幼小の教員が合

同で行った。特に配慮の必要な児童の情報を具体的に出しながら、実態に適合する学級を編制した。

ウ 特別な支援が必要な園児を対象とする幼稚園・保育所の巡回相談等に、管理職・養護教諭・特別支援コーディネーターが参加して、より詳細な状況を把握し、次年度の担任につなげていくこととした。

エ 入学式前に、保護者と児童を学校に案内し、式場・教室の案内や担任との顔合わせをして、新入生が安心して登校できるようにした。

オ 入学式や対面式などの学校行事を幼小連携の視点で見直した。入学式に、交流活動を続けてきた新6年生が参加し、座席や教室への案内役を務めた。また対面式においても、新6年生と新入生と一緒に手をつないで入退場した。



「おはよう！今日からよろしくね！」

取り組む。

(2) 温かい人間関係をはぐくむ交流活動

① 取組

年長児との交流は、主に1年生と5年生で行うこととした。

ア 1年生と年長児の交流活動

1年生が自分の成長を感じられること、年長児の入学の期待を高めることをねらいとした。

a 平成20年度の交流活動

1月「休み時間に一緒に遊ぼう」

「名刺交換とパディづくり」

2月「野菜を一緒に植えよう」

「学校のことを教えてあげよう」

「野菜の収穫・一緒に食べよう」

b 平成21年度の交流活動

10月「休み時間に一緒に遊ぼう」

11月「焼き芋を一緒に食べて遊ぼう」

1月「一緒に昔遊びをしよう」

2月「学校のことを教えてあげよう」



「いっしょに食べるとおいしいね」

③ 成果(○)・今後の課題(●)

○ 保育所・幼稚園からの年長児の詳細な情報を踏まえて一緒に学級編制を考えることは、子どもの育ちを重視した引継ぎが実現するとともに、教職員間の交流としても有意義であった。

○ 入学式や対面式では、新6年生がパディを組んだ相手と手をつないで行動したことで、新入生の不安や緊張が少なく元気に安心して参加できた。また、6年生も最高学年としての自覚をより強める機会となった。

● 小学校の引継ぎ体制を整備し、重要な情報を確実に引き継いでいくように

イ 5年生と年長児の交流活動

昨年度の1クラスの実践の成果から今年度は年長児との交流を5年生全クラスが行い、思いやりやさしさの心をはぐくみ、最上級生になる素地を養うことをねらいとした。

a 平成20年度の交流活動

一学期「一緒に遊んで仲良くなろう」

二学期「エコハイキングをしよう」

2月「校舎を案内しよう（一日入学）」

3月「一緒に給食を食べよう」



「おねえちゃん、
だいすき！」

b 平成21年度の交流活動

- | |
|------------------|
| 7月「年長さんと仲良くなろう」 |
| 9月「運動会に参加してもらおう」 |
| 11月「一緒にお弁当を食べよう」 |
| 2月「校舎を案内しよう」 |
| 3月「一緒に給食を食べよう」 |

基本的には「学校行事」「休み時間」「お弁当の時間」などを使った交流を行う。事前に目当てや内容を、事後には振り返りの話し合い活動を位置付けることとした。



「この本みて
ごらん！
おもしろいよ！」

② 成果(○)・今後の課題(●)

ア 1年生と年長児の交流活動

- 一年目の交流は、小学校側が計画した活動に年長児を招待して行う形態が多かったが、この間に教職員の交流が自然に行われるようになった。二年目の交流活動は、幼稚園教員の考えや思いを聞きながら計画することができた。
- 「一緒に焼き芋を食べよう」は、
 - ①小学校も幼稚園も行ってた活動である、
 - ②小学校にとっては、焼き芋を焼く作業を幼稚園の先生方に見てもらえる、
 - ③年長児は焼き芋を待つ間小学校の校庭で遊べるなど、双方にとってこれまでの活動を生かした無理のない互惠性のある活動であると気づくことが

できた。この交流では、一緒に物を食べて同じ気持ちを共有できたことやその後に自由に遊んだことで、自然な交流が生まれた。お互いの教育内容を知り合うことで、無理のない活動の計画ができた。特に、1年生は生活科の内容をうまく生かして交流すると、計画も立てやすく、相手意識をもつことで学習が深まることが分かった。

- バディづくりに際しては、幼稚園と小学校が合同で行い、幼児・児童の情報を交流することができた。

イ 5年生と年長児の交流活動

- 5年生は、人とかかわる力を高めることをねらいとして年長児とかわってきた。当初、年長児に話しかけることもできなかつたり、年長児と本気で喧嘩をしたりする姿も見られた。しかし、交流を重ねることで、互いにかかわりが深まり、次第に声をかけ合い、一緒に活動することを楽しむようになった。また、5年生自身が級友の成長に気づき、見方が深まるなどの成果が見られた。
- 5年生においても、バディを設定することで自分のバディへの思いを深め、かかわりが深くなった。
- 5年生は、活動内容を決めている場合はそれに沿って行動できるものの、そうでない場合には、年長児と遊んだり過ごしたりする行動へ自然にはつながらなかった。その際、5年生の役割を自覚させ、個々の目標をもたせることをねらいとして話し合い活動を設定することが効果的だと分かった。
- 以上述べたように、交流活動は

年長児・小学生双方に互恵性のある活動であることが分かった。

(3) 発達の連続性を確保する「スタートカリキュラム」

① 取組

新入児にとって「段差」であると考えられる小学校の状況は、①教室で座席に座ることがほとんどである、②学習内容が決められている、③時間が決められている、④集団行動が基本となる、などである。これらの「段差」を小さくし円滑に接続するための内容を考えた。その際、新入児の保護者に実施したアンケートの結果を反映することとした。

ア 始業まで楽しく過ごせる「プレタイム」

「絵本」「積み木」「お絵かき」「読み聞かせ」「カルタ」などのコーナーを作り、新入児が行きたい場所を選び、学級に関係なく好きな友達と一緒に過ごせるようにした。



「ぼく、つみきだいすき！」

イ 時間を区切って楽しく活動しながら学習する「わくわくタイム」

一校時の45分を15分単位を目安に分けて設定した。内容は、養護教諭、司書教諭など新1年生の学校生活にかかわりの深い教員による「ミニ授業」、ゲームや具体物を使った楽しい学習、上級生の授業見学などを位置付けた。



「ほけんのせんせい、こんにちは！」

ウ 生活科を軸とする合科・関連的な単

元

「学校探検」から教科の学習につながる単元を設定した。昨年度バディを組んだ2年生の協力を得て、案内や活動のお手伝いをしてもらい、お礼の手紙を書くなど、活動から自然に学習につなげていくことができた。



「わあっ！ハムスターがいるよ！」

② 成果(○)と課題(●)

○ 「プレタイム」では、新1年生が無理なく楽しみながら始業時間までを過ごし、遊びのコーナーでは、他クラスの友達とも一緒に遊んで交流できていた。また、担任以外の教師と出会う機会にもなった。担任は教室で一人一人と向き合う時間が確保できた。

○ 「わくわくタイム」では、身近な生活の中から、児童の気づきが生まれ、学びにつなげていくことができた。子どもの意欲づけや学習へのスムーズな導入に効果があった。

○ 生活科での「学校探検」の活動を合科的に取り扱うことで活動が広がり、より効果が上がった。自分たちで作った地図を見て、上級生や特別教室の場所を確認し、休み時間に遊びに行く姿も見られた。

○ 2年生とは、学校探検の後も引き続き交流を行い、互いに学習内容が広がっている。

● 「わくわくタイム」が一時間目に確保できるように、工夫する。

(4) 教職員の交流

① 取組

ア 合同研修会の実施

- ・講師招聘研修
 - ・先進校視察研修「鳴門教育大学附属幼稚園・小学校」「香川大学教育学部附属幼稚園高松園舎・高松小学校」「奈良女子大学附属幼稚園・小学校」
 - ・授業研究への相互参加
- イ 幼児の実態の把握
- ・生活や作品の検証
 - ・行事への参加
- ウ 打ち合わせ
- ・交流活動の計画と振り返り



「幼小の教職員が
 同でバディを組ん
 でいます！」

② 成果(○)と課題(●)

- 幼稚園の活動に参加することで、子どもの学びを見取ることの大切さを再認識することができた。幼児教育において「学ぶ意欲を芽生えさせる場の設定や支援」を重視していることは、特に小学校の教師にとっても必要な視点であることを学んだ。
- 年長児は、小学校教員が考えている以上に、自分の棚に自分の持ち物を整頓して片付けられること、給食の配膳をすることなどが分かった。年長児のできることを踏まえ、小学校としてスタートしていく必要性を学んだ。
- 当初は、お互いの教育内容や考え方の違いを理解できずに、話がかみ合わなかったり、遠慮して意見が述べられなかったりすることもあった。実践を重ねていくうちに、双方の教員が何をねらいと考えるのかをお互いに理解しながら、それぞれがねらいの達成を図ることが大切だと分か

った。特に、事後の振り返りは、同じ場面についての見取りや考察を出し合うことで、互いの考えが理解しやすく、次につながる意見も出るようになった。

- 実践を継続することで、連携教育により児童が育つことを実感するとともに、次第に教員同士が気軽に行き来したり、意思疎通を双方向で図ったりするようになった。その中で、より実践的な交流の在り方があることに気づくようになってきた。

- 効果的な打ち合わせを設定する。

3 研究経過・成果の普及

高知県教育センターが主催する「平成21年度保幼小連携教育講座」において、研究発表と公開授業研究を行った。

1回目の8月24日(月)には、平成21年度の新1年生にかかわる「受け入れ体制の整備」「交流活動」と「スタートカリキュラム」を中心に研究発表を行った。また、11月13日(金)には平成22年度の新1年生にかかわる「年長児と5年生との交流活動」を授業公開し、取組について研究発表を行った。

保護者に対しては、学校長が取組全般について「学校便り」で知らせたり、年長児の保護者に対しても学校説明を行ったりした。

また、三学期にはこれまでの研究成果をパンフレットにまとめて配布する予定である。

4 今後の展望

- (1) 研究成果を生かした教育課程を実施するとともに、幼小連携教育の意義や理念を継承していく。
- (2) 新入生を温かく迎えることのできる学校全体の人間づくりを目指していく。
- (3) 学年・学級以外に、同じ地区に住む異学年の仲間づくりを考える。
- (4) 幼稚園、保育所の教職員と小学校教員の交流を推進する。

教育課程研究指定校事業実施要項

平成18年4月 1日 国立教育政策研究所長決定
平成21年3月30日 一 部 改 正

1 趣 旨

幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び中等教育学校（以下「学校」という。）における教育課程及び指導方法等について調査研究を行い，もって学校教育の改善充実に資する。

2 研究指定校事業の委嘱

- (1) 都道府県教育委員会，都道府県知事又は附属学校を置く国立大学法人学長は，都道府県教育委員会にあっては域内又は所管の学校，都道府県知事にあっては所轄の学校，附属学校を置く国立大学法人学長にあっては所管の学校のうち，教育課程研究指定校（以下「研究指定校」という。）による研究の希望がある場合には，適切な学校を選定し，別紙様式により，国立教育政策研究所に提出するものとする。
- (2) 国立教育政策研究所は，上記（1）により提出のあった内容を審査し，本事業の委嘱が適当と認めた場合，別途定める実施計画書の提出を求める。
- (3) 国立教育政策研究所は，上記（2）により提出のあった実施計画書が適切であると認めた場合，公立学校にあっては当該都道府県教育委員会，私立学校にあっては当該学校の設置者，国立大学法人附属学校にあっては当該国立大学法人学長（以下「都道府県教育委員会等」という。）に調査研究を委嘱する。

3 研究期間

研究期間は，原則として2か年とする。

4 指定校数

60校程度とする。

5 研究主題

研究指定校は，国立教育政策研究所が別に設定する研究主題に関し，研究を行うものとする。

6 研究指定校の運営等

- (1) 委嘱を受けた都道府県教育委員会等は，国立教育政策研究所と密接な連絡をとり，その援助と助言を受けて調査研究を行うものとする。
- (2) 国立教育政策研究所は，研究の円滑な実施に資するため，連絡協議会並びに研究協議会を開催する。なお，研究協議会は成果の普及のために公開することも検討する。

7 報告書等の提出

- (1) 研究指定校は，校内の研究体制を整備し，計画的，継続的に研究を進めるために，各年度の初めに実施計画書を，各年度の終わりに研究成果報告書を都道府県教育委員会等に提出するものとする。
なお，研究成果報告書の作成に当たっては，調査研究による児童生徒の変容（意識，態度，学力など），教職員や保護者等の意識の変容の把握などについて，アンケート結果などの定量的なデータを比較するなど，分かりやすい示し方を工夫する。
- (2) 委嘱を受けた都道府県教育委員会等は，研究指定校の実施計画書及び研究成果報告書をと

りまとめ、都道府県教育委員会及び国立大学法人学長においては直接、私立学校の設置者においては当該都道府県知事を経由して、国立教育政策研究所に提出するものとする。

なお、研究成果報告書については、第1年次の終了時に中間報告書を、研究の終了時に最終の報告書を提出するものとし、これらの様式、その他必要な事項については、国立教育政策研究所から別途連絡するものとする。

8 成果の普及

- (1) 研究成果報告書については、本事業の研究成果を普及するため、国立教育政策研究所においてその集録を編集し、一部または全部を修正・翻案し、文部科学省刊行物をはじめとした書籍、インターネット及びその他の媒体により公表することができるものとする。
- (2) 研究指定校においては、地域や学校の実態に応じて、成果発表会、公開授業、研修会等の開催、インターネットによる情報提供などの取組を実施することにより、本事業の成果を他校と共有し成果の普及を図るよう、積極的な情報提供を行うものとする。

9 経費

- (1) 国立教育政策研究所は、予算の範囲内で、各年度毎に研究に必要な所要額を都道府県教育委員会等からの請求に基づいて支払うものとする。
- (2) 委嘱金の支払いの対象となる経費及び各経費項目への配分額は、実施計画書のとおりとし、変更する場合はあらかじめ国立教育政策研究所に報告し、その指示を受けるものとする。ただし、各経費項目における配分額の変更増減が委嘱金額の20%以内、又は、5万円以内の場合には、この限りでない。
- (3) 委嘱を受けた都道府県教育委員会等は、各年度終了後速やかに別途定める収支精算書を、都道府県教育委員会及び国立大学法人学長においては直接、私立学校の設置者においては当該都道府県知事を経由して、国立教育政策研究所に提出するものとする。

10 その他

国立教育政策研究所は、必要に応じて、研究の実施状況及び経費の処理状況について実態調査を行う。

附 則

この規定は、平成21年4月1日から施行する。